Fire Emblem
ファイアーエムブレム
紋章の謎 VOL.4



●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

SUPER
QUEST
BUNKO

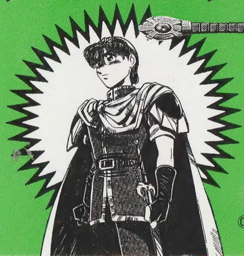
©1990、1993 Nintendo

Fire Emblem
ファイアーエムブレム
紋章の謎 VOL.4

●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

ファイアーエムブレム





光と闇に潜む謎が明かされたとき、戦いは終わりを告げ、一人の戦士が伝説になる！

©1990 1993 Nintendo

【小学館 スーパークエスト文庫
定価550円(本体534円)】

SUPER QUEST BUNKO

ファイアーエムブレム

紋章の謎

VOL.4

●小説
高屋敷英夫
●イラスト
おち よしひこ

「はい。この世に不思議な魔力を秘めた五つの聖なるオーブがあって、闇のオーブはそのひとつです」
マルスは大賢者ガトーに聞いたことをそのまま伝えた。
「闇のオーブには、それを持つ者に勇気を与え、苦しみを解き放ち、野心や欲望を増幅させる力があります。でも、魔力があまりにも強すぎるため、人間には扱うことができません。人間の怒りや嘆き、妬(ねた)みなどの感情に激しく反応し、持つ者の人格を崩壊させて悪魔に変えてしまうからです」

（本文より）

SQ

「はい。この世に不思議な魔力を秘めた五つの聖なるオーブがあって、闇のオーブはそのひとつです」
　マルスは大賢者ガトーに聞いたことをそのまま伝えた。
「闇のオーブには、それを持つ者に勇気を与え、苦しみを解き放ち、野心や欲望を増幅させる力があります。でも、魔力があまりにも強すぎるため、人間には扱うことができません。人間の怒りや嘆き、妬みなどの感情に激しく反応し、持つ者の人格を崩壊させて悪魔に変えてしまうからです」

（本文より）

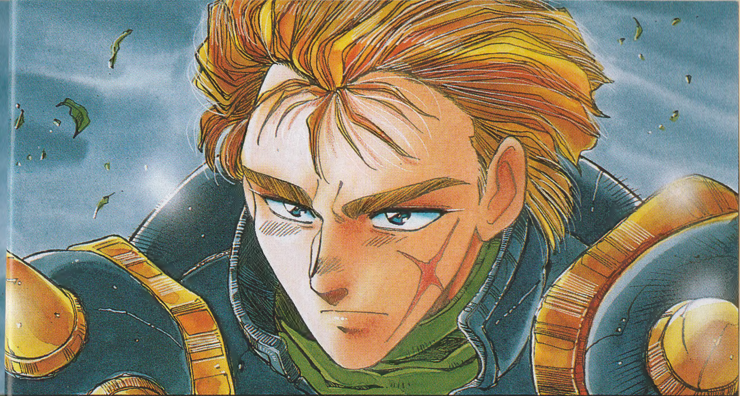
新時代のアミューズメントを創る
ゲーム娯楽誌!!
GAME-ON!
ゲームオン!
毎月3日発売!

凄まじい咆哮が響き渡ると、チキが人間の背丈よりも二〇倍もある巨大な神竜に姿を変えていた……。

ファイアーエムブレム



紋章の謎

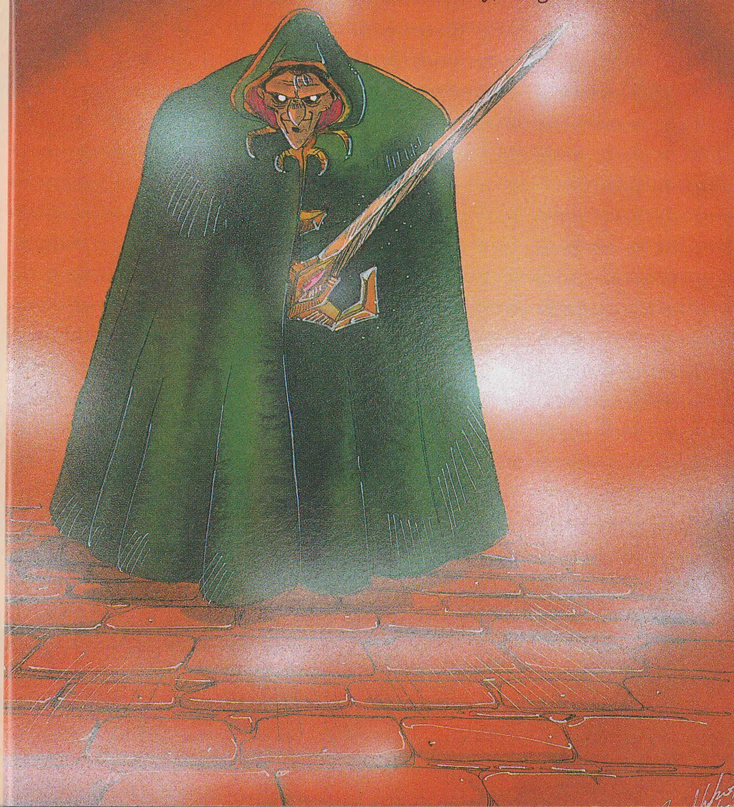




オグマとナバールの二人は冷たい北風が吹くなか、夜の樹海を野営地に向けて馬を飛ばした……。



「小僧よ——！　またしても
わしの邪魔をするのか！」
闇の大司祭ガーネフは鋭い
眼光でマルスを睨みつけた。





スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ファイアーエムブレム
紋章の謎 VOL.4

高屋敷英夫

イラスト
おち よしひこ

小学館

ファイアーエムブレム紋章の謎 ——登場人物紹介——

アリティア王国

アカネイア軍の手から王国を奪還し、人々は喜びに沸いている。

マルス
アリティア王国の王子。この物語の主人公





ジェイガン
騎士団軍師



エリス
アリティア王国の王女。

ドーガ 庸兵部隊長



ゴードン 弓部隊長



カイン



アラン 騎士団隊長





◀ルーク



◀セシル



◀ライアン



◀ロディ

▶リカード



▶サムトー



▶ウォレン



▶カシム



▶レイソル





◀ジュリアン



◀リンダ



◀フィーナ



◀マリーシア



◀ナバール

カダイン

アカネイア大陸の聖地。

▼ウェンデル





マリク　エルレーン



▲大賢者ガトー

▶バヌトゥ



▶チキ



▶チェイニー



タリス王国

ドルーア戦争後、マルスが落ちのびていた辺境の島国。

シーダ▶
タリス王国の王女。





◀オグマ

マケドニア王国

クーデターが鎮圧され、王国再建に取り組んでいる。

仮面の騎士◀シリウス





◀ジョルジュ

ミネルバ▶





◀ミシェイル

アケドニア王国の王子と王女。



◀マリア

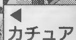


パオラ▶





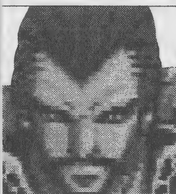
◀カチュア



▼マチス



アカネイア帝国



◀ハーディン
アカネイア帝国皇帝。



▲ネーリング

ボア司祭▶

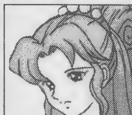


アストリア▶



▶ガーネフ





◀ニーナ

アカネイア帝国王妃。



▲ミディア

ビラク▼





▲ウルフ

ザガロ▼





▲ロシェ

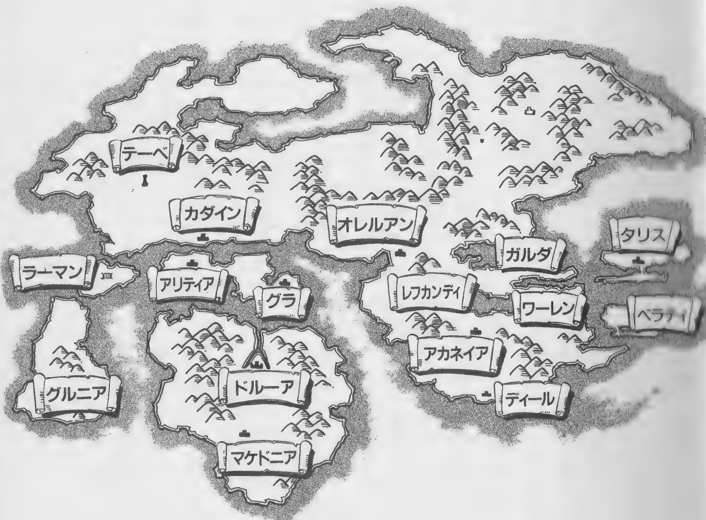


▲メディウス

目次

ファイアーエムブレム 紋章の謎 VOL.4

アカネイア大陸 全域


テーベ
カダイン
オレルアン
ラーマン
アリティア
グラ
ガルダ
タリス
レフカンディ
ワーレン
ベラティ
アカネイア
ディール
グルニア
ドルーア
マケドニア

前巻のあらすじ

「この世に、不思議な魔力を秘めた五つの聖なる宝玉が存在している」
聖都カダインでのこと、大賢者ガトーは魔道の秘術を使ってマルスに語りかけた。
「そなたも知っているように、光と、星と、大地と、そして命と、闇のオーブだ。闇のオーブは光のオーブと対をなす聖玉で、精神を極限まで高める力がある。所有する者に勇気を与え、苦しみから解き放ち、野心や欲望を増幅させる。また、戦いにおいても相手の精神を操作し、動きを封じてしまう力がある。人間の怒りや嘆き、妬みなどに激しく反応してその感情を増幅させ、人格を破壊して悪魔に変える。ハーディンはどこかでそのオーブを手に入れ、心を闇に奪われたのじゃ。ハーディンに闇のオーブがある限り、そなたに勝ち目はない。闇のオーブに対抗できるのは、光のオーブだけじゃ。もし欲しければ、わしのおる氷竜神殿に

来るがいい」――と。

このガトーの言葉に従い、アリティアの遠征隊はガトーの住む北の大地を目指して、マーモトード砂漠を北上した。

人間で氷竜神殿まで行ったのは勇者アンリだけだという。

熱砂の行軍は、困難を極めた。

また、恐ろしい砂嵐に、何度も襲われた。

さらに、野蛮で凶暴な砂の部族や巨大で獰猛(どうもう)な飛竜の群れに強襲された。

飢えと渇きと過労の極限にあった遠征隊が古代都市テーベにやっとたどり着いたのは、聖都カダインを出発してからちょうど六〇日目の夜のことだった。

この古代都市テーベで、先の戦いでマルスたちと一緒に戦ったチェイニー・ブライルが大賢者ガトーに命じられてマルスを待っていた。

遠征隊は水を補給し、疲れ切った体を休め、生気を取り戻すと、チェイニーの案内でふたたび砂漠を北上した。

砂漠のあとは、活発な地殻活動が続く火炎山脈が待ち受けていた。

いたるところで噴火があり、噴き出した灼熱(しゃくねつ)の溶岩が大河となって流れていた。

また、火竜の谷では火竜の群れと岩山の洞窟(どうくつ)を住処(すみか)とする凶暴な蛮族に襲われたが、マルスたちはこの蛮族との戦いで、ウェンデル大司祭が探していた一二個の星のかけらのうち、

最後に残っていた星のピスケスを幸運にも手に入れることができた。
だが、この山脈越えの道中で、チェイニーがマルスたちに驚くべき事実を告げた。
暗黒竜王メディウスがマケドニア北部の竜の祭壇で眠っているというのだ。
「前の戦争で死んだと言いたいのはわかるが、マルスの前に勇者アンリだってメディウスを倒したはずだ。だが、メディウスは眠りについただけだった。その証に、先の戦争で一〇〇年振りに復活したではないか」
チェイニーはあ然としているマルスたちにそう言うと、竜族の説明をした。
竜族には飛竜族、火竜族、氷竜族、地竜族、魔竜族、神竜族の六種族があるという。
だが、このほとんどが滅びつつあるのだという。
およそ一〇〇〇年ほど前のこと――。
竜族には人間にはおよびもつかない知能と能力があった。
ところが、あるとき、突然滅亡の日がやってきたという。
まずばったりと子供が生まれなくなった。
やがて、理性を失い、野生化して暴れ出すものが続出した。
族長や長老たちは種の終わりが近づいてきたのだと告げた。残された道はただひとつ、竜であることを捨て、竜人として生きることだけだ――と。
そして、その言葉を信じた者は、竜としての本能を竜石に封じて、人間の姿をした竜人と

なったが、竜としての誇りを捨てられずに竜人になれなかった者は、やがて理性を失い、退化し、獰猛な獣になったのだという。

竜族のなかで神竜族に次いで強大な勢力を持っていた地竜族はその後者で、長老たちの意見に従わずに集団で逃亡し、今のドルーア地方に棲みついたが、やがて理性を失い、同じく野生化した魔竜や飛竜とともに人間を攻撃し、人間を大陸の片隅に追い詰めた。

このとき、人間を守るために戦ったのが神竜族の王ナーガだという。

ナーガは壮絶な戦いの末に地竜たちを倒すと、眠りについた地竜たちをドルーアの地中に封印し、その力が衰えることがないように、光と、星と、大地と、命と、闇の五つのオーブを埋めこんだ『封印の楯』を作ってラーマン神殿に残した。

これらの五つのオーブは神竜族に古くから伝わる聖玉で、それぞれに特殊な力が秘められていて、これらの五つの聖玉が封印の力を生み出しているという。

さらにナーガは身を守る術を持たない人間のために自分の牙を切り出し、竜を制するという剣を作った。この剣が神剣ファルシオンだという。

そして、ナーガは神殿に強力な呪文をかけて、神竜族以外の竜族を近づけないようにすると、残った一族に人間を見守るように言い残し、五〇〇〇年におよぶ命を終えた。

この王ナーガの娘がなんと今氷竜神殿で眠っているチキで、ナーガの命令を忠実に守っているのが大賢者ガトーだという。

地竜族の王だったメディウスが、部族に逆らってただひとりマムクートになったが、やがてドルーアの地に他のマムクートを集めて竜人族の帝国を作ると、ガトーはアンリに神剣ファルシオンを与えたのだという。

また、六〇〇年ほど前、ラーマン神殿に祀(まつ)られていた封印の楯が何者かに奪われて壊されたが、ガトーはこの楯を取り戻すために、長い間探し歩いたという。

だが、せっかく集めた五つの聖玉も、先の戦争でまた散ってしまった——と。

このことをマルスたちに教えたチェイニーもまた神竜族のひとりだった。

遠征隊は、荒涼とした凍土地帯を経て、吹雪(ふぶき)の氷雪地帯をひたすら北上した。

そして、聖都カダインを出発してから九七日目、やっと氷竜神殿に着いた。

ガトーはマルスに光のオーブを授けると、ウェンデル大司祭が差し出した一二個の星のかけらを魔道の復活の呪文で一瞬のうちに一個の美しい蒼(あお)いオーブに蘇(よみがえ)らせて言った。

「マルスよ、これが星のオーブじゃ。これもそなたに授けよう」

「ガトーさま、なぜこのような大事なものをわたしに?」

「封印の楯を完成できるのは、そなたしかおらぬ」

「このわたしが、封印の楯を?」

マルスは弾(はじ)かれたように手にしている紋章の楯を見た。

火炎山脈で封印の楯と五つのオーブのことをチェイニーから聞かされたとき、マルスはもしかしたらこの楯となにか深い関わりがあるのではないかと思っていたからだ。

邪悪なる者の手から世界を守る者のみに与えられるものだと言い伝えられているこの楯の中央に燃え盛る炎の紋章がある。その紋章から五つの方角に、五個の台座のような飾りが彫(ほ)られている。

「そなたが持っているその紋章の楯こそが――」

「奪われた封印の楯だとおっしゃるのですね？」

確かめるようにマルスがガトーを見ると、ガトーはおもむろに頷(うなず)いて言った。

「今から六〇〇年ほど前のこと――。ラーマン神殿から封印の楯を盗んだ盗賊が、恐れ多くもその楯から五つの聖玉をぬき取って、オーブとして売り飛ばした。そして、その金で兵を雇い、同時に盗んだ三種の武器を使って、大陸を統一した。やがて、アカネイア王家となったその盗賊は、自分に幸運を呼んだ楯を、王家の紋章とした。それが、そなたが今持っているその炎の紋章、ファイアーエムブレムじゃ」

アカネイアを建国した初代国王が封印の楯を盗んだ盗賊だったという史実を、マルスたちはあ然として聞いていた。

「とにかく、急いで欲しい」

ガトーは熱い眼差(まなざ)しでマルスを見つめながら言葉を続けた。

「封印の楯が壊されてからすでに六〇〇年——マケドニアの地下に封印されている地竜が目覚めるころだ。あの邪悪な地竜が数百、いや数千と目覚めようとしている。そうなれば、もはやわれらに打つ手はない」

その夜、遠征隊はガトーの呪術で一瞬にして神殿の祭壇の前から姿を消した——。

遠征隊は、はるか北の大地から瞬時にして時空を越え、アランの故郷であるアリティア北西部のキロワの村に移動すると、アリティアに駐留しているアカネイア軍の情報を集めながら、祖国奪還の機をうかがっていた。

そして、反撃の狼煙(のろし)をあげたのは、木枯らしが吹く寒い夜のことだった。

遠征隊とキロワ近隣の郡の予備兵三三〇名から構成されたアリティア軍が、アカネイア軍が駐留しているメロー砦(とりで)を強襲し、砦を奪還した。

「メロー砦陥落」の報(しら)せはアリティア城にいるアカネイア軍の総司令官ウィロー司祭に大きな衝撃を与えた。

ウィローはさっそくウプタ砦のエイベル将軍に命じ、元アリティアの騎士で武器商をしているアベルの名を使ってマルスを誘(おび)き出し、殺害しようと企(くわだ)てた。

だが、もう一歩のところで失敗すると、今度はアストリアの部隊を派遣した。

ハーディンが王女ニーナと結婚するときに、オレルアン国からアカネイアに赴(おもむ)き、総司令

官と将軍にまで出世したウィローとエイベルは、アカネイア騎士団の生え抜きのエリートであるアストリアを疎んじていて、アストリアの部隊を玉砕させるつもりだった。
だが、ウィローの司令に疑問を抱きながら任務に赴いたアストリアには、ウィローの思惑に反し、アリティア軍とまともに戦うつもりはなかった。
アリティアの戦士や騎士たちがいかに優秀であるかを、よく知っていたからだ。
メロー砦ではアリティア軍とアストリアの部隊の緊迫した睨み合いが続いた。
ところが、この時点で、マルスたちは心強い朗報を二つ手にしていた。
ひとつはアベルの部下からのもので、アベルが密かに王都で五〇〇〇名の解放軍を組織していて、いつでも一斉に蜂起できる状態にあるという。
もうひとつは、援軍を要請するためにグルニアとカダインに行っていたパオラとカチュアの姉妹からのもので、グルニアのシリウスが率いる四五〇名のグルニア軍と、マルスの幼なじみで、マルスの姉エリスの恋人であるマリクが率いる四〇〇名のカダインの魔道軍が合流し、アリティアの旧ガレア砦に向かっているという。
事態が急変したのは、睨み合いが始まってから一〇日後の夜半のことだった。
アリティア軍が突如アストリアの部隊を強襲し、不意をつかれたアストリアの部隊は慌てふためき、悲鳴をあげながら遁走した。
このとき、部隊のなかにアストリアの姿がなかった。

ウプタ砦に呼び出され、なぜ攻撃しないのかエイベルに問い詰められていたからだ。
数日後、このアストリアが、旧ガレア砦に向かっていたアリティア軍の前に現れた。
ウィローとエイベルに対する限りない失望と屈辱感にとらわれていたアストリアは、なぜ親友のジョルジュが祖国を裏切って敵対するアリティアに寝返ったのか、その理由をどうしても知りたくなって追って来たのだ。
ジョルジュとリンダは、マルスが王妃ニーナからアカネイア王家の家宝である紋章の楯を授かったこと、ハーディンが闇のオーブに心を奪われていることを説明し、一緒に戦おうと説得したが、アストリアは即答できずにそのまま馬で駆け去った。
だが、ウプタ砦へ帰ったところでアストリアはエイベルの兵に包囲され、緊急時に職務を放棄した罪で逮捕されてしまった――。

その日――夜通し降り続けた雪が明け方になってやっとやみ、白銀に埋もれたウプタ盆地の原野や森の美しい雪景色が、夜明けの鈍い光のなかに、その姿を現した。
冷えきった透明な空気が音を消し去り、不気味なほど静まり返っていた。
この静寂を切り裂いて、突然、ウプタ砦にけたたましい警笛が鳴り響き、砦に結集していた二五〇〇名のアカネイア大軍が慌てて配置についたが、予期しなかった状況に、兵士たちは激しく動揺した。

砦の目と鼻の先の森の前に、二七〇〇名の大軍がいたからだ。
アリティア、グルニア、カダインの三国連合軍だった。
旧ガレア砦でアリティア軍がグルニアとカダインの連合軍と合流したあと、さらにアリティアの各地方から一七〇〇名もの予備軍が駆けつけ、この大軍となったのだ。
と、夜明けを告げる王都の大聖堂の朝一番の鐘の音が聞こえてきた。
この鐘の音が戦いの合図だった。
歴戦の戦士と三〇〇の騎馬部隊が真っ白な新雪を踏み散らして勢いよく突進し、そのあとに二四〇〇の歩兵部隊が喊声をあげながら怒濤のように続いた。
アカネイア軍は砦の西門前の雪原で迎撃した。
だが、連合軍はアカネイア軍を突破すると、一気に砦内に突入した。
そのときだった、突然、砦の東の方向から勇ましい雄叫びが聞こえてきたのは。
砦の東に雪に埋もれたカダイン街道が白い一本の帯のようにのびていて、その先にやはり雪に埋もれた王都と荘厳華麗なアリティア城の美しい景観が広がっている。
そのカダイン街道の新雪を踏み散らしながら、武器を持った大勢の市民たちが砦に向かって来た。
その数は四〇〇〇、いや五〇〇〇はいる。
鐘の音とともに一斉に蜂起した王都の解放軍だった。

予期せぬ解放軍の出現に、エイベルは撤退の機を失ってうろたえていた。
そのエイベルの前に剣をかざして颯爽と立ちはだかった武将がいた。
元部下の手を借りて地下牢から脱出したアストリアだった。
アストリアの心にもはや迷いはなかった。王妃ニーナから紋章の楯を授けられたマルスと一緒に戦おう。それが王妃ニーナの命令に従うことになる――逮捕されたときに、そう決心したからだ。
アストリアの剣が鋭く宙を一閃し、エイベルの断末魔の叫びが砦内に響き渡った。
その直後、砦内にどっと解放軍が雪崩こんで、あっという間に中庭を埋めた。
やがて、解放軍や連合軍から鬨の声があがった。
そして、地下室の牢から救出されたアベルがロディやルークの若き騎士たちに支えられてマルスの前に姿を現すと、解放軍から大きな拍手が沸き起こった。

一時半後――。
砦から移動した解放軍がアリティア城の対岸を埋めつくし、さらに四五〇艘あまりの小舟に分乗した連合軍が海上から城を包囲した。
ウプタ砦に総動員をかけたために、城を守っているアカネイア軍は、一五〇の騎馬と八〇〇の歩兵しか残っていなかった。

アカネイア軍の敗北はすでに時間の問題だった。
ウィローは己の命が助かることしか考えていなかった。
そして、城の波止場に停泊している二隻の軍船に出航を命じ、包囲していた連合軍の小舟の群れを強行に突破させた。
その行く手を阻んだのが、海賊スペリオ・レイソルの三隻の大型帆船だった。
船団は軍船に火矢を放って攻撃し、それに連合軍も参戦した。
だが、乗船していると思われたウィローの姿はどこにもなかった。

四分の一時後――。
海上での戦いに圧勝したレイソルの船団と連合軍の小舟が、城の波止場や城壁の外の岩場に接岸したときには、すでにシリウスとマリクが率いる連合軍が、軍船に乗り損ねたおよそ六〇〇名のアカネイア軍を制圧していた。
また、地下牢に閉じ込められていたアベルの恋人であるエストもパオラとカチュアの二人の姉に救出されていた。
天守塔の尖塔(せんとう)からアカネイア軍旗が降ろされ、代わってアリティア国旗が掲げられると、解放軍や連合軍から思わず鬨の声があがった。
鬨の声はやがて国歌の大合唱に替わった。

アリティア城がアカネイア軍の手に落ちたことをマルスたちが知らされたのは、桜が満開のホルム海岸だった。
あれから九箇月、屈辱と苦難の長い旅の末に、やっと祖国を奪還したのだ。
遠征隊に参加した騎士たちは同じ感慨を胸に国歌を聞いていた。
流れる涙をとめることができなかった。
宮殿の地下室にある宝物殿（ほうもつでん）には先の戦争で手に入れた五つの聖玉のひとつである大地のオーブが安置されていた。
マルスがその美しい翠（みどり）のオーブを持って宝物殿から出ると、アストリアが飛んで来て、ウィローの姿は城のどこにもなかった――と報告した。
そして、半時後、アストリアは一〇〇〇名の捜索部隊を組織すると、幾手にも分かれてアリティア中央部の町や村へ飛んで行った。
王都の広場や通りは、国名を絶叫する人々や、国歌を合唱する人々、輪になってアリティア民謡を歌い踊る人々で、びっしりと埋まっていた。
この日、王都は夜遅くまで、祖国奪還の喜びに沸いた。
あと八日で、アリティアは新しい年を迎えようとしていた。
北風に吹かれて、王都の跳ね橋のたもとにどす黒く変色した斬首（ざんしゅ）がさらされていた。

その報せを聞いて城から駆けつけたのはアストリアだった。
斬首は、口に小さな細長い金属の棒のようなものを銜えていた。
いや、正確にいえば、銜えたのではなく、何者かによって差しこまれたのだ。
ウィローが愛用していた爪磨きのやすりだった。
新しい年が明けた一〇日目の朝のことだった——。

一五〇〇名の三国連合軍がハーディンと戦うためにアカネイアを目指してアリティア城を出発したのは一の月の二五の日のことだった。
それに先立ち、マルスは国と城をアベルに託し、カインに同行を命じた。
また、予備兵のなかから、六〇〇名の志願兵を募り、連合軍として同行させた。
そして今、連合軍はグラ唯一の要塞であるツベル砦を目の前にしていた。
グラ国のツベル砦——五年前、この地が忌まわしい悲劇の舞台となった。
マルスの父、コーネリアス国王が率いるアリティア軍がこの砦で兄弟国であるグラのジオル将軍の裏切りにあって、コーネリアスが討ち死にし、多くのアリティアの兵士が異国の露と消えたところだ。
だが、連合軍が砦に到着すると、砦はもぬけの殻だった。
駐留していた四〇〇名のアカネイア軍が、連合軍の攻撃に恐れをなして、前日のうちにす

でに遁走していたのだ。

　そして、連合軍の到着を見計らったように、王女シーマの親書を持ったグラの兵士が砦に馬を飛ばして来た。

　親書には、お会いして話がしたい――としたためてあった。

　先の戦争でグラは滅亡した。

　戦後、アリティアが統治することになったが、ハーディンが皇帝に即位すると、ジオル将軍の長女シーマを擁立（ようりつ）して、グラは独立して本来の姿に戻るべきだと主張し、マルスもなんの疑いもなくそれを受け入れた。

　だが、それはアリティアからグラを奪うためのハーディンの陰謀だった。

　王女シーマは単なる飾りだった。傀儡（かいらい）でしかなかった。

　植民地と化したグラは、想像を絶する惨状におかれていた。

　働き盛りの男たちが雑役、荷役、奴隷としてアカネイアに強制連行され、農作物の収穫量は最悪だった先の戦争のときよりもさらに落ち、ほとんどないに等しかった。

　寒さと飢えから、この冬だけで五万もの人が死んでいた。

　一時後、連合軍は内海に突き出た小高い丘に建つグラ城に入った。

　二年前――この城でマルスはグラ軍を倒し、ジオル将軍の首を討ち取っている。

「あなたに会ったら、まず父のことを謝りたかった……」

シェイルを殺されてシーマは自分を憎んでいるのではないかとマルスは思っていたが、シーマはそんなことはおくびにも出さずに言った。そして、言葉を続けた。
「ハーディン皇帝はわたしにグラを独立させると、このグラを利用するだけ利用した。それに対してわたしはなにもすることができなかった。そのために、グラの国民を苦しめ、救いようのないどん底まで突き落としてしまった。こうなった以上、あなたにお願いするしかない。どうか、グラの国民をアリティアの国民として受け入れてほしい。そして、グラの地を再建し、多くの国民が人間らしい暮らしができるようにしてほしい」
シーマの決意は固かった。
「わかりました。でも、わたしには、果たさなければならない大事な使命がある。その使命を果たすまで、あなたにこのグラを再建してほしい」
マルスは食料や物資の面で最大限の援助をすることを約束して城をあとにした。
半時後、北東に向かって行軍していた連合軍に緊張が走った。
目の前にグラ海峡にかかる国境の石橋が姿を現したからだ。
そして、その先に、広大なアカネイアの大地が横たわっていた——。

第11章　暗黒帝王

1

アカネイア帝国はアカネイア大陸東域のそのほとんどを占める広大な国で、アリティアの八倍もある国土にはおよそ一五五〇の町や村があり、人口もアリティアの三倍強に当たる一五〇万の人々が住んでいる、アカネイア大陸一の大国だ。

グラ海峡の国境の石橋を渡ってアカネイア帝国に入ると、カダイン街道は東へ向かってのびていて、このカダイン街道を徒歩で五日ほど行くと、人口一万八〇〇〇人の宿場町レフカンディに着く。

オレルアン王国との国境に近いところに位置しているこのレフカンディの町は、帝都パレス、ワーレン、ガルダに次ぐ帝国第四の都市で、アカネイア大陸の交通の要衝として、またアカネイア北部の交易や文化の中心として、昔から栄えてきたところだ。

このレフカンディがカダイン街道の東の起点だった。
また、西へ向かうカダイン街道のほかに、このレフカンディを起点として、北、東、南の三方にも大きな街道がのびている。
北へ向かうとオレルアン街道で、オレルアン王国の王都オレルアンへと続き、東へ向かうとガルダ街道で、帝国第三の都市である東海岸のガルダに出る。
南へ向かうとアカネイア街道で、その先にアカネイア大陸最大の都市である人口三万七〇〇〇人の帝都パレスがある。
レフカンディから帝都まで、徒歩で一五日ほどの行程だ。
グラから帝都まで行くのに、隊商や旅の商人や旅人たちは、レフカンディ経由でこのアカネイア街道を南下する。
だが、レフカンディと帝都の間に、いくつものアカネイア軍の砦や要塞があった。
マルスが率いるおよそ一五〇〇名のアリティア、グルニア、カダインの連合軍は、それらの砦や要塞を避けるために、別ルートで帝都へ向かっていた。
アカネイア帝国の西域に、南北に長い、険しいアカネイア山脈が横たわっている。
連合軍は、グラ海峡を渡ってアカネイア帝国に入ると、カダイン街道を右に折れ、このアカネイア山脈に沿った海岸沿いの街道を南下した。
そして、キグラという小さな漁村を通過すると、海岸沿いの街道からそれ、アカネイア山

脈を東西に結んでいるアドリア街道に入った。

この街道を通って山脈を越え、山脈の東にあるアドリアの村に出たら、山脈に沿って南下し、帝都パレスに接近しようと、マルスたちは考えていた。

だが、街道とは名ばかりで、道は狭くて険しく、行軍は困難を極めた。

また、キグラの村で得た情報によると、街道の途中にあるアドリア峠には、かつて難攻不落の要塞として知られた旧アドリア城があり、一年ほど前からこの古城に騎馬五〇、歩兵三〇〇のオレルアン軍がアカネイアの援軍として駐留しているという。

連合軍の兵士の数は古城のそれの三倍あるが、古城の攻防戦となると、かなりの犠牲者が出ることを覚悟しなければならなかった。

アカネイア帝国に渡って五日目の昼過ぎ、連合軍の目の前に姿を現した旧アドリア城の威容を見て、さすがのマルスたちも戸惑いの色を隠せなかった。

古城は想像以上に強固な造りをしていた。

両側から急峻な山が迫っていて、その狭い空間を堰きとめるように、四、五層建ての建造物よりも高い、見あげるような石垣の城壁がそびえている。

マルスたちは機をみて一気に古城に攻めこむつもりでいたが、一から作戦を立て直さざるをえなかった。

一方、連合軍の出現に、古城は騒然となった。

一方、連合軍の出現に、古城は騒然と

緊急を告げる警笛の音が城内に響きわたると、兵士たちは慌てて巡視路の所定の位置について弓を構えた。

だが、目の前の大軍がアリティアの精鋭を中心とした連合軍だとわかると、兵士たちに大きな衝撃が走った。

この古城にも、アリティアの遠征隊がマケドニアの軍部のクーデターを制圧したあと、アカネイアに反旗を翻してグルニアのラング将軍率いるアカネイア軍をも制圧し、さらにグルニアとカダインの援軍を得て、ウィローとエイベルが率いるアカネイア軍を倒した——という情報が帝都パレスを通じてもたらされていたからだ。

この古城から東へ徒歩で一時ほど行った山脈の麓にあるアドリアという村に、ハーディンの実兄であるオレルアン国王グローディン・ルイ・オレルアンが騎馬一〇〇、歩兵五〇〇の軍を率いて滞在していた。

ただちに国王に援軍を要請するために東門から早馬が飛び出して行った。

古城の軍を指揮しているのはビラク・スタード、サガロ・ベンシル、ウルフ・ライジュ、ロシェ・ウスタの四人の若い騎士たちだった。

四人はかつて草原の民と呼ばれている奴隷だったが、先の戦争でオレルアンの騎士団を指揮していたハーディンによって、奴隷の身から解放され、騎士として雇われた。

そして、マケドニアとドルーアの連合軍からオレルアン王国を奪還するために、ハーディ

ンの部下として、マルスやアリティアの騎士たちとともに戦った。
戦後、四人はオレルアン王国の騎士として王都オレルアンに残ったが、ハーディンがニーナ王女と結婚してアカネイア帝国の皇帝となった今でも、奴隷から解放し、騎士団に雇ってくれたハーディンに恩義を感じ、忠誠を誓っていた。
「くそっ！　ついにアカネイアまで来たかっ！」
「やはりハーディン皇帝が言っておられたことが正しかったんだ！」
「このまま放っておけば、世界はマルス王子の思いのままになる！」
ビラクが言い、サガロとウルフもそのあとに続いた。
帝都パレスからの情報をそのまま鵜呑み（うの）みにしているので無理もなかったのだが。
「でも、ぼくには……！」
異を唱えたのは一番年若の今年一八歳になるロシェだった。
「あのマルスさまがそんな野望を持つなんて考えられない！」
「なに!?　おまえ、マルス王子の肩を持つのか!?」
「皇帝が嘘（うそ）をついていると言うのか!?」
「だって、マルスさまがそんな方ではないということをみんな知ってるでしょ！」
「確かに、あの方は素晴らしい人だった！」
「だが、それは先の戦争でのこと！」

「だが、それは先の戦争でのこと」
「皇帝はアカネイア大陸をひとつにまとめるために尽力しているというのに、今ではこうしてよく皇帝のやることに楯ついてばかりいるではないか！」
「たとえマルス王子でも、皇帝やアカネイアに逆らう者は敵なのだ！」
「で、でも……！」
「いい加減にしろ、ロシェ！」
「おまえは皇帝の恩義を忘れたのか⁉」
「われわれが今あるのは皇帝のお陰なのだぞ！」
「皇帝のためなら、命を捧げてもいいと誓ったはずだ！」
三人の先輩にそう言われ、ロシェはそれ以上の口答えができなかった。
騎士たちは徹底抗戦を決意し、連合軍の攻撃に備えながら、援軍を待った。
ところが、頼みの援軍は現れなかった。
代わりに、オレルアン国王の手紙を持って早馬が引き返して来た。
早馬が東門を飛び出して行ってから、ちょうど半時後のことだった。
そして、国王の手紙を見た四人の若き騎士たちは驚いた。
手紙には――
『決してマルス王子と戦を交えてはならぬ。
ただちにマルス王子と連合軍をアドリアの村へご案内しろ――』

と、命じてあった。
「どういうことだ、これは!?」
「国王はなにを考えておられるんだ!?」
「まさか、国王はマルス王子と手を結ぼうと……!?」
「ばかなことを言うな！　仮にも国王はハーディン皇帝の実兄だぞ！」
騎士たちは国王の真意を計りかね、あれこれ推測した。
だが、いかにハーディンに忠誠を誓っているとはいえ、国王の命令は絶対である。
四分の一時後、古城の東門が開き、使いの馬が連合軍に向かった。
ロシェだった。攻撃態勢を敷いている兵士たちの後方で、マルスたちがちょうど作戦会議を開いていたが、顔見知りの歴戦の戦士たちがロシェを見て驚いているのを尻目に、ロシェはマルスの前に進み出ると、
「お久し振りです――」
懐かしそうに微笑(ほほえ)み、国王の手紙のことを告げた。

冬の山間(やまあい)の日暮れは早い。
オレルアンの若き騎士たちの案内で連合軍がアドリアの村に着いたときには、一帯は夜の闇にひっそりと沈もうとしていた。

闇にひっそりと沈もうとしていた。
　この地方にはたくさんの温泉地が散在していて、アドリアもそのひとつだった。
　ロジェによると、オレルアン国王には神経痛の持病があって、毎年この時期になると、アドリアに滞在し、湯治するのが習わしになっているという。
　国王は、アドリアの小さな集落を一望できる小高い丘にある長老の屋敷で、マルスとジェイガンを迎えた。
　実の兄弟なのに、国王とハーディンほど顔が似ていない兄弟も珍しい。
　マルスたちが知っている国王は、精悍ではっきりした顔立ちのハーディンに比べ、小肥りで見るからに人の好さそうな丸顔をしていた。
　だが、二年振りに会った国王の顔にはその面影がなく、すっかり痩せ衰えていた。
　足元もおぼつかなく、歩行するのに侍女の手を借りなければならなかった。
「今回アカネイアに来たのには、ここで湯治する以外に、もうひとつ目的があった」
　ひと通りの挨拶のあと、国王は言った。
「実は……昨年の夏の初めのことだが、ニーナ王妃から手紙をもらった」
「ニーナから？」
　思わずマルスはジェイガンと顔を見合わせた。
「手紙には、ハーディンのことで、ぜひ会ってお話ししたいことがある……と書いてあった。だが、そのころ、わしは体調を崩していて、長旅に耐えられる状況ではなかった。ま、そん

なわけで、年が明けてからやって来たのだが……」
「では、ニーナと会ったのですね？　元気でしたか？」
「いや、それが……」
国王は暗い顔で首を横に振った。
「ハーディンが会わせてくれなかった」
「な、なぜ？」
「あなたには関係のないことだと言ってな。夫婦のことでつまらぬ口出しをすると、兄といえども容赦はしない、とまで言い切った」
「そんなことまで……」
「王妃のことだけではない。わしには、ハーディンがなにを考え、なにをやろうとしておるのか、さっぱりわからん。なぜラングを派遣してグルニアを支配したのか、なぜグラを独立させ、植民地にしたのか、なぜウィローとエイベルにアリティアを襲撃させたのか……。最初はわしも、世界の人々を救うために……というハーディンの言葉を信じ、オレルアン軍をアカネイアに派遣して、手薄になったアカネイアの警備に当たらせた。だが、オレルアンの地からアカネイアのやることを見ているうちに、やがてハーディンに疑問を抱くようになった……」
マルスとジェイガンは驚きながら聞いていた。

マルスとジェイガンは驚きながら聞いていた。

というのも、一連のアカネイアの侵略行為を宗主国であるドルーア国が背後から強力に支援していると思っていたからだ。

だから、古城を通されたときも、このアドリアに案内されて来てからも、なにか策略があるに違いないと考え、警戒していた。

だが、国王は、アカネイアの行為を冷静に見ながら、兄として心を痛めていたのだ。

「わしには、ハーディンが皇帝に即位してから、人が変わったとしか思えない。今回、久し振りにハーディンと会ったが、人相まで悪くなったようにわしには見えた。心優しくて、正義感の強かったあのハーディンがなぜ……」

「それは……」

マルスが答えた。

「ハーディンが闇のオーブに心を奪われてしまったからです」

「闇のオーブ？」

「はい。この世に不思議な魔力を秘めた五つの聖なるオーブがあって、闇のオーブはそのひとつです」

マルスは大賢者ガトーに聞いたことをそのまま伝えた。

「闇のオーブには、それを持つ者に勇気を与え、苦しみを解き放ち、野心や欲望を増幅させる力があります。でも、魔力があまりにも強すぎるため、人間には扱うことができません。

人間の怒りや嘆き、妬(ねた)みなどの感情に激しく反応し、持つ者の人格を崩壊させて悪魔に変えてしまうからです」

「そうか。ハーディンはそんな恐ろしいものに心を……」

「実は……一年ほど前、わたしはニーナからこれを授かりました」

マルスが手にしている楯を見せると、

「そ、それは……!?」

さすがの国王も驚いた。

「アカネイア王家の家宝、紋章の楯！　邪悪なる者の手から世界を救う者のみに与えられるものだと言い伝えられているその楯を、王妃がマルス殿に!?」

「はい。でも、この楯だけでは邪悪な者の手から世界を救うことはできません。この楯と五つの聖なるオーブで封印の楯を完成させなければ」

「封印の楯？」

「およそ、一〇〇〇年ほど前のことです……」

マルスは、滅びつつある竜族のことを——、暗黒竜王から人間を守るために立ちあがった神竜族の王ナーガのことを——、勝利したナーガが封印の楯を作って眠りについた地竜を地中に封印したことを——、そして、六〇〇年ほど前、その封印の楯を盗んだ盗賊がその楯を壊し、五つのオーブを売り飛ばして得た金で兵を雇い、大陸を統一したことを——、やがて

壊し、五つのオーブを売り飛ばして得た金で兵を雇い、大陸を統一したことを
アルイーア王家と名づけたその富豪は、自分に幸運を呼んだその楯を王室の家宝にしたという
ことを――話した。

さらに、封印の楯が壊されてから六〇〇年、ドルーアの地に封印されている数百、いや数千の地竜が今にも眠りから目覚めようとしている――と、告げると、

「マルス殿、その不思議な魔力を秘めた五つの聖なるオーブというのは……？」

オレルアン国王が尋ねた。

「はい、光と、星と、大地と、命と、そして闇のオーブです。わたしは旅を続けながら、そのなかの三つのオーブを手に入れました。残るは命と闇のオーブだけです。闇のオーブはハーディンが持っていますが、でも命のオーブの行方は……」

「そうか。それなら、このわしもマルス殿のために少しは役に立てそうだな」

国王は微笑むと、側近に命じて宝石箱を持って来させた。

「わしの体が健康になればと思って旅の商人から大金で買い取ったものだが、持つ者に不思議な生命力を与えると言われている宝玉だ」

宝石箱のなかに、美しい真紅のオーブが納められていた。

光や星や大地のそれとまったく同じ大きさをしている。命のオーブだった。

「遠慮なく使うがいい。邪悪なる者の手から世界を救うために役立つなら、わしの命や健康などどうでもよい」

驚いているマルスに命のオーブを手渡して、国王は言葉を続けた。
「わしは、今日マルス殿と会って、やっと決心がついた。わしはこのアカネイアからわが軍を撤退させようと思う。だから、ハーディンと戦うときは、わしのことなぞ気にせずに戦ってほしい。戦いでハーディンが死んでも、それはやむをえぬこと。それがやつの運命だったと諦めるしかない。それに、マルス殿……」
ひと呼吸おくと、国王は熱い眼差しでマルスを見つめた。
「見ての通り、わしの体調はよくない。あとどれだけの命かもわからぬ。跡を継ぐ子供もおらぬ。頼みとしたハーディンも、このようなことになってしまった。そこで、マルス殿、わしにもしものことがあったときには、あなたにオレルアン王国と国民を守ってもらいたい。すべてを、あなたにゆだねたい」
「し、しかし……」
「いや、こうなった以上、あなたしかおらぬ」
国王はマルスの手を握って頭を下げた。
「頼む……！　この通りだ……！」

アカネイア平野の真ん中を北から南へと流れているアカネイア川は、平野のほぼ中央にある大きな中洲（なかす）で二つの流れに分かれ、やがてまたひとつに合流する。
この中洲の北側の丘陵地に荘厳華麗なパレス城がそびえ、南側の平坦地に人口三万七〇〇〇の帝都パレスの街が広がっている。
帝都の街は宮殿や大聖堂などがある広場を中心に造られていて、ここを起点に、北と東と西の三方に帝都の幹線である大きな通りがのびている。
北へ行くと、パレス城の城門だ。
東へ行くと、東アカネイア川にかかる東の街門があり、やはりこの橋を渡ると、港町ワーレンに続いているワーレン街道が東へ向かってのびている。
西へ行くと、西アカネイア川にかかる西の街門があり、この橋を渡ると、南北に二つの街道がのびていて、北へ向かうとレフカンディに続いているアカネイア街道で、南へ向かうとディールに続いているディール街道だ。
だが、これらの立派な通りとは対照的に、広場の南側一帯は、小さな通りや路地が複雑に入り組んでいて、食料品店、肉屋、道具屋、食堂、衣料品店、雑貨商、貴金属店、武器商な

どがびっしりと軒(のき)を並べていた。

このなかを買い物客や旅人が行きかい、威勢のいい客寄せの声が飛ぶ。

辻(つじ)では、旅芸人や曲芸団やジプシー楽団などの見せ物が人気を集めていた。

また、いたるところに、物乞いや、浮浪者もたむろしている。

帝都一の繁華街として知られているノルダの市場だった。

この市場の通りを、粗野な形(なり)をした二人の男が広場の方からやって来た。

ひとりは体軀(たいく)のいい屈強な男で、もうひとりは普通の体軀の若い男だ。

二人は、どこから見ても旅の流れ者といった感じだ。

やがて、二人は角にある一際目立つ大きな建物の前で足をとめた。

見せ物と賭博(とばく)を目的とした闘技場で、屈強な男は闘技場の派手(はで)な広告塔や看板を忌(い)ま忌ましそうに見ると、さっさと先に歩き出し、若い男は慌ててそのあとを追った。

屈強な男はかつてこの闘技場で奴隷剣闘士として強制的に働かされていたオグマで、若い男はジュリアンだった。

この二人から一定の距離を置き、やはり粗野な形をした若い男がそのあとに続いた。

旅の流れ者に扮(ふん)した若き騎士ルークだった。

さらに、そのあとに、旅の若い女と背中に長剣を携えた背の高い男が続いた。

女はフィーナで、男はナバールだった。

かれらの目的は、帝都の偵察と情報収集だった。

だが、五人一組だと人々の目を引くので、目立たないように二班に分かれて、帝都の西の街門を潜ったのだ。

この闘技場の隣の区画に、帝都でも屈指の高級料理店「タリス」があった。

店名からもわかるように、経営者はタリス国出身で、店は海産物をふんだんに使ったタリスの郷土料理を食べさせることで有名だった。

一〇年ほど前――奴隷剣闘士として働かされていたオグマが、逃亡を企てた仲間の身代わりになって、見せしめのために広場で鞭打ちの刑を受けているときに、アカネイアに来ていたシーダの一行が通りがかって、見かねたシーダが莫大な金額を経営者に払ってオグマを引き取ったが、そのときシーダの一行はこの料理店に行く途中だったのだ。

オグマとジュリアンはこの料理店の前まで行くと、店の横にある使用人の通用口になっている狭い路地に消え、しばらくしてルークが、さらにちょっと間を置いてフィーナとナバールがこの路地に消えた――。

連合軍がアドリアの村を出発したのは、一八日前の早朝のこと。

その後、連合軍は山脈の麓の道なき道をひたすら南下し、昨日の夕方、やっと目的地である帝都パレスの西方に広がる原生林の樹海に到着した。

この樹海を推薦したのはアカネイア出身のジョルジュとアストリアだった。

樹海から帝都までは、徒歩で半日、馬を飛ばせば半時ちょっとの行程だ。

アカネイア軍に気づかれずに帝都近郊で潜伏するのに、距離的にも地形的にも、この樹海が恰好(かっこう)の場所だった。

そして、今朝、旅の流れ者に扮した五人が、馬を飛ばして樹海を出て行った。

五人は帝都の手前にある小さな集落まで行くと、そこでジョルジュやアストリアが知り合いの長老の家に馬を預け、三班に分かれて徒歩で帝都へと向かったのだ。

暦はすでに二の月から三の月に替わっていた——。

その夜、樹海の一帯を、冷たい北風が吹いていた。

水が温(ぬる)み、木々が芽吹くこの季節にしては珍しいことだった。

原生林が密生している樹海のなかは、いくら風が強くてもその影響を受けることはないが、せわしなく梢(こずえ)を鳴らす音が、寒さをさらに厳しいものに感じさせた。

オグマとナバールの二人が馬を飛ばして樹海の野営地に帰還したのは、帝都の街門が閉じてから一時ほどあとのことだった。

ルークとフィーナとジュリアンの三人は、アカネイア軍の動きを偵察するために料理店「タリス」に残っていて、なにかの動きがあれば、すぐさまジュリアンとルークの二人が報告に飛んで来る手筈(てはず)になっていた。

告に飛んで来る手筈になっていた。
帰還したオグマとナバールがただならぬ様子でマルスのもとへ駆けつけると、すでに遠くから北風に混じって接近してきた慌ただしい蹄音を聞きつけた歴戦の戦士たちがマルスのところに集まっていて、緊張した顔で二人を迎えた。
「二の月の一二の日の早朝――」
前置きもなく深刻な顔でオグマが報告した。
「われわれがアドリアの村を出発した翌朝のこと。ミディア殿がハーディンに不満を持つ騎士や兵士を率いてパレス城で蜂起し、宮殿を占拠したそうです」
それは戦士たちにとって思いも寄らぬ出来事だった。
「しかし、ミディア殿の軍はわずか一〇〇名あまり。一時後にはハーディンの軍に完全に制圧され、蜂起は失敗に終わったそうです」
戦士たちは愕然としながら、反射的にミディアの恋人であるアストリアを見た。
アカネイア聖騎士団のエリート騎士であるミディア・オーエンは、かつてのアカネイア軍の最高司令官だったグリオ・オーエン伯の娘で、先の戦争でグルニア軍によって占拠されていたパレス城でマルスたちに救出されたあと、戦争が終わるまでマルスたちとともに戦った歴戦の戦士のひとりだ。
そして、ともに戦った戦士で、ミディアとアストリアの仲を知らない者はない。
「で、ミディアはどうなったのだ!?」

すかさずアストリアが尋ねた。

さすがのアストリアも動揺を隠せなかった。

心配のあまり声が上擦り、ぎゅっと握りしめた拳が震えている。

「首謀者として、城の地下牢に捕らえられているそうだ」

落ち着け——と言わんばかりに、オグマはアストリアの肩をやさしく叩いた。

ミディアはもの心ついたときから男の子として父オーエン伯に育てられたせいか、女性でありながら、度量といい、剣の腕といい、頭脳といい、武将としての必要なものをすべて備えた優れた騎士である。

あのミディアなら、たしかに反旗を翻しても不思議はない——。

伸びやかに成長した肢体に聖騎士の軍服をまとった颯爽としたミディアの姿と、化粧っけがまったくないが、自信と誇りと生気に満ちた美しいその顔を思い浮かべながら、マルスは思った。

だが、もう少し待ってくれたら——と思うと、無念でたまらない。

同時に、もっと早くアカネイアに来ていれば——悔いも感じていた。

「しかし——」

オグマはマルスに顔を向けて言葉を続けた。

「帝都の広場では見せしめのために毎日のように反乱軍の処刑が行われていて、今日までに

「帝都の広場では見せしめのために毎日のように反乱軍の処刑が行
[illegible]に、最初は広場を埋めつくした見物人たちも、今ではだれひとりとして広場に近寄らないそうです。わずかに処刑される者の身内が駆けつけるだけで、処刑が行われる間は、帝都の通りから人影が消え、恐ろしいほどひっそりとして、処刑された者たちの悲鳴だけが空に響き渡るのだそうです」

戦士たちは、その情景を想像し、絶句した。

「では、いつなんだ!? ミディアの処刑は!?」

アストリアはオグマに詰め寄った。

「わからぬ。だが、処刑のある前日に、かならずその名簿が広場に張り出されるそうだ。その名簿にミディアの名前があったら、すぐさまルークとジュリアンが報(しら)せに飛んで来ることになっている」

「いずれにせよ……」

独り言のようにジェイガンがマルスの横でつぶやいた。

「ミディアを救出するのは、処刑の日しかありませんな」

「今にでも飛んで行って救出したい気持ちはよくわかる」

唇を噛(か)みしめ、拳を握りしめながら、ハーディンへの怒りと悔しさと無念さにうち震えているアストリアにマルスが言った。

「だが、今はどうしようもない。しかし、われわれはミディアを見殺しにするようなことは絶対にしない。どんなことがあってもかならず救出してみせる」

マルスの言葉に戦士たちも同意して強く頷いた。

そのとき、一際強い北風が吹きぬけて行き、梢が激しく音を立てた。

「アカネイア軍のことですが――」

一瞬の沈黙のあと、最初に口を開いたのはオグマだった。

「ティナ・バルサーの情報によれば――」

オグマは料理店「タリス」の女経営者の名前を口にした。

「ネーリング将軍が率いる帝都の軍は騎馬部隊三〇〇、歩兵部隊一五〇〇。ハーディンが率いるパレス城のそれも同じく騎馬部隊三〇〇、歩兵部隊一五〇〇。また、帝都近郊にあるアルダとルーセとアダナの三つの砦には、それぞれ騎馬部隊一〇〇、歩兵部隊四〇〇が駐留しているそうです」

「アルダの砦は帝都の北――」

すかさずジョルジュが説明を加えた。

「アカネイア街道沿いにあります。またルーセの砦は帝都の南、ディール街道沿いに、アダナの砦は帝都の東、ワーレン街道沿いにあり、いずれも帝都までは馬を飛ばせば半時で駆けつけることができる距離にあります」

つけることができる距離にあります」

「それから――」

オグマはさらに報告を続けた。

「レフカンディ、ガルダ、ワーレン、ディールの四つの都市にそれぞれ二〇〇の騎馬部隊と八〇〇の歩兵部隊が、さらにアカネイアにある二〇の砦や要塞には、計一〇〇〇の騎馬と六〇〇〇の歩兵が警備に当たっているそうです。しかし、兵士のほとんどは金で雇った者ばかりで、数は多くても、軍の組織としての質はかなり低いものと思われます。また、今のところ、アカネイア軍には特に目立った動きはないそうです」

「はて……？」

ジェイガンは首を傾げてマルスと顔を見合わせた。

「アカネイア軍の情報網からすれば、われわれがアカネイアに上陸した数日後には、その報せがハーディンやネーリングのもとに届いておるはず……。それでも目立った動きもないということは、なにか策でもあってのことでしょうか……？」

連合軍がアカネイアに上陸してからすでに一箇月近い。

ジェイガンの疑問はもっともだった。

「帝都の街ではどうなのだ、われわれの噂は？」

マルスがオグマに尋ねた。

「少なくても半月前には、帝都の街にもわれわれの噂が届いているはずだが」

「これもティナ・バルサーから聞いたのですが、マルスさまのご指摘の通り、われわれがアカネイアに上陸したという噂が帝都の街に流れてきたのは、ミディア殿が逮捕されてから数日後のことだったそうです。でも、人々はほとんど関心を示さなかったそうです。というのも、帝都でのミディア殿の人気は絶大で、逮捕されたときは、さすがの帝都の人々も衝撃を隠せなかったのだそうです。ですから、逮捕されてから、人々の最大の関心事は、ミディア殿がいつ処刑されるか——ということで、ミディア殿の身を案じながら、帝都はその話題で持ちきりだそうです」

「それほどまでにミディアは帝都の人々に支持されているのか」

「はい。そのこと以外は、帝都の街は何事もなく平穏で、ノルダの市場もいつものように賑わっていました。それから、ボア司祭のことですが——」

帝都の大聖堂の司祭であるスミルト・ボアはアカネイア国の宗教界に絶大なる力を持つ最高司祭で、先の戦争でグルニア軍によって占拠されていたパレス城でミディアとともにマルスたち連合軍に救出された。

そして、戦後、ふたたびアカネイアの最高司祭として、ニーナ王妃の片腕として、アカネイア復興のために働いた。

「ハーディン皇帝の怒りに触れ、トナンの村で隠遁生活を送っているそうです」

「トナンの村?」

「トナンの村?」
思わず聞き返したのはジョルジュだった。
「知っているのか?」
「はい。ここから馬で一時半ほど南に行った小さな村です」
マルスの問いにジョルジュが答えると、
「マルスさま……」
ウェンデル大司祭が声をかけた。
ボア司祭はウェンデルの弟子に当たる。
明日にでも、ぜひ会いに行きましょう——ウェンデルの顔はそう言っている。
もちろん、そのつもりだ——マルスはその目を見て頷いた。
オグマの報告がひと通り終わり、ミディア救出の作戦会議に移ったときだった。
北風の音に混じって蹄音が接近し、戦士たちは警戒して立ちあがった。
だが、警備兵に案内されて来た訪問者は見覚えのある若者だった。
オレルアン王国の若き騎士ロシェだった。
ロシェはマルスの前に跪(ひざまず)くと、
「国王の許しを得て、追いかけて参りました!」
目を輝かせて願い出た。
「わたしもマルスさまと一緒に戦わせてください!」

3

トナンは山間にある八〇戸ばかりの小さな集落だった。
この集落からさらに奥に入った山中に、崩れかけた石造りの古い建造物があった。トナンの旧修道院の建物だった。
三〇年ほど前までは、ここは由緒ある修道院としてアカネイアでは知られていたが、今では廃墟(はいきょ)と化し、広い敷地だけが当時の名残(なごり)をわずかにとどめている。
ボア司祭はここで小さな畑を耕しながら、ひとりで自給自足の生活をしていた。
ジョルジュの案内でマルスとウェンデルがこの旧修道院を訪れたのは、オグマとナバールが帝都の偵察から帰還した翌日の夕暮れのことだった。
突然の訪問者に、ボアは一瞬自分の目を疑った。
無理もなかった。北グルニアに遠征したジョルジュが、敵国の王子であるマルスと、カダインの修行時代の師であるウェンデルを伴っていたからだ。
だが、マルスたちもボアの変わり果てた姿にあ然としていた。
マルスが知っているボアは恰幅(かっぷく)のいい男で、肌艶(はだつや)もよく、頭髪も黒々としていた。
だが、目の前にいるボアにはその面影がまったくなかった。

異様なほど痩せ細って、ひと回りもふた回りも体が小さくなっている。
頭髪もほとんど白くなっていて、一〇歳上のウェンデルよりも老けて見えた。
ジョルジュがマルスの側についた経緯を話すと、
「そうですか、リンダ殿から紋章の楯を受け取られたのですね」
ボアはほっとしたようにマルスが持っている楯を見た。
そして、それが間違いなくアカネイア王家の紋章の楯だとわかると、
「いつの日か、マルスさまがわたしのところに会いに来られるのではないかと思っていました。雨露をしのげるだけのところですが……」
と、奥の部屋に招いた。
部屋には、魔道の神を祀った粗末な祭壇と、藁敷きのベッドしかなかった。
ボアは蠟燭を灯そうとして左手一本で苦労していた。
見かねたジョルジュが、代わって蠟燭に火をつけたが、
「どうしたのだ、ボア。右腕は？」
ウェンデルが訝って尋ねると、
「これは……」
ハーディンに剣で斬りつけられて――とボアは説明した。
傷は治ったが、二度と物を持てない腕になっていた――と。

「ハーディンの怒りに触れてここに飛ばされたと聞いたが、一体なにがあったのだ、ハーディンとの間に？」

またウェンデルが尋ねた。

「なぜ、ハーディンがそんなひどいことを？」

ボアは沈黙のあと、おもむろに話し始めた。

「ご存知のように、ハーディン公とニーナさまがご結婚なされたのは、ちょうど二年前の二の月のことです。しかし、すんなりと二人の結婚が決まったわけではありませんでした。先の戦争が終わってすぐのこと、戦後の荒れ果てたアカネイアを再興するためには、なんとしても王を迎えねばならぬ……われわれアカネイアの要職にある者たちのだれもがそう考えました。そこで、さっそく人選に入りました。そして、それにふさわしいお相手は、お二人しかおられない……という結論に達しました。オレルアン王の弟であられるハーディン公と、アリティアの王子であられるマルスさま、あなたさまです……。われわれは最終的な選択をニーナさまにゆだねました。しかし、ニーナさまはもう少し待って欲しいと言われて、二箇月、三箇月……といたずらに時間が流れて行きました。わたしはついに我慢ができなくなって、その年の暮れに、どうしても年内に決めて欲しいとニーナさまに哀願し、決断を迫ったのです。すると、ニーナさまは、マルス王子にはシーダ姫という将来を約束した方がいるからだめだと言われ、結局ハーディン公に決められたのです」

「待ってください」
マルスが口を挟んだ。
「それではニーナがあまりにもかわいそうではありませんか。アカネイアが再興のために王を必要としていたのはよくわかりますが、ニーナには……」
――愛するグレイユ・カミュがいる。いや、いた。
二人は互いに愛し合っていた。
当時としては、敵対する国同士の騎士団の名将と王女の許されぬ恋だったが、口には出さなくても、二人の気持ちは深いところで、強く繋がっていた。
「しかし、カミュ殿は戦死なされたというではありませんか」
「たしかに噂はそうだった。でも、だれもそれを確かめた者はいなかった」
当時、だれもが噂を信じ、カミュが生きているとは考えもしなかった。
白い仮面で顔を隠し、シリウスと名乗って現れると、だれが想像できたろう。
「それに、ニーナは戦死したと噂されていたカミュのことを思い、毎日悲しみの涙にくれていたと聞いています。ニーナの気持ちを考えて、一年、いや二年待ってやれば――」
カミュの生存がはっきりしたのに――そう言おうとして、マルスは口を噤んだ。
今さら、カミュが生きている――と告げてもどうにもならないからだ。
カミュもそのことを望んでいない。

いや、逆に、ニーナの気持ちを思い、正体が明かされるのを拒否している。
そのために、わざわざ仮面をし、偽名を使っているのだ。
「わたしとしても、ニーナさまのお気持ちを考えると辛かった。しかし、国のためにはやむをえなかったのです。一刻も早く結婚なされ、アカネイアを再興して欲しかった。だが、そのことを聞かれたハーディン公は大変お喜びになられた。アカネイアの王位につかれることよりも、ニーナさまに選ばれたことの方が、よほど嬉しかったようです」
「わたしも、ハーディンがニーナに心を寄せていることは知っていた。おそらく、ハーディンもニーナのためなら命を惜しまないほど、ニーナを愛していたのだろう。でも、ハーディンはカミュとニーナとのことを知らなかったから喜んで結婚したのであって、知っていれば絶対にその話は受け入れなかったはずです」
「たしかに、マルスさまの仰る通りです。そこで、わたしはカミュ殿とニーナさまのことは秘密にし、また、ニーナさまにもそのような素振りだけは決してなさらぬようにと、お願い申しあげました。しかし、ハーディン公は鋭いお方です。結婚してすぐに、ニーナさまの心が自分にないと気づかれた……。そして、大変苦しまれた……。ひとり部屋に閉じ籠って、朝から酒をあおり、だれとも会わなくなってしまわれた……。その心の隙をついて現れたのが、ガーネフだったのです」
「ガーネフ!?」



驚いてマルスは思わず聞き返した。
「ガーネフが生きているというのですか⁉」
ウェンデルもジョルジュも驚いてボアを見ていた。
先の戦争で、マルスはガーネフの左胸を剣でひと突きにし、命を奪っている。だが、
「はい、生きております」
ボアは確信を持って答えた。
「たしかに、ガーネフはマルスさまの手にかかって死んだものと思われていました。ところが、マルスさまの剣先がガーネフの左胸を突き刺したその瞬間に、ガーネフは二種類の魔道の秘術をかけたのだそうです。ひとつは、瞬時にして時空を越えて移動する秘術で、もうひとつは生命力回復の秘術……」
「では、わたしが確認した死体は一体なんだったのですか⁉」
「おそらく、そのときガーネフは一種の仮死状態にあったのではないかと思われます。そして、マルスさまが死体を確認したあとに秘術が効き、ガーネフの肉体は瞬時にしてドルーアの地に移動したのです。また、数日後には別の秘術の効果が出て、奇跡的にガーネフの意識が蘇(よみがえ)ったのです」
「マルスさまには信じられないかもしれませんが――」
あ然としてボアの話を聞いていたマルスにウェンデルが付け加えた。

「魔道の魔術を究めた者なら、そのような術を使うことも可能なのです」
ウェンデルにそう言われると、マルスは反論できなかった。
いくら半信半疑でも、ボアが言うように、ガーネフが生存しているのが事実なら、それを事実として認めるしかなかった。
「そのガーネフがハーディン公のところに現れたのは、お二人の結婚式から四箇月後のことでした……。旅の魔道士に扮したガーネフがハーディン公の部屋に忍びこみ、闇のオーブをハーディン公に献上したのです。失意のなかにあったハーディン公は、たちまち闇のオーブに心を奪われ、その日以来、すっかり人が変わられてしまったのです。そして、ニーナさまを無視して、何事も自分の思いのままになさるようになってしまわれた……。こんなことになるなら……ニーナさまとハーディン公を結婚させるのではなかった……」
ボアは肩で大きく溜め息をつくと、
「国を思うあまりに、わたしは取り返しのつかない過ちを犯してしまった……」
白くなった頭を抱えてうなだれた。
「それで、ニーナはそのことを――」
マルスが尋ねた。
「ハーディンが闇のオーブに心を奪われたことを知っていたのですか？」
「はい。最初は、ハーディン公の人が変わられたことに、ニーナさまはただただ驚かれてい

らっしゃいましたが、皇帝に即位したハーディン公がラング将軍を総司令官に命じてグルニアに出兵させてから、しばらくしたある夜のこと……。ニーナさまは闇のオーブを相手にひとりでお話をなされているハーディン公のお姿を目撃なされたのだそうです。異様なほど目を光らせ、口元に笑みを浮かべて、闇のオーブに話しかけておられる不気味なハーディン公のお姿に、ニーナさまはお言葉では言い表せないほどの衝撃と恐怖を覚えられたのだそうです。闇のオーブがハーディン公のお心を支配している――そう直観されたニーナさまは、このままではハーディン公が邪悪なる者と化し、やがてこの世界を破壊と滅亡に導くのではないか――そんな不安にかられるようになられたのです。そこで、ニーナさまは邪悪なる者の手から世界を救う者のみに与えられると言い伝えられているアカネイア王家の家宝である紋章の楯を、マルスさまに渡すようにとリンダ殿に命じられたのです。ところが、昨年の夏の終わりのことです。北グルニアの遠征から帰国されたハーディン公に、紋章の楯を持ち出されたことがばれ、ニーナさまは宮殿の自室に幽閉されてしまわれたのです。そして、九の月の初旬のことでした。なんと、ハーディン公はガーネフにニーナさまをお渡しになられたのです」

「ガーネフに!?」

マルスはまた驚いてウェンデルと顔を見合わせた。

「以前から、ガーネフはニーナさまを狙っていたのです。暗黒竜王が復活するためには、高

貴なシスターの血が必要だ――と言って。そして、ついにニーナさまを生け贄として連れ去ったのです」
「高貴なシスターの血を――!?」
ふと――マルスはアカネイア軍にアリティア城が襲撃されたそのときから行方がわからなくなっている姉のエリスのことを思い出した。
エリスもニーナと同じシスターの身である。
そして、マケドニア城でクーデターが起きたときに、謎の魔道士によって連れ去られたマチスの妹で、ジュリアンが心を寄せているレナも、またマケドニア城からやはり謎の魔道士によって連れ去られたマケドニアの王女で、ミネルバの妹であるマリアも、エリスやニーナと同じシスターである。
では、エリスも、レナも、マリアも――!?
その共通項に気づいたとたん、思わずマルスは大声をあげそうになった。
今までなんの手がかりもなかった三人の行方不明の謎が一本の糸で繋がったのだ。
そして、ニーナ同様、エリスも、レナも、マリアも、竜王復活のための生け贄としてガーネフの手に渡っているのだ――マルスはそう確信した。
同時に、その奥でうごめいている恐ろしい陰謀もはっきりと見えた。
暗黒竜王の復活のために、高貴なシスターの血を必要としているガーネフが、ハーディン

を利用し、裏で巧妙に操っているのだ——ということが。
すべてが、ガーネフが仕組んだ罠だった——ということが。
そうとも知らず、ハーディンが野望と欲望のなすがままに、邪悪なる者の手先となって大陸を混乱に陥れているのだ——ということが。
そして、ハーディンもまたその犠牲者のひとりだ——ということが。
「それで……」
ボアは言葉を続けた。
「わたしもついに我慢ができなくなってハーディン公に抗議すると、ハーディン公は逆上のあまり、いきなり剣をぬかれて……」
やり切れない気持ちでマルスたちがボアの不自由になった右腕を見ると、
「わたしが、幽閉されているニーナさまと密かに連絡をとっていたことが気に入らなかったのでしょう。そのこともあって、わたしはこの地に送られてしまったのです。マルスさま、お願いです……」
ボアはマルスを直視すると、
「どうか、ニーナさまをお救いください」
両手を合わせ、深々と頭を下げた。
マルスは頷くと、わたしたちと一緒に行って行動をともにしよう——と誘った。

ボアの変わり果てた姿や、ここでの孤独な生活を想像すると、忍びないものがある。
ウェンデルとジョルジュも、マルスと同じ思いだった。
だが、ボアは首を横に振った。
「お言葉はありがたいのですが……ハーディン公のお怒りに触れてここに送られたこととは関係なく、ここでの生活は、取り返しのつかない過ちを犯したわたしに魔道の神が与えた罰だと受けとめております。ですから、魔道に仕える者として、わたしはここで神に祈りを捧げ、自分の罪を償っておるのです……」
その目に強い意思がこめられていた——。

帝都のあるアカネイア平野は日毎に暖かさを増していた。
さすがに夜は気温が落ちて寒さに震えることもあるが、日中はやわらかな陽光が降り注ぐ日が多くなり、ときにはうっすらと汗ばむこともあった。
あと、一箇月もすれば、アカネイア平野には美しい花々が咲き乱れる。
春は確実にもうそこまで来ていた。
この日も、午前中は穏やかに晴れあがっていた。
だが、午後になると、冷たい風が吹き、急に空の雲行きが怪しくなった。
そして、夕闇が迫るころには、湿気のある大粒の雪が降り始め、一時後には、アカネイア

平野は白銀の世界に姿を変えていた。
三の月のこの地方のこの時期にしては珍しいことだった。
マルスがボアと会ってから一〇日後のことだ。
この雪をついて、二頭の騎馬が蹄音を轟かせて樹海に向かって疾走して来た。
旅の流れ者に扮して帝都の偵察をしていたルークとジュリアンだった。
二人の姿を見て、歴戦の戦士たちに緊張が走った。
「申しあげます――！」
マルスの前に進み出たルークが報告した。
「ミディア殿の処刑の日時が決まりました！　処刑は明日の正午です！」
いずれこのときが来ると覚悟を決めていた歴戦の戦士たちに動揺はなかった。
いつでも対応できるようにすでに作戦や手順は決めてある。
報告を冷静に受けとめながら、戦士たちはぐっと気持ちを引き締めた。
だが、ルークの次の一言に、さすがの戦士たちも驚きを隠せなかった。
「それから、明日は――ハーディン皇帝の三五回目の誕生日だそうです！」
「なに!?」
マルスは驚いて聞き返した。
「自分の誕生日にわざわざ処刑を行うというのか!?」

「はい！」

「な、なんというやつじゃ――！」

マルスの横でジェイガンが忌ま忌ましそうに舌打ちをした。

戦士たちも騒然としていた。

「それで――」

マルスは戦士たちを鎮めてルークに尋ねた。

「帝都の人々の反応はどうだ？」

「今まで処刑と聞いても、ほとんどの人が見て見ぬ振りをしていたのですが、今度ばかりはさすがに動揺は隠せないようです。帝都は今、ミディア殿の噂で持ちきりです！」

「帝都の警備に当たっているネーリング将軍の部隊に、なにか変化はあるのか？」

「いえ！　今のところ、特にありません！　通常の警備態勢です！」

ルークの報告が終わると、戦士たちはさっそく準備にかかった。

雪の勢いは衰える様子がなかった。

雪は、音もなく降り続いた――。

ちょうど、そのころ――。

パレス城の地下牢にいるミディアのところにハーディンが現れた。

ミディアが牢に捕らえられてからすでに一箇月になるが、今までに一度もハーディンが牢に顔を見せたことがなかった。今夜が初めてだった。
いずれ自分の処刑の日が来る。そのときは、聖騎士らしく、いさぎよく死のう——逮捕されたときからミディアはそう覚悟していた。
だが、突然のハーディンの出現に、さすがのミディアも一瞬だが動揺した。
ついに来たか——と思ったのだ。
そのミディアの感情の動きを素早く見てとったハーディンが、不気味な笑みを浮かべながら言った。
「さすがは、ミディアだ。おれがここへ来た意味がわかっているようだな」
その一言で、処刑は明日だ——と、ミディアは確信した。
ハーディンを倒すために自分とともに立ちあがった騎士や兵士たちが次々に処刑されていることは、ハーディンの側近からの報告で、ミディアは知っていた。
というのも、処刑が行われた日の夜には、ハーディンの側近がミディアのところに来て、事務的な感情のない声で、処刑された騎士や兵士の名前を告げるのが逮捕されてからの習わしのようになっていた。
ミディアの心を玩（もてあそ）ぶハーディン流の残酷なやり方だった。
そのたびに、ミディアは処刑された騎士や兵士たちのことを思い、また残されたその家族

たちのことを思い、悔しさと怒りに震えた。
それは自分が処刑されることよりも辛いことだった。
「明日はおれの三五回目の誕生日だ」
「その祝いに、わたしを処刑するというのか？」
「面白い趣向だろう。はっはは」
「わたしの命など、いつでもくれてやる。だが、ハーディン――！」
ミディアは鉄格子を摑んで、ハーディンに詰め寄った。
「ニーナさまをどこへやったのだ⁉」
「あの女なら――ガーネフにくれてやった」
「な、なに、ガーネフに⁉」
「あの女はこのおれを裏切った。そのうえ、アカネイア王家の家宝である紋章の楯をあの小僧に授けたのだからな」
「あの小僧――？」
「アリティアのマルスのことだ」
「しかし、そのことだけで世界中を混乱と恐怖に陥れるなんて、許されないことだ！　貴様はどうかしているんだ！　正気ではないのだ！　貴様のつまらぬ嫉妬のために、どれだけの者が苦しんだと思うのだ！　いい加減に目を覚ませ！」

「つまらぬ嫉妬だと――」
　ハーディンは冷酷な目でミディアを睨み返した。
「なんとでも言うがいい。この世界は腐り切っている。つまらぬ人間ばかりだ。そんな世界になんの価値がある。こんな世界なぞ、いっそ滅んだ方がましだ――。ミディアよ、冥土の土産に、ひとつだけ教えてやろう。あの小僧が軍を率いてアカネイアに来ている」
「なに、マルスさまが⁉」
「わざわざおれに殺されるためにな」
「いつ、アカネイアに来たのだ⁉」
「おまえが兵を挙げる五日ほど前だ」
「な、なに⁉」
「おれはすぐにでも軍を派遣して、一気にやつらを叩き潰そうと思ったが、おまえがクーデターを企んでいることを知っていたからな、やつらのことは軍部のだれにも内密にし、おまえが兵を率いて立ちあがるのを待っていたのだ」
　そのためにアカネイア軍が連合軍の行方を見失ったのも事実だった。
　そして、連合軍のその後の動きを摑めないまま、すでに一箇月になろうとしている。
　だが、やつらのことだ、きっと帝都の近郊に接近して、攻撃の機会を窺っているに違いない――ハーディンはそう読んでいた。

クーデターが未遂に終わったことも、処刑のことも、やつらは知っているはずだ。
しかし、首謀者ミディアの処刑となれば、やつらといえども、黙ってはいまい。
かならずなんらかの動きがあるはずだ——と。
「いずれにせよ——」
ハーディンは不気味に笑うと、
「明日から面白くなる」
そう言い残して牢から去った。
早すぎた——！
暗い牢にひとり残されたミディアは愕然としていた。
昨年の暮れ、連合軍がアリティアでウィローとエイベルの軍を破ったという情報や、恋人アストリアが連合軍についたという情報が、軍部を通じて流れてきたが、それ以来、ミディアのところには連合軍の情報がまったく入ってこなくなった。
だが、それがミディアの不穏な動きを察知したハーディンの策略だったということを知らされ、ミディアは今、言いようのない屈辱と敗北感を味わっていた。
同時に、情報や状況を知らずに、正義感と激情から玉砕を覚悟で蜂起したことを、ミディアは後悔していた。
今まで、ミディアは蜂起したことを悔いたことがなかった。

敗北はしたが、国のために、国民のために、正しいことをしたのだ——と、自分たちの行動に誇りを持っていた。
ああ、もっと自分がしっかりしていれば——。
ミディアは指導者としての自分のいたらなさを激しく責めた。
数多くの騎士や兵士たちの命を粗末にすることもなかった——。
その家族たちを悲しませることもなかった——と。

4

夕暮れから降り出した雪は夜半過ぎにやんだ。
迎えた朝、アカネイア平野の原野や森の美しい雪景色を目映い太陽が照らしていた。
春の雪は積もるのも早いが、溶けるのも早かった。
時間とともに気温が上昇すると、踵の上まで積もった雪は、湯気を立てて見る見るうちに溶け始め、二時後には跡形もなく消えていた。
雨あがりのように濡れた原野や森や畑が、帝都の街が、温かな陽光にきらきらと光り輝いていた。
この日、帝都の街は朝からざわついていた。

帝都の人々の朝の挨拶代わりにミディアのことが話題にのぼった。

また、ミディアの処刑のことは、昨夜のうちにアカネイア平野のほとんどの町や村に広まっていて、それを聞きつけた近郊の町や村の人々も、東の街門や西の街門を潜って、ぞくぞくと広場へ集まって来た。

処刑は大聖堂の正午を告げる鐘の音を合図に行われることになっている。

その時刻の一時ほど前には、およそ三万の人が広場や通りを埋め尽くしていた。

このなかに、ミディアの処刑を望んでいる者はひとりとしていなかった。

もちろん、処刑を見たい者などだれもいない。

だが、朝になるとじっとしていられなくなって、自然に足が広場へ向いたのだ。

どの顔も苦渋と悲しみに満ちていた。

それだけミディアの人気は絶大だった。

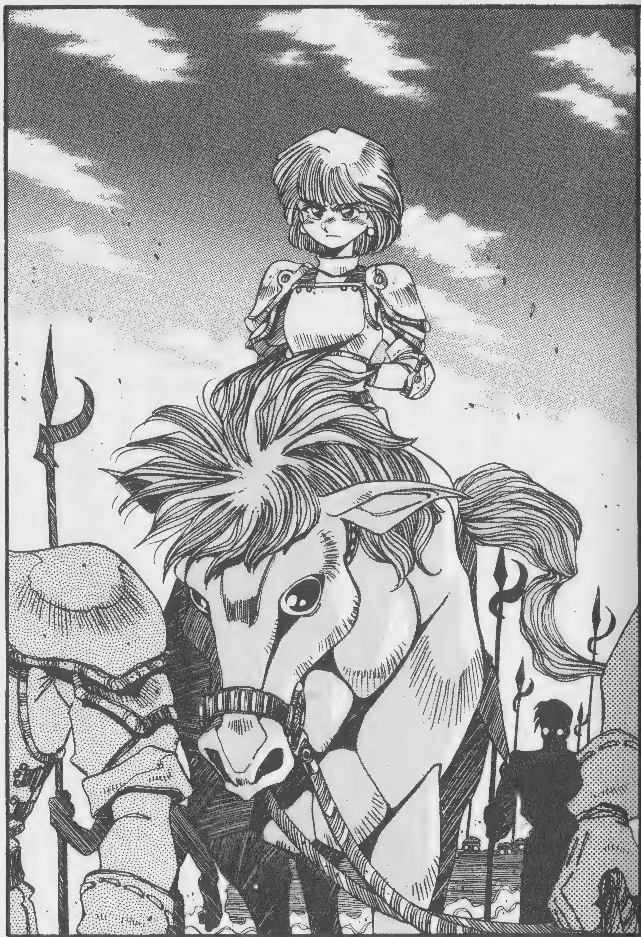
大聖堂のはす向かいに、広場に面した荘厳華麗な宮殿がある。

この宮殿は、新年の祝いや国王の誕生日などのときに、国王や王家の人々が一般人の参賀を受けるために、城の宮殿とは別にこの広場に建てられたものだ。

その三階にある参賀用のバルコニーに、ネーリング将軍ら軍の幹部を引き連れてハーディンが姿を現したのは、処刑の時刻の四分の一時ほど前だった。

バルコニーの下の広場には、一〇〇騎の騎馬と二〇〇名の歩兵が、さらに広場の中央に設

けられた処刑台の周りを取り囲むように三〇〇名の歩兵が警備に当たっていた。
また、宮殿の北に隣接する軍司令部の敷地には、二〇〇騎の騎馬部隊と九〇〇名の歩兵部隊が待機していて、なにかがあればすぐに動けるような態勢にあった。
ハーディンは広場や通りを埋めた三万の人波を見て、さすがに驚いたようだ。
「これだけの民が一堂に集まると、壮観だな――」
満足げに見渡しながらハーディンは隣のネーリング将軍に言葉をかけたが、内心ではミディアの人気にひどく嫉妬していた。
ハーディンは尊大な態度で押しかけた人々に手を振って玉座についた。
だが、それに反応を示した者はひとりとしていなかった。
広場や通りは、不気味なほどに静まり返っている。
だれもが息を殺して、成り行きを見守っていた。
と、北の大通りを埋めている人々から大きなどよめきが起きた。
広場とパレス城を結んでいるこの大通りの両側を、およそ一〇〇〇名のアカネイア軍の歩兵が固めている。
そのなかを、両手を縛られた聖騎士の軍服姿のミディアが、裸馬に揺られながら、二〇名の歩兵に警護されて、パレス城から連行されて来た。
どよめきは、やがて広場やほかの通りを埋めている人々にも広がった。



広場に現れたミディアは、胸を張り、毅然とした態度で、前を見据えていた。
昨夜――ミディアが蜂起したことを初めて後悔した。
そして、指導者としての己のいたらなさを激しく責めた。
だが、一夜明けた今日、ミディアの顔にはその面影がひとつもなかった。
前を見据えたその紺碧の瞳には、死への恐れも、迷いもなかった。
美しい整った顔は誇りと気品に満ちている。
形のいい唇には、女性らしくうっすらと紅を引いていた。
颯爽とした聖騎士のその軍服姿は、目映いほど輝いていた。
間近で見た人のだれもが、ミディアのその美しさに見惚れた。
同時に、死を直前にしながら、最後まで聖騎士らしさを失わないミディアの堂々とした態度に、アカネイアのためにすべてを捧げた二三歳のその短い人生を思い重ね、人々は流れる涙を拭った。
広場での引き回しが終わり、ミディアが処刑台に立たされると、やがてネーリングの罪状を読みあげる高々とした声が広場や通りに響き渡った。
罪状は、国家転覆を企んだ「反逆罪」だった。
ネーリングの告知が終わると、警備兵がミディアの縄を解いて斬首台に正座させ、動けないようにミディアの両手に鉄枷をはめた。

ハーディンは宮殿の三階のバルコニーからその様子をじっと見下ろしていた。
ミディアがその視線に気づいてハーディンを見ると、ハーディンは冷酷な目をミディアに向けたまま薄笑いを浮かべた。そして、
「わが三五回目の誕生日に乾杯——」
ワインを満たしたグラスを一気に飲み干した。
さすがのミディアも思わずむっとして睨(にら)み返した。
だが、ミディアが感情を露(あらわ)にしたのはこのときだけだった。
あとは、自分でも驚くほど冷静で落ち着いていた。
ハーディンのそれが処刑執行の合図だった。
体躯のいい屈強な処刑兵が跪(ひざまず)いて深々とハーディンに一礼すると、やおら立ちあがって、斬首専用の真新しい剣をおもむろにぬいた。
あとは大聖堂の鐘が鳴るのを待つだけだった。
ミディアは前を見据えたままゆっくりと目を閉じた。
広場は水を打ったように静まり返った。
と、ゴーン……耳をつんざくような大聖堂の鐘の音が帝都の街に響き渡った。
すると、ハーディンはミディアを睨みつけたまま二杯目のワインを飲み干した。
ゴーン……ゴーン……ゴーン……。

一定の間隔をおいて、鐘の音は近郊の街や村までも聞こえた。

そして、ついに最後の一二回目の鐘の音が地を揺らすように響き渡った。

その余韻が消えると、処刑兵が高々と剣を頭上に振りあげ、気合いを入れた。

次に起こる残虐(ざんぎゃく)な光景を想像しながら、人々は思わず顔を背(そむ)け、耳を塞(ふさ)いだ。

キラリ——陽光を浴びて剣の諸刃(もろは)が光った。

そのときだった、広場の上空を、別の光が走ったのは。

光は目にもとまらぬ速さで、音を立てて鋭く宙を切り裂いた。

次の瞬間、

「ぎゃおおおーっ！」

凄(すさ)まじい悲鳴が広場や通りに轟(とどろ)いた。

処刑兵の断末魔(だんまつま)の叫びだった。

剣を振りあげた処刑兵はかっと両眼を見開き、鬼のような形相(ぎょうそう)で突っ立っていたが、やがてどんと勢いよく真後ろに音を立てて倒れた。

一本の矢が処刑兵の喉元(のどもと)を突き刺していた。即死だった。

その場に居合わせた者たちは一斉に矢が飛んできた方向を見ると、大聖堂の東隣にある三階建ての集合住宅の屋根から素早く二つの人影が消えた。

来たか——ハーディンは思わず玉座から立ちあがった。

一帯は騒然となって、アカネイア兵の罵声(ばせい)と怒声が飛び交った。
「処刑台を固めろ!」
ハーディンは慌ててネーリングに命じた。
だが、そのときにはすでに、剣をかざした三人の男が人垣から飛び出していた。
粗野な形(なり)をした、見るからに旅の流れ者といった感じの男たちだった。
男たちは警備兵を次々に斬り倒しながら一気に処刑台に駆け寄ると、ミディアの両手の鉄枷をはずし、ミディアを連れて人垣に消えた。
数呼吸する間の、ほんの一瞬の出来事だった。
「追えーっ!」
「逃がすなーっ!」
慌てて警備兵が追い、そのあとに宮殿の前にいた騎馬部隊と歩兵部隊が続いた。
ハーディンは怒りのあまりに空のグラスを床に叩(たた)きつけた。
連合軍がミディアを救出するとしたら、少人数の奇襲作戦で来るのではないか――と、予測し、最大限の警備を敷くようにネーリングに命じた。
だが、これだけの警備を敷けば、迂闊(うかつ)には手出しはできないだろう――と、たかをくくっていたのも事実だ。
決して裏をかかれたわけではない。

しかし、これほどまでに鮮やかにやられるとは、想像もしていなかった。
それだけに、ハーディンの怒りは尋常ではなかった。
ミディアを連れた三人の男は人垣を分けながら逃げると、辻に繋いでおいた四頭の馬に乗り、蹄音を轟かせながら東の大通りを突っ走った。
やがて、彼らの前に東の街門が迫って来た。
だが、いるはずのアカネイアの警備兵の姿がなかった。
四人は速度を落とさずに勢いよく街門を潜りぬけた。
すると、それを待っていたように街門の巨大な門扉がぴたりと閉じられた。
追跡隊は行く手を遮られて、驚き慌てて馬をとめた。
そして、門扉が再び開いて、追跡隊が街門の外に飛び出したときには、すでに四頭の馬は東のワーレン街道に消えていた。
三人の男は、旅の流れ者に扮したマルスとオグマとカインだった。
また、処刑兵を殺して広場から消えた男は、弓の名手ゴードンとカシムだった。
五人は、朝、帝都に向かう近郊の街や村の人々に紛れて帝都に来て、人々が広場や通りを埋めるまで、ノルダの市場にある高級料理店「タリス」に潜んでいたのだ。
だが、連合軍のミディアの救出部隊はこの五人だけではなかった。
処刑を告げる大聖堂の鐘が鳴り響いたとき、東の街門を守っていたおよそ五〇名のアカネ

イア軍も処刑の鐘に気をとられて広場の方を見ていた。
その隙(すき)をついて、東アカネイア川にかかる街門の橋を馬で飛ばして来た流れ者に扮した一五名の男たちが、アカネイア軍に猛然と襲いかかったのだ。
一五人の男は、ジョルジュやナバールら、歴戦の戦士たちだった。
そして、逃げて来たマルスたちが街門を潜ると、すかさず門扉を閉じて、マルスたちと一緒に東へ向けて駆け去ったのだ——。
広場は騒然としていた。
だが、やがてミディアを連れ去った男たちが無事に逃げのびたという情報が広場に流れてくると、人々の顔が思わずほころんだ。
なかには、口笛を吹く者、歓声をあげる者、拍手をする者もいた。
人々は、ミディアを連れ去った男たちは、何者なのだろうか——と、囁(ささや)き合った。
そして、ほとんどの人は、手際のよさと、並外れた剣と弓の腕前から、アリティアの歴戦の戦士たちではないか——と、推測した。
一時後——。
軍司令部の長官室にいたネーリング将軍のもとに、追跡隊から連絡が入った。
報告によると、ミディアを連れ去った一味の数は二〇名あまりで、ワーレン街道を東へ向

かい、アダナ砦の手前で左に折れると、砦の北側にある広大な樹海に消えたという。
そして、今、一〇〇の騎馬部隊と四〇〇の歩兵部隊が樹海を捜索中だという。
それを聞いたネーリングは焦った。
ミディアを連れ去ったのは連合軍の仕業だと、アカネイア軍の幹部は断定していた。
その連合軍の数は一五〇〇である。
もし、連合軍が樹海で待ち伏せしていて奇襲作戦に出たら、追跡隊が壊滅するのは時間の問題だ――と、考えたのだ。
ネーリングはさっそくアダナ砦に早馬を送って、砦に駐留している一〇〇の騎馬部隊と四〇〇の歩兵部隊を、樹海に動員するよう命じた。
さらに、国内にある二〇の砦に使いを出して、数日内に帝都の近郊に五〇〇〇の兵を集結させるよう命じた。
そして、半時後――。
司令部に駐留している一五〇の騎馬部隊と八〇〇の歩兵部隊が、追跡隊の援軍として、慌ただしく帝都の街を出て行った。
アダナ砦の兵と援軍の数を合わせれば、追跡隊の騎馬部隊は三五〇、歩兵部隊は一六〇〇になる。
これだけの兵がいれば、樹海の奇襲戦になっても勝負になる――そう踏んだのだ。

だが、援軍が帝都の街を出て行った直後だった。
ノルダの市場の上空に、一筋の白い煙が立ちのぼった。
煙は高級料理店「タリス」の屋上からだった。
それは、西の樹海で待機している連合軍への狼煙だった。
そして、樹海の追跡隊に援軍を送った作戦が大失敗だったということにネーリングが気づいたのは、それから一時半後のことだった。
この日の夜、事態は急変した――。

5

帝都の人々は、今まで、この日ほど一日が長いと感じたことがなかった。
朝から帝都の街は騒然とし、不安と緊張のなかで、慌ただしく一日が過ぎた。
人々がほっとひと息ついたのは、街がいつもの落ち着きを取り戻した夕方近くになってからだった。
緊迫した状況に変わりはなく、この先どのようなことが起こるのか予測すらつかなかったが、少なくてもミディアの命が助かったことで、人々の顔は明るかった。
そして、今、西の空に夕日が沈もうとしていた。

夕食前のせわしい時刻を迎え、街も、人々も、いつもの生活に返っていた。

だが、それも束の間のことだった。

帝都の街の長い一日はまだ終わっていなかった。

街門の門が閉まるまであと八分の一時を残していた。

西の街門を守っていた五〇名のアカネイア軍の兵士も、帝都の人々と同じように、長くて慌ただしかった一日を終え、ほっと気を緩めたときだった。

突然、夕闇をついて、三〇名ほどの騎馬部隊が気勢をあげながら西アカネイア川にかかる橋を街門に向かって突進して来たのだ。

連合軍の先陣部隊だった。

先頭の巨漢の騎士はドーガで、その隣にサムトーやロシェの姿もあった。

さらにその部隊のあとに、一四〇〇〇名の大軍が続いていた。

不意をつかれた兵士たちは、慌てて迎撃の態勢に入った。

だが、予想だにしない大軍の出現に完全に浮き足立っていた。

さらに、門扉を閉めかけたとき、闖入した二人の男が兵士に斬りかかった。

ミディアの救出作戦に加わったあと、帝都に潜伏していたゴードンとカシムだった。

後手に回ったアカネイア軍は手の施しようがなかった。

数人の兵士が任務を放棄して逃げ出すと、ほかの兵士たちもあとを追って遁走した。

その直後、先陣部隊は怒濤（どとう）のように街門に雪崩（なだれ）こみ、さらに大軍が続いた。
連合軍を指揮しているのはアランとシリウス、マリク、アストリアの四人だった。
帝都の街はふたたび騒然となった。
連合軍は西の大通りを一気に駆けて、街の中央の広場に到着すると、アランが率いるおよそ五〇〇名の兵士が、宮殿の北に隣接しているアカネイア軍の司令部の建物をあっという間に包囲した。
さらに、シリウスとマリクが率いる八〇〇名の兵士は、北の大通りをぬけて、パレス城の城門の掘割の前まで行き、城内のアカネイア軍と掘割を挟んで対峙（たいじ）した。
また、アストリアが率いる一〇〇名の兵士は、東の街門を手に入れるために東の大通りを駆けぬけて行った。
驚いて通りに飛び出した帝都の人々は警戒しながら見知らぬ兵士たちの動きを見守っていたが、やがてそれが連合軍だとわかると、安堵（あんど）の胸をなでおろした。
ミディアを救出したマルスたちはワーレン街道を東へ逃げ、アダナ砦の北に広がっている樹海に姿を消したが、これは連合軍が北の樹海に潜んでいるとアカネイア軍に思わせるための偽装作戦だった。
もしこの作戦が失敗しても、連合軍がいる西の樹海からアカネイア軍の目を逸（そ）らすことができればいいと考えていた。

だが、作戦が成功すれば、当然アカネイア軍はこの樹海に兵を動員する。
となれば、帝都の警備が手薄になる。
そのときは、一気に帝都に突入する作戦だった。
連合軍はいつでも出撃できるように態勢を整え、西の樹海で待機していた。
また、「そのとき」を知らせるために、ゴードンとカシムが帝都の街に潜伏し、アカネイア軍の動きを偵察していたのだ。
そして、それを知らせる狼煙が帝都の上空にのぼったのだ――。

アカネイア軍の司令部は中庭のある三階建ての四角い建造物で、城や砦の城壁にあたるものはなく、四方とも通りや路地に直接面していた。
そして、玄関を兼ねた門扉のある正門は北の大通りに面していて、この正門の上の三階にネーリング将軍の長官室があった。
広場の方角から大喊声と軍靴の響きが聞こえてきたとき、この長官室で執務中だったネーリングは、一瞬なにが起きたのか理解できなかった。
だが、弾かれたように席を立って窓際に行き、窓の外の光景を見て、
「こ、これはっ――!?」
驚愕(きょうがく)のあまり絶句した。

五〇〇名の軍が司令部の建物の前に到着し、八〇〇名あまりの別の軍が大通りを城の方へ向かって駆けて行った。
信じられぬ光景に、ネーリングの顔から血の気が失せ、乾いた唇が震えていた。
そして、兵士の軍服とはためく軍旗から、目の前にいるのがアリティア軍で、城の方角へ向かったのがグルニアとカダインの軍だとわかると、
「くそっ、たばかられたかっ――！」
全身を震わせながら力任せに壁を蹴った。
このときになって、ネーリングは初めて、樹海に援軍を派遣したことを後悔した。
だが、今さらそのことをあれこれ悔やんでも始まらない。
その時間も余裕もない。事態は急を要している。
ネーリングは階下に飛んで行くと、
「ええいっ！　なにを脅えておる！」
激しく動揺している兵士たちに檄を飛ばし、徹底抗戦を命じた。
だが、司令部にいる部隊はわずか五〇の騎馬と二〇〇の歩兵だけだ。
「城はどうなっておる!?　城との連絡はとれるのか!?」
ネーリングは側近に怒鳴ったが、側近は、
「敵軍と掘割を挟んで対峙していると思われますが、さだかなことはわかりません！　それ

に、この司令部は包囲されていて、まったく身動きがとれません！　城との連絡は不可能な状態です！」
と、告げた。
司令部は完全に孤立していた——。

ハーディンが連合軍が帝都に突入したという報せを側近たちから聞いたのは、パレス城にある宮殿の自室でくつろいでいるときだった。
さすがのハーディンも驚きを隠せなかった。
ハーディンはさっそく側近たちを連れて宮殿を飛び出し、城門の巡視路に直行して、掘割の向こうで対峙している連合軍を自分の目で確かめると、側近のひとりに尋ねた。
「やつらは、どの方角から来たのだ⁉」
「わかりません！　しかし、西の街門を破って突入したそうです！」
「なに、西の街門——⁉」
連合軍がアダナ砦の北の樹海に潜伏していると読んだネーリングは司令部に駐留している軍を援軍として派遣したが、その報告をハーディンがネーリングから宮殿で受けたのは、援軍が帝都の街を出発してから四分の一時後のことだった。
だが、その読みとは逆に、連合軍は反対の西の方角から現れた。

「そうか――！」

ハーディンは夜の闇に沈もうとしている西方のアカネイア山脈の麓を睨みつけた。

その闇のなかに西の樹海が広がっている。

連合軍は北ではなく西の樹海に潜伏していたのだ――ハーディンはそう判断した。

そして、ネーリングを罠にはめたのだ――と。

ネーリングへの激しい怒りと失望を覚えながら、

「あの愚か者めが――！」

ハーディンは吐き捨てた。

ニーナ王妃と結婚するとき、ハーディンは側近のひとりとしてネーリングをオレルアンから連れて来た。

そして、皇帝に即位すると、ネーリングを将軍に昇格させ、帝都の全権を任せた。

その後、ネーリングは片腕として、アカネイア大陸の侵略を推し進めた。

それだけに、ハーディンはネーリングに絶大の信頼をおいていた。

だが、そのネーリングが取り返しのつかない大失態を演じたのだ。

信頼が絶大だっただけに、ハーディンにはネーリングの失態が許せなかった。

「ネーリングはどこだ!?」

ハーディンが尋ねると、

「将軍は司令部にいると思われます！」
側近のひとりが答えた。
「しかし、司令部は完全に包囲され、孤立しております！」
「いかがいたしましょうか――!?」
別の側近は、攻撃をしかけるのかどうか――暗に尋ねたが、
「放っておけっ！」
ハーディンの意外な答えに、側近たちは驚いて顔を見合わせた。
「では、将軍を見殺しにすると――!?」
だが、ハーディンはネーリングのことには触れずに、
「ただちに使いを出し、樹海に赴いている軍を呼び戻せ！」
と、命じた。
なにも慌てることはない――ハーディンはそう考えた。
司令部を犠牲にしても、城には三〇〇の騎馬部隊と一五〇〇の歩兵部隊がいる。
樹海に赴いている軍とアダナ砦の軍は騎馬部隊三五〇、歩兵部隊一六〇〇。
この軍が戻れば、城と帝都の外から連合軍を挟み打ちにできる。
さらに、全国の二〇の砦から五〇〇〇の兵が帝都近郊に集結することになっている。
長期戦になればなるほど、アカネイア軍が優位になるのが目に見えていた――。

その夜――。

月明かりに照らされながら、マルスたちの一行がミディアを連れて帝都の西の街門を潜ったのは、連合軍が帝都に突入してからちょうど一時後のことだった。

アダナ砦の北の樹海に逃げこんだと見せかけたマルスたちの一行は、そのまま樹海のなかを東へ向かい、一時ほど進んだところで、南へ進路を変えた。

そこからさらに一時ほど進み、樹海をぬけてアダナ砦の南東に広がる丘陵地帯に出ると、帝都の南方を大きく迂回し、アカネイア山脈の山麓に沿って北上した。

目的地である帝都の西方に広がる樹海に着いたときには、すでに夜の闇に覆われていたが、野営地のあとに出撃をしたことを知らせるアリティア軍旗が一旒立ててあるのを見つけると、そのまま帝都へと馬を飛ばして来たのだ――。

マルスたち一行が西の大通りを通ってアランがいる広場へ行くと、マルスたちが帝都に到着したことを聞きつけて、シリウスとマリクが城門前から駆けつけた。

また、東の街門からはアストリアが馬を飛ばして来た。

「ミディア！」

アストリアが馬から飛び降りてミディアに駆け寄ると、

「アストリア……！」

二人はじっと見つめ合った。
昨年の四の月、アストリアは北グルニアに遠征した。
そのとき以来の、一一箇月振りの再会だった。
気丈で男勝りのミディアの瞳が涙で溢れている。
人前で初めて見せるミディアの涙だった。
ミディアはアストリアの胸に飛びこむと、アストリアはやさしく抱き締めた――。
連合軍がアカネイア軍の司令部に突入したのはそれから四分の一時後のことだった。
アランが夜空に高々とアリティア軍旗をかかげると、司令部を包囲していたアリティアの兵士たちは勇ましい大喊声をあげた。
連合軍は正面からの強行突破を計った。
一〇人がかりで抱えた巨大な丸太の先を、強固な門扉に何度も叩きつけた。
そのたびに巨大な門扉が音を立てて軋み、やがて大きく歪んだ。
そして、門扉が破れると、兵士たちが怒濤のように司令部のなかに雪崩こんだ。
アカネイア軍は逃げ惑いながらも懸命に迎撃した。
だが、連合軍の兵はアカネイア軍の倍以上ある。
連合軍の迫力と勢いに、アカネイア軍はやがて戦意を失った。
歴戦の戦士たちは必死にネーリングを捜していた。

だが、ネーリングの姿は長官室にもどこにもなかった。すると、
「ジョルジュ！」
アストリアが叫ぶと、ミディアとともにマルスとマリクを連れて表に飛び出した。
その一声でジョルジュはアストリアが言おうとしている意味を理解した。
ジョルジュはオグマとカインを連れて、一階の幹部専用の会議室に飛びこんだ。
この会議室の議長席の後方に秘密の抜け穴が造られていた。
穴は城の掘割に近い東アカネイア川沿いの街壁の外と地下で繋（つな）がっていて、アカネイア軍のなかでも限られた者しか知らないものだ。
この穴からネーリングが逃げた——と、アストリアが読んだのだ。
ジョルジュが部屋の隅の紐（ひも）を引くと、議長席の後方の壁が左右に開き、人ひとりが潜れるほどの四角い穴が現れた。
すかさずジョルジュがそのなかに飛びこみ、そのあとにオグマたちも続いた。
そのとき、司令部の建物から連合軍の勝利を告げる鬨（とき）の声があがった。
滔々（とうとう）とした東アカネイア川の流れを月明かりが照らしていた。
街壁の外の川原は、街の騒ぎが嘘のように静まり返っていた。
と、街壁の土台の石垣のひとつが、がたがた……と揺れた。

やがて石垣からその石が外れ、斜面を転がって川原の岩場まで落ちた。
石の外れたあとには、人ひとりが潜れるほどの穴がぽっかりと開いた。
そのなかから、辺りの様子を窺(うかが)いながら、人影がひとつ這(は)い出した。
さらにもうひとつの人影がそのあとに続いた。
先に出たのはネーリング将軍の側近で、あとから出たのがネーリングだった。
ネーリングはほっと肩で息をつくと、軍服の土埃(つちぼこり)を払った。
そのとき、ネーリングの背後にある街壁の巡視路の上から人影が高々と宙に飛び、上空の月明かりを遮った。
「うっ——!?」
ネーリングと側近は思わず数歩横に飛びのいた。
と、すたっ——人影はネーリングの前に着地した。
旅の姿をした男だった。
「何者だっ!」
ネーリングは剣の柄(つか)に手をかけながら、首に巻いたマフラーが鼻まで覆っていて目しか見えないが、濁りのない澄んだその目と、ぴんと伸びた背筋や俊敏な身のこなしから、三〇歳前後の男だと判断した。
「わたしは……」

おもむろに男はマフラーをずり下ろして顔を見せた。
「お、おまえは――!?」
とたんにネーリングの顔が明るくなった。
男は、元カダイン国の最高責任者だったエルレーン・カルロスだった。
一昨年の一〇の月、ネーリングは皇帝ハーディンの特使として聖都カダインを訪れ、今後のアカネイア大陸のことについてエルレーンと話し合っている。
そして、その年の暮れ、今度はエルレーンがこの帝都を訪れ、カダイン魔道軍とアカネイア軍の友好条約を結んでいる。
だが、エルレーンは表情を変えずに、黙って印を結んだ。
「な、なぜだ!?」
ネーリングは脅(おび)えながら叫んだ。
「おまえとわしは――!」
「わたしは、あなたの知っているわたしではない」
ネーリングを睨みつけながらエルレーンは抑揚のない声で答えると、
「命、頂戴(ちょうだい)する!」
魔法の呪文を唱えようとした。
そのとき、慌ただしく街壁の巡視路を駆けて来る者たちがいた。

アストリアとミディアとマルスとマリクの四人だった。
司令部から馬を飛ばして一区画ほど東にある街壁の詰め所まで来ると、そこで馬を捨て、詰め所の階段を駆け登って巡視路に出たのだ。
だが、ネーリングと対峙している旅の男を見て、
「エルレーン!?」
驚いたマルスとマリクが同時に叫んだ。
そのとき、側近が剣をかざしてエルレーンに斬りかかり、エルレーンがその剣をかわして反撃しようとすると、
「ぎゃあああっ!」
側近が凄(すさ)まじい悲鳴をあげた。
素早く川原に飛び降りたアストリアが側近の胸に剣を突き刺していた。
また、マルスたちも飛び降りて、側近の攻撃の隙に逃げようとしたネーリングの前に剣をぬいて立ちはだかっていた。
「あわわわっ!」
追い詰められたネーリングは激しく震えた。
と、その下半身が濡れ、生温かい液体が地面に流れた。
恐怖のあまり、思わず小水を洩(も)らしてしまったのだ。と、

「うわあっ！」
突然、ネーリングはわめきながら、猛然とマルスに斬りかかった。
だが、マルスが難なくかわすと、ネーリングはミディアを攻撃し、さらにミディアにもかわされると、マリクに立ち向かって行った。
手当たり次第に相手を見つけ、ただがむしゃらに剣を振り回すだけだった。
目は異様なほど血走っていたが、焦点は定まっていなかった。
異様なその様相を見て、マルスたちの目に戸惑いの色が浮かんでいる。
その姿は、死の恐怖を振り払おうとして必死にあがいているとしか思えなかった。
一国の将としての誇りも、人間としての尊厳もなかった。
そこには、救いようのない哀れな男の姿しかなかった。
と、ネーリングはエルレーンに向かって剣を振り回して来た。
「見苦しい――！」
エルレーンが必殺のトロンの魔法をかけると、エルレーンの指先から発した稲光のような電光がネーリングを直撃し、
「ぎゃあああっ！」
ネーリングの悲鳴が響き渡った。
電撃はネーリングの全身を走り、ばちばちと派手に弾けながら放電した。

と、月明かりを浴び、アストリアの剣がきらりと光った。
次の瞬間、鋭い閃光が宙を切り裂いた。
同時に、凄まじい鮮血が闇に飛び、断末魔の叫びが川原に響いた。
ネーリングの左頰から首、そして左胸にかけて、ざっくりと肉が裂け、おびただしい血がしたたり落ちている。
と、ネーリングはよろけながら川の方に向かうと、川の浅瀬で立ち止まった。
そして、ぐらりと大きく傾くと、水飛沫を立てて崩れ落ちた。
ジョルジュとオグマとカインの三人が地下道を通って街壁の土台の石垣に開いた穴から川原に姿を現したのは、ちょうど断末魔の叫びが響き渡ったそのときだった。
三人は、なにが起きたのかよく理解できないまま、あ然としてこの光景を見ていた。
「でも、エルレーンはどうしてこの帝都に？」
ひと息ついてマルスが尋ねると、
「わたしは、魔道士としてあるまじき罪を犯しました」
エルレーンは穏やかな口調で話し始めた。
「その罰として、わたしは流浪の旅をしながら、魔道士としての修行を積むことを自分に課したのです。しかし、旅をしながら、それだけではわたしの犯した罪を償うことはできない――そう考えるようになったのです。というのも、旅をしながら、わたしはアカネイア帝国

軍の侵略行為のために苦しんでいる人々を嫌というほどたくさんこの目で見て来たからです。わたしの心は痛みました。なぜなら、マリクへの嫉妬やつまらぬ憎悪から、わたしもかつてはそのアカネイア帝国軍に加担してしまったのですから。ハーディン皇帝とネーリング将軍の口車に乗せられて、友好条約まで結んだのですから。そのために、マリクをあんな酷い目にあわせてしまい、またたくさんの魔道軍の兵士たちの命を無駄にしてしまいました……。その意味からも、アカネイア帝国を倒さなければ、皇帝と将軍を倒さなければ、わたしの罪を償うことができない――そう考えるようになったのです。そのためになにか自分にできることはないだろうか――そう考え、この二の月に帝都にやって来て、ずっとアカネイア軍の様子を探っていたのです。もちろん、連合軍がアカネイアに上陸したという噂は聞いてはいましたが、まさか今日このような事態になるとは想像だにしていませんでした。それにしても――」

エルレーンは街壁の土台の石垣の穴を見ると、

「睨んだ通りでした。連合軍が司令部に突入したら、ネーリングのことだからきっとこの抜け穴から逃げるに違いない――そう思ってここで待機していたのです」

エルレーンは初めて笑みを見せた。すると、

「心配してたよ、エルレーン」

マリクが右手を差しのべた。

「ウェンデル先生もぼくらに同行なさっている。今のエルレーンの言葉を聞いたら、きっとお喜びになるはずだ。これからもぼくらと一緒に戦おう」
そう言ってエルレーンの右手を取って強く握りしめると、
「マリク……！」
エルレーンは頷(うなず)いて手を握り返した──。

ところが──。
これで帝都の長い一日が終わったわけではなかった。
連合軍が軍司令部を占拠してから四分の一時後、帝都は三たび騒然となった。
アダナ砦の北の樹海から引き返して来たアカネイア軍が、帝都の対岸の東アカネイア川にかかる橋の東側に陣を張ったからだ。
この橋の長さは人間の歩数でわずか二〇〇歩ほどの距離しかない。
あと四、五〇歩も短ければ、完全に弓の射程距離内に入る。
東の街門から、弓を構えた兵士たちの緊張した姿がはっきりと肉眼で見える。
だが、連合軍は慌てなかった。
帝都突入作戦をとったときから、このような事態になると予測していたからだ。
連合軍は東の街門を固め、パレス城のアカネイア軍と対岸のこのアカネイア軍の一斉攻撃

に備えた――。

そのころ――。

ハーディンはパレス城の宮殿で側近からの報告を受けていた。

「帝都に潜んでいた密偵によりますと、四分の一時ほど前に、軍司令部が連合軍の攻撃を受けて敵の手に落ちたそうです！　そして、残念ながらネーリング将軍は――！」

「殺(や)られたのか――」

「確認はできておりませんが、連合軍の兵士や帝都の者たちの噂では――！」

こうなることは時間の問題と諦(あきら)めていたハーディンは別に驚きもしなかった。

「それよりも、樹海に赴いた軍はどうした？」

帝都に戻すように命じてからすでに一時半が経(た)っている。

「そのことですが、アダナ砦の北の樹海に飛んだ別の密偵によりますと、つい先程、部隊が東の街門の対岸に到着したそうです！」

「やっと来たか――！」

「しかし――！」

次の言葉に、さすがのハーディンも驚きを隠せなかった。

「連合軍が帝都に突入したという報せを聞かされた兵士たちの動揺が激しく、引き返して来

る途中、恐れをなした兵士たちが次々に部隊から脱落し、到着したときには、三五〇の騎馬部隊が二五〇に、一六〇〇の歩兵部隊が一〇〇〇に減っていたそうです!」

「な、なにっ!?」

ハーディンは眼を剝いて、一瞬絶句すると、

くそっ、腰抜けどもが——!

怒鳴り散らしたい衝動を抑えながら、麦から造った度の強い蒸留酒の瓶を取り出してグラスに注ぎ、それを一気に喉に流しこんで、肩で大きく息をした。

全国の二〇の砦や要塞から五〇〇〇の兵が帝都近郊に集結することになっているが、今夜のこともある。同じように動揺して部隊から離脱する兵士も数多く出る可能性が大だ。もしかしたら集結する実数は四〇〇〇、いや三〇〇〇か——二杯目をグラスに注ぎながらハーディンはそう考えた。

ところが、金で寄せ集めた軍はハーディンが考えているよりもはるかにもろかった。

アカネイア国にいるアカネイア軍の総数はおよそ一万八〇〇〇。

その五分の四が金で雇われた兵士で、元はと言えば、土地を失って行き場のなくなった農民や、失業者や、旅の流れ者である。

ほかにグラから強制的に連行されて来た奴隷たちも大勢いる。

これらの兵士たちは、武術の腕もなく、戦いの経験も少ない。



また、国を守る意識も、忠誠心も希薄だ。
連合軍が帝都に突入しただけで、軍は簡単にもろさを露呈したが、このような寄せ集めの軍は一旦綻びを見せると、ちょっとしたことがきっかけとなって、修正不可能な状況に向かって一気に加速する。
翌朝、ハーディンが思いもしなかったことが起きた——。

6

夜明けを迎え、帝都の一帯はさらに緊迫感を増した。
夜討ち朝駆けは戦いの常識である。
そのうえ、この朝は濃い霧に包まれていたからだ。
視界はわずか一〇〇歩ほど先までしかきかない。
しかも、東の街門とアカネイアの陣営は、東アカネイア川にかかる橋を挟んで二〇〇歩ほどしか離れていないところで対峙している。
それだけに、連合軍の兵士たちは、霧に隠れて見えないアカネイア軍の動きに全神経を集中させながら、敵の攻撃に備えていた。
また、対岸のアカネイア軍も同じだった。

城からは攻撃の司令は出ていないが、アカネイア軍もまた連合軍の攻撃に備え、相手の動きに神経を尖(とが)らせていた。

そのアカネイア軍の最前線で弓を構えていた兵士のひとりが、眼下の川岸の岩場に流れ着いている「それ」に気づき、怪訝(けげん)な顔で川原に下りた。

「それ」は死体だった。

顔は青黒く、しかも異様にむくんでいる。

そして、左の頬から首、胸にかけて、大きな鋭い傷痕(きずあと)があった。

位の低い兵士は、その顔から死体はだれなのか判断できなかった。

だが、軍装は紛(まぎ)れもなくアカネイア軍の最高位を示すものだった。

その報せを聞いて飛んで来た部隊長が死体の顔を見て、

「あっ――!」

と、叫んで絶句した。

帝都の最高権力者として君臨したネーリング将軍の変わり果てた姿だった。

アカネイア陣営の幹部たちは、城から飛んで来た密偵からの情報で、昨夜司令部が連合軍の手に落ちたことを知っていたが、兵士たちが戦意喪失するのを恐れ、兵士たちには内密にしていた。

それだけに、ネーリング将軍の死を知ると、陣営は騒然となった。

特に、下級兵士たちに与えた衝撃は幹部たちの想像をはるかにこえていた。
激しく動揺した兵士たちは、ひとり、ふたりと陣営から消えていった。
幹部たちは兵士たちに檄を飛ばし、必死に陣営にとどめようとした。
そして、逃げようとした兵士を背後から斬り倒したのだ。
幹部たちのこの行動が引き金となり、兵士たちの動揺と恐怖をさらに増幅させた。
数人の兵士が幹部の隙を見て申し合わせたように逃げ出すと、他の兵士たちも蜘蛛の子を散らすように一斉に陣営から逃げ出したのだ。
そして、気温が上昇し、霧が晴れたころには、二五〇名いた騎馬が一五〇名に、一〇〇〇名いた歩兵がなんと二〇〇名までに減っていた――。

このことが密偵によってパレス城のハーディンのもとにもたらされたのは、ハーディンが朝食をとっていた最中だった。
そんなばかな――!
ハーディンは朝食の手をとめ、思わず絶句した。
そして、次の瞬間、ハーディンは立ちあがりながら力任せに食卓を引っくり返した。
それほど、この朝の出来事がハーディンに与えた衝撃は大きかった。
ところが、さらに逆上させるような報告が別の密偵によってもたらされた。

ハーディンが最初の報告を受けてから半時後のことだった――。

霧が晴れて、間もなくのことである。

東の街門の連合軍が対岸のアカネイア陣営の異常に気づいた。

兵士たちが遁走したことを知る由もなかったが、昨夜樹海から引き返したアカネイアの大軍が対岸に陣営を張ったときに比べ、兵の数が極端に減っていたからだ。

東の街門にいる連合軍は三〇〇名で、それとあまり変わらない陣容だ。

しかも、緊迫した状況のなかでのアカネイア軍の態勢に、東の街門を指揮していたカインとオグマとゴードンの三人は疑問を持った。

兵士たちの配置が乱れているし、兵士たちの動きに落ち着きがなかった。

それを見て、攻撃するなら今だ――三人はそう直観した。

だが、その直後、攻撃命令を躊躇した。

敵はなにか特別な策でも講じたのか――と、訝ったからだ。

しかし、どう観察しても、アカネイア軍は敵を前にしての統一性に欠けていた。

司令が末端まで徹底せず、組織としての動きに隙がある。

また、兵士たちの個々の動きに、戦いに臨む気迫が感じられなかった。

早い話が、敵はばらばらに見えたのだ。

なにか策を講じている――とはどうしても思えなかった。
そこで、三人は攻撃を決意し、兵士たちに号令を飛ばした。
街門の門扉が開くと、勢いよく連合軍の兵士が飛び出した。
案の定、アカネイア軍は突然の連合軍の出撃に素早く対応できなかった。
兵士たちはただ驚きうろたえるだけであった。
連合軍は橋を駆け渡ると、浮き足立ったそのアカネイア軍に一気に雪崩こんだ。
そして、四分の一時後、アカネイア軍は離散遁走し、連合軍の鬨の声があがった。

一時後――。
旧軍司令部の建物に、マルスを中心とする歴戦の戦士たちと、ミディアとアストリアとジョルジュが連れて来た帝都の実力者たちが集まって、最初の会合が開かれた。
その席上、マルスは、グルニアにおいても、アリティアにおいても、解放軍の協力がなければ、アカネイア軍を破ることはできなかった――と、述べ、帝都の成人男子から有志を募って市民軍を組織することが可能だろうか――と、尋ねた。
その言葉には、ぜひ組織して欲しい――という強い願いがこめられていた。
だが、昨夜のうちにミディアたちからそのことを密かに打診されていた帝都の代表者たちは、事前にそのことを協議し、この会合に臨んでいた。

「今、この帝都で皇帝や軍を支持している者はだれひとりとしておりません」
実力者たちを代表して長老が力強く答えた。
「先の戦争が終わって、アカネイアの国民は祖国再建のために荒れた国土を耕し、少しでも収穫量を増やそうと努力してきました。しかし、ハーディン殿が皇帝に即位されると、皇帝は国民の生活や国民の願いを無視し、軍の拡大と強化を図りました。そして、強引に侵略政策を推し進め、グルニアを始め、グラやアリティアにまで軍を派遣しました。しかし、そんな愚行が、アカネイアの国民にとって、いやアカネイア大陸の人々にとって、一体なにになるのでしょう。結局は、アカネイア大陸の人々を苦しめ、アカネイア国の予算が逼迫しただけです。そして、皇帝がやったことと言えば、それを賄うためにアカネイア国民に増税を課し、軍の力で皇帝や軍のやり方に反対する者を抑えつけることだけだったのです。それでなくてもこの二年、アカネイアでは記録的な不作続きで、国民は困窮と飢えに苦しんでいたのです。このまま皇帝や軍の言いなりになっていると、アカネイアは先の戦争のときに経験した悲惨な状態に戻るのは、もはや時間の問題だ――国民のだれもがそう考えているのです。このままでは、栄えあるアカネイア国は亡国の道をたどるだけだ――と。今や、皇帝や軍に対する国民の怒りは頂点に達し、国民の我慢は限界を越えています。ですから、昨夜、連合軍が帝都に入られたときに、だれもが歓迎しました。そして、だれもが連合軍の雄姿に勇気を与えられたのです。これで、アカネイアも新しく生まれ変われる――と。マルスさま、ご

心配には及びません。市民軍を募れば、きっと多くの者が賛同し、必ずや立ちあがってくれるものと、われわれは信じております。アカネイアの国民のために、アカネイア大陸の人々のために——!」

そして、その日の夕方、二度目の会合が同じ旧軍司令部で持たれた。

帝都には、一〇代後半から五〇歳までの成人男子はおよそ一万人いる。

そのなかの、三〇〇〇人がさっそく名乗りをあげたという。

また、その席上、帝都の代表は、明日までにはその数はさらに増え、倍以上に膨れあがるだろう——と、予測した。

ハーディンが帝都で市民軍が組織されたことを知ったのはその日の夕方だった。

帝都に潜んでいる密偵の報告を受けた側近が血相を変えてハーディンの居室に飛びこんで来たのだ。

予期しなかった出来事に、さすがのハーディンも大きな衝撃を受けた。

同時に、連合軍が帝都に突入したあと、樹海に赴いていた軍が引き返して来たときに、一気に帝都の連合軍を攻撃しなかったことを後悔した。

そのときは、長期戦になればなるほどアカネイア軍が有利になる——と、ハーディンは読んだが、それが大きな誤算だった。

今思えば、そのときが連合軍を打ち破る唯一の好機だったのだ。
また、数日後には帝都の近郊に五〇〇〇の兵が集結することになっていて、ハーディンがこの日の報告を受けるまでは、その数を三〇〇〇位だと踏んでいた。
だが、この時点で、ハーディンの計算からその数は消えた。
今朝方、東の街門に対峙していた軍が連合軍の攻撃を受けて遁走したという情報を聞いてから、寄せ集めの軍団は信用できない――と、悟ったからだ。
さらに、翌日の昼過ぎのこと――。
ふたたび血相を変えて飛びこんで来た側近が、
「市民軍は八〇〇〇人を越え、さらに数が増えそうです――!」
と、報告したのだ。
また、その日の夕方――。
側近が新たな別の情報を持って飛びこんで来た。
帝都の近郊にはおよそ一〇の町や村があって、およそ二万人の人が住んでいるが、その町や村でも、帝都に市民軍が組織されたという噂が流れると、さっそく市民軍の援軍が組織されたというのだ。
その数が計五〇〇〇人にも及ぶという。
ハーディンが受けた衝撃には計り知れないものがあった。

しかし、それでもハーディンは勝利へ絶対的な自信を持っていた。
たしかに、軍の数が必要だ。だが、それがすべてではない——そう思っていた。
自軍が不利になった段階で、ハーディンが最初に考えた作戦は、風の強い夜を狙って帝都を焼き払うことだった。
帝都さえ焼き払えば、市民軍を蹴散らすことができる——と、読んだ。
だが、問題は先の戦争を戦ったアリティアの騎士を中心とする歴戦の戦士たちだ。
やつらを倒さなければ、真に勝利したことにはならない——と、考え直したのだ。
逆に、やつらさえ倒せば、ほかの連中なぞどうにでもなる。いや、できる——と。
特にその中心的人物であるあのマルスを倒しさえすれば——と。

その日——。
帝都は朝から小雨に煙っていた。
街は不気味なほど静まり返っていた。
いつもは活気に満ちているノルダの市場も人通りが少なかった。
だが、夕方近くになって小雨がやみ、西の空を夕日が赤く染めるころになると、帝都は異様な雰囲気に包まれてきた。
それまで人影が途絶えていた通りに、帝都の人々がぞろぞろと出て来たのだ。

手には手製の木剣や木槍などの武器を持っていた。
帝都の成人男子で組織された市民軍だった。
また、それと時を合わせるように、粗末な形をした男たちが西の街門や東の街門を潜って帝都に集まって来た。
帝都近郊の農民たちで組織された市民軍の援軍だった。
やはり、手には鍬などの武器になりそうな農具を持っていた。
さらに、帝都が夕闇に包まれるころになって、パレス城の掘割を挟んで対峙していたグルニアとカダインの連合軍に旧軍司令部にいたアリティア軍が合流すると、帝都は急に緊迫した様相を呈した。
城門や城壁の巡視路では、およそ五〇〇名のアカネイア兵士たちが、目の前の連合軍の動きに全神経を集中させながら、緊張した顔で弓を構えていた。
また、城内からは決戦に備える兵士たちの慌ただしい気配が感じられた。
一五〇〇名の連合軍の最前線には、マルスとシリウスとマリクの三人がい、その横にはアストリア、ミディア、ジョルジュのアカネイアの三騎士と、アランやドーガやカインたち、歴戦の戦士たちがずらりと並んでいる。
その後方には、ジェイガンやシーダたち女性陣の姿もあった。
そして、連合軍を後押しするように、城門から広場へ続く北の大通りを、九〇〇〇人の市

民軍と五〇〇〇人の援軍がびっしりと埋めていた。
さらに、市民軍に参加できなかった帝都の老人や女性や子供たちがその背後を固めるように広場を埋め尽くし、その数は二万人にも及んだ。
やがて、東方の上空に見事な満月が出た。
雨のあとの澄み切った空気が、月をより一層大きく、鮮明に浮かびあがらせている。
夕闇は夜の闇に変わり、月光が皓々と帝都を照らした。
と、カーン……カーン……カーン……。
帝都に大聖堂の鐘の音が鳴り響いた。
通常なら街門の閉門の時刻を告げる鐘だった。
と、西の方向から白い巨大な怪獣が翼を羽ばたかせながら王都に向かって飛来した。
鋼のような鱗に覆われた翼と背びれが月光を浴び、不気味な鈍い光を放っている。
かっと見開いた両眼は獰猛そのもので、牙を剝き出しにした大きな口は耳の下まで醜く裂けていて、鋭角な二本の大角は凛と天を突いている。
氷竜や飛竜の倍も大きい巨竜だった。
巨竜が肉眼ではっきりと確認できるところまで接近すると、連合軍や市民軍の兵士たちからだけでなく、アカネイア軍の兵士たちからも、大きなどよめきが起きた。
敵なのか、味方なのか——⁉

だれもが戸惑いうろたえ、脅えながら固唾を飲んで成り行きを見守った。
だが、歴戦の戦士たちは、白い巨竜を頼もしそうに見つめていた。
歴戦の戦士たちがこの巨竜を見るのは、先の戦争のとき以来だった。
巨竜はチキが変身した神竜だった。
変身――というよりも、正確にはそれは本性に返ることであったが、チキが神竜の姿に戻るためにカチュアに連れられてペガサスで帝都の西にある森へ行ったのは、四分の一時ほど前のことだった。
神竜に姿を変えることはどこでもできるが、姿を変えるところをだれにも見られたくなくてこの森を選んだのだ。
「見ちゃいやよ、絶対……」
チキは念を押してカチュアを帰し、カチュアのペガサスが帝都の方向に消えるのを確認すると、懐から二つの玉を取り出した。
ひとつは、マルスから借りて来た真紅の宝珠で、持つ者に不思議な生命力を与えると言い伝えられている命のオーブだった。
もうひとつは、姿を変えるのに必要な神竜石だった。
チキは命のオーブを懐に仕舞うと、神竜石を小さな両手で包み、瞳を閉じて神竜族に伝わる呪文を熱心に唱えた。

やがて、チキの全身がほのかな白い光を発した。

と、突然、閉じていたつぶらな瞳が脹らみながら巨眼となって飛び出したかと思うと、可憐な唇が耳の下まで切り裂け、愛らしい額を突き破って二本の角が出た。

同時に、白魚のような両手の指の先から鋭利な爪が勢いよく伸び、醜く変形した背中からは翼が生え、背びれが隆起した。

そして、次の瞬間、森のなかに獣のような凄まじい咆哮が響き渡ると、チキは人間の背丈の二〇倍もある巨大な神竜に姿を変えていたのだ——。

神竜は掘割の上空まで飛来すると、三階建ての強固な城門に向かって急降下した。

それを見て味方だと知った連合軍や市民軍から思わず歓声が起きた。

巡視路にいたアカネイアの兵士たちは驚きながらも一斉に矢を射った。

だが、神竜は矢の嵐をものともせずに紅蓮の炎を吐きながら攻撃し、またたく間に兵士たちを火だるまにした。

そして、態勢を整えると、今度は城門の東側の城壁の巡視路にいる兵士たちに火炎の掃射攻撃を浴びせ、さらに西側の巡視路も襲った。

城門の内側には、さらに五〇〇名の軍団がいて、巨竜に矢を射っていた。

城壁の兵士を一掃すると、神竜はこの軍団に襲いかかった。

兵士たちは悲鳴をあげて逃げ回ったが、神竜は容赦しなかった。



強烈な炎を浴びせ、尻尾（しっぽ）で叩き飛ばし、爪で胴体を切り裂いた。

と、天守塔の裏の森から一〇頭あまりの竜の群れが飛来した。

飛竜や氷竜と同じ大きさの茶褐色の竜で、ハーディンがニーナを引き渡したお礼に、ガーネフから贈られた地竜だった。

神竜と地竜の群れの壮絶な戦いが始まった。

いく筋もの火炎の柱が夜の闇を飛び交い、鋭い爪が宙を切り裂いた。

神竜は互角に戦ったが、相手が一〇頭だけに受ける傷も多かった。

だが、傷を受けるたびに、その傷口を真紅の光が覆った。

そして、光が消えると、傷口は跡形もなく塞（ふさ）がっていた。

命のオーブの効力だった。

地竜の一頭が血飛沫（ちしぶき）にまみれ、地響きを立てて崩れ落ちたときだった。

城門のそばにいた兵士たちが騒然となった。

アランら歴戦の戦士が率いる連合軍の突撃部隊が城壁を乗り越えて来たからだ。

神竜が城門を攻撃した直後、連合軍もまた攻撃作戦を開始していた。

城と街を隔てている掘割の幅は成人男子の歩幅にして二〇歩ほどで、水深はやはり成人男子の背丈の二倍ほどである。

神竜の攻撃を受けて城門の兵士たちが逃げまどっている隙に、二〇艘（そう）あまりの川舟がこの

掘割を進んで来て、城門近くの掘割を埋めた。
そして、舟の上に次々に板がかけられると、歴戦の戦士たちと連合軍がこの板を渡って城壁に接近し、縄ばしごをかけて城壁を越えたのだ——。
歴戦の戦士たちは立ちはだかるアカネイアの兵士を斬り倒しながら城門に向かった。
やがて、歴戦の戦士たちによって掘割に跳ね橋が下ろされ、城門の強固な門扉(もんぴ)が開かれると、待機していたマルスやシリウスたちが城門に突入し、そのあとに連合軍が、さらに市民軍が続いた。
城門を入ると、目の前の小高い丘に荘厳華麗な天守塔がそびえてい、その隣にハーディンがいると思われる三階建ての宮殿が見える。
マルスは歴戦の戦士たちと合流すると、さっそく宮殿へと向かった。
宮殿の前の広場にはおよそ三〇〇名のアカネイア軍がいた。
だが、兵士たちは、わずか一五名のマルスたちを前に、うろたえるだけだった。
どの顔からも戦意が喪失し、完全に浮き足立っていた。
無理もなかった。宮殿前の広場から、城内の戦況が一望できるからだ。
神竜と地竜の群れの戦いは、神竜が優位に立っていた。
連合軍とアカネイア軍の戦いも、連合軍が圧倒している。
また、気勢をあげながら怒濤のように城門から突入して来る市民軍のいつ果てるともしれ

ない長い長い列が、兵士たちに底知れぬ恐怖を与えた。
兵士たちは自軍の圧倒的に不利な戦況にどう対応していいのかわからないでいた。
「ええいっ、どけーっ！」
歴戦の戦士たちが剣や槍をかざして猛然と宮殿に向かって突進した。
すると、兵士たちはその気迫に恐れをなしてぱっと二手に分かれて道を開けた。
ところが、次の瞬間、思いもよらぬことが起きた。
なんと、兵士たちは血相を変えて一斉にその場から遁走してしまったのだ。
マルスたちは一気に宮殿前の階段を駆け登ると、宮殿へ突入した。
そして、一階にある謁見の間の扉を打ち破ってなかに乱入した。
六本の大理石の巨大な円柱に支えられた絢爛豪華なドームの部屋は、騒然とした外とは別世界のように静まり返っていた。
その奥の中央の玉座にハーディンがいた。
ハーディンは不敵な笑みを浮かべると、
「待っておったぞ――」
鋭い眼光でマルスを睨みつけた。
その手は漆黒の珠、闇のオーブを玩んでいた。
マルスやアリティアの騎士たちがハーディンと会うのは、ハーディンとニーナが結婚式を

挙げた一昨年の二の月以来のことだが、今目の前にいる濁った眼を異様にぎらつかせた粗野な中年の大男は、マルスたちが知っているハーディンとは別人だった。
マルスたちの知っているハーディンは、鍛えぬかれた武技といい、明晰な頭脳といい、強靭な体力といい、勇気といい、騎士として必要なものをすべて兼ね備えた優秀な人物で、同性でも思わず見惚れてしまうような神々しさと品格を身につけていた。
だが、目の前の大男には、その面影はなにひとつ残っていない。
男盛りの三五歳の誕生日を迎えたばかりというのに、一〇歳も老けて見えた。
ガトーによると、闇のオーブは、所有する者に勇気を与え、苦しみから解き放ち、野心や欲望を増幅させる。また、人間の怒りや嘆き、妬みなどに激しく反応してその感情を増幅させ、人格を破壊して悪魔に変える――というが、闇のオーブに支配され、人格が破壊したため、人相まで変わってしまったとしか思えなかった。
ハーディンもまたマルスを取り囲むようにしてハーディンに対峙している歴戦の戦士たちの顔をひとりひとり確認するように見ていた。
マルスの右隣にはアリティアの軍師ジェイガンが、タリス国の王女シーダがいる。
さらにその横には、タリス国のオグマが、アリティアの騎士アランが、ドーガが、カインが、ゴードンがいる。
また、マルスの左隣には、金刺繍の縁取りのある白い仮面をした男がいた。

白い仮面の紺碧の双眸を見て、ハーディンは内心どきり——とした。
その眸にはハーディンの心を乱すような刺が宿っていた。
何者なのだ、こやつは——？
どこかで会ったことがあるような気がしたが、思い出せなかった。
その隣にカダイン国のウェンデル大司祭とその後継者と目されているマリクが、さらにその隣には、聖騎士ミディアが、その恋人アストリアが、ジョルジュがいる。
ふっ、裏切り者どもめが——。
三人を見て、ハーディンは鼻先で笑ったが、その眼は冷酷な光を放っていた。
さらにその隣には、孤高の剣士ナバールがいる。
仮面の男を除けば、いずれもよく知っている顔ばかりだ。
だが、ハーディンの心には、懐かしい——という気持ちは微塵もなかった。
あるのは、煮えくり返るような腹立たしさと憎しみだけだった。

7

「あなたは闇のオーブに支配され、正しい心を失っている！」
マルスが言った。

「そのために、アカネイア大陸の人々を死の恐怖に陥れ、大陸を滅ぼそうとしている！　どうか、忌まわしい闇のオーブを捨て、もとのあなたに戻って欲しい！」

「忌まわしいだと――!?」

ハーディンはおもむろに闇のオーブを見つめた。

珠のなかには限りなく深い闇の宇宙が広がっている。

その漆黒の宇宙をいとおしそうにうっとりと見つめながら、

「この世で信じられるものはなにもない。だが、おまえだけは特別だ――。おまえは、おのが心を正直に映し出してくれる――。おのが心に忠実に生きよと教えてくれる――」

ハーディンは闇のオーブにやさしく語りかけた。

その姿は、常軌を逸していた。

「それが、忌まわしいものとはな――はっははははは！」

ハーディンは大声で笑うと、

「マルスよ！」

凄まじい形相で睨みつけた。

「おまえこそ、英雄気取りはやめるのだな！」

「英雄気取り――!?」

「おまえは、先の戦争で、アンリの子孫であるというだけで、ニーナからファイアーエムブ

レムを託され、英雄として祭りあげられた。そのころからおれは、おまえが憎くて憎くてたまらなかった！」
「なんですって——⁉」
　歴戦の戦士たちも驚いて顔を見合わせた。
「ニーナの手前、我慢していたが、いずれおまえとは決着をつけねばならぬと思っていた。だから、皇帝になったのだ！　アリティアを攻めるためになっ！　闇のオーブとはなにも関係ないことだ！」
「なるほど——！」
　すかさずマルスの横からジェイガンが口をはさんだ。
　マケドニア南部のホルム海岸でシーダからアカネイア軍がアリティア城を襲撃したという報せを聞いたときから、すべてはアリティアを攻撃するための罠ではないかとマルスたちは推測していたが、そのことを直にハーディンに確認したかったのだ。
「グルニアを支配下に置いたのも、われわれをグルニアに遠征させたのも、マケドニアの反乱を企てたのも、グラを独立させたのも、なにもかもわがアリティアを攻めるための罠だった——そう仰る（おっしゃる）のですな⁉」
「いかにも！」
「しかし——！」

あまりにも単純なハーディンの動機にマルスは愕然としていた。
また、ハーディンがそこまで自分を憎んでいたとは、思ってもいなかった。
人間である以上、だれにも憎しみや、怒りといった感情はある。
だが、ものには限度というものがある。
「単にぼくが憎いというだけで、ただそれだけのことで、何万という関係のない人々の命を平気で奪い、飢えや苦しみの地獄に陥れたのですか!? そんなことは、だれにも許されないことだ！」
マルスは我慢できずに叫んだ。
闇のオーブには関係ない——と、ハーディンは言ったが、それは闇のオーブに支配されたハーディンの思考が倒錯しているからで、闇のオーブがあるからこそ、マルスへの憎しみを増幅させ、極悪非道な暴挙に出たのだ。
「あなたはガーネフの策略とも知らずに、旅の魔道士に変装したガーネフから闇のオーブをもらい、闇のオーブに心を奪われてしまったのだ！ そして、ガーネフに思惑通りに操られて、ニーナまでガーネフに渡してしまったのだ！」
「ええいっ、黙れいっ！ だれに向かって言っておるのだ！」
ハーディンはアカネイア王家に代々伝わる宝槍グラディウスを摑んで勢いよく玉座から飛び出すと、真紅の絹地の鞘を宙に飛ばして、

「おれはアカネイア大陸に君臨するアカネイア神聖帝国の皇帝だ！」
頭上でグラディウスを素早く回転させながら、
「おれに逆らう者はだれであろうが許さぬ！」
ぴたり――と、鋭い穂先をマルスの顔に向けて、身構えた。
見事な槍捌き(さば)だった。無駄な動きはひとつもなかった。
そのとき、歴戦の戦士たちはすでにハーディンを取り囲んでいた。
宝槍グラディウスは、三稜角の穂先に横刃が二本ついた十文字槍で、穂先や刃は油がしたたるような鈍い光沢を放っている。
柄も鋼鉄で、長さはハーディンの背丈の二倍はある。
ハーディンは歴戦の戦士たちを牽制(けんせい)しながらマルスににじり寄ると、
「この大陸に英雄はおれひとりでたくさんだ！」
猛然と突進した。
マルスは素早く横に飛び、反撃に出た。
だが、レイピアはむなしく空(くう)を斬った。
次の瞬間、態勢を整えながらハーディンが近距離から攻撃し、マルスの目の前にグラディウスの鋭い切っ先が迫った。
マルスはふたたび横に飛びながら回りこんでかろうじてかわしたが、切っ先がマルスの長

い髪の先をかすめ、切れた髪の毛が無数宙に舞った。

マルスは柄を握り直して、間合いを計った。

グラディウスの柄が長いだけに穂先の内側に飛びこめば優位に攻撃できるが、ハーディンは歴戦の戦士たちを牽制しながら、絶妙な間合いをとって、それを阻止する。

ハーディンの構えには一分の隙もなかった。

歴戦の戦士たちも包囲したまま同じ理由で攻撃できないでいた。

殺気と緊張で、謁見の間は異様な空気に包まれていた。

やがて、双方に焦りと苛立(いらだ)ちが見え、息詰まった状況は極限に達していた。

この均衡(きんこう)を破ったのがマリクの強烈なエルファイアーの魔法だった。

突然、マリクが発した紅蓮の業火がハーディンを直撃し、

「ぎあああっ！」

ハーディンの悲鳴が響き渡った。

大きな打撃を受けたハーディンは思わず片膝(かたひざ)をついて崩れかけた。

と、すかさず正面からマルスがレイピアをかざして突進し、それを見て、左横からアランが、右横からドーガが、背後からカインが続いた。

同時にシリウスも剣をかざして高々と宙に飛んでいた。

決まった——！　だれもがそう思った。

だが、次の瞬間、
「うわあぁっ！」
悲鳴をあげたのはマルスたち歴戦の戦士だった。
突然、ハーディンの全身を黒い衝撃波が覆い、その衝撃波を浴びたマルスたちは壁まで弾き飛ばされて、床に落ちた。
衝撃波は鉄の板に激突したかと思うほど強烈で、マルスたちは、意識が朦朧(もうろう)とし、全身の激痛と痺(しび)れから動けなかった。
「ふっふふふ、はっははは――！」
ハーディンは不敵な笑みを浮かべながら闇のオーブをかざして立ちあがった。
黒い衝撃波は、闇のオーブが発していた。
慌ててオグマ、アストリア、ジョルジュ、ナバール、ゴードン、マリクの六人が攻撃しようとした。
だが、一瞬早く、ハーディンは闇のオーブを握り直して、
「うりあーっ！」
気合いをいれて念じた。
と、気流の渦が消え、闇のオーブは突風のような乱気流の渦を発した。
闇のオーブは所有する者の「気」に反応し、その力を増幅させるのだ。

乱気流の渦はオグマたちだけではなく、見守っていたジェイガンたちも包むと、
「ううっ――！」
とたんにジェイガンやウェンデル、シーダ、ミディアの四人は全身を震わせながら硬直させ、金縛りの状態になって、動けなくなった。
相手の動きを封じこむ闇のオーブの魔力だった。
それでも強靭（きょうじん）な体力の持ち主であるオグマたちがそれを振り切って必死にハーディンに立ち向かって行こうとすると、
「ふっふふふ！　こうなったら、互いに殺し合うがいい！」
ハーディンは掌（てのひら）で闇のオーブを一回転させ、ふたたび気合いをいれて念じた。
と、闇のオーブは今度は波動を発し、波動を受けたオグマたちは、
「ううっ――!?」
思わず自分の目を疑い、しきりに目をこすった。
耳鳴りとともに、視界が急に大きく歪（ゆが）み、ゆっくりと回転し始めたのだ。
やがて、幻覚がやみ、視覚も聴覚も、もとの状態に戻ると、
「さあ、マルスから殺すがいい！」
ハーディンが命じた。
すると、オグマたちは倒れているマルスに鋭い視線を向けたのだった。

彼らの目は一様にかっと見開き、炎が燃えているような異様な光を帯びていた。
闇のオーブの精神を操作する催眠の魔力にかかったのだ。
オグマたちは剣をかざしてマルスに突進し、見ていたジェイガンやシーダたちが思わず悲鳴をあげようとしたが、魔力の効力で声にもならなかった。
だが、次の瞬間、
「うわあああっ！」
悲鳴をあげたのはオグマたちだった。
突然、マルスの全身を目映(まばゆ)い黄金色の衝撃波が覆い、その衝撃波を浴びたオグマたちは壁まで弾き飛ばされ、床に落ちた。
「うっ――!?」
ハーディンは驚いて目を剝いた。
マルスたちが闇のオーブの黒い衝撃波を受けたときとまったく同じことが起きたのだ。
衝撃もマルスたちが受けたのと同じように強烈で、オグマたちは、意識が朦朧とし、全身の激痛と痺れから動けなかった。
だが、その衝撃のお陰で、オグマたちは闇のオーブの魔力から解けていた。
マルスは光のオーブをかざして立ちあがった。
目映い白光の衝撃波は、光のオーブが発していた。

　オグマたちが猛然とマルスに斬りかかって行ったが、倒れていたマルスの意識が回復したのは、まさにそのときだった。

　マルスは朦朧とした意識のなかで、闇のオーブに勝てるのは光のオーブだけだ――と、言ったガトーの言葉を思い出しながら、無意識のまま光のオーブを摑んでいた。

　そして、意識が回復した瞬間、光のオーブもまた、闇のオーブと同様、所有する者の「気」に反応し、その力を増幅させるのではないか――と、思ったのだ。

　と、同時に、渾身の力で気合いをいれ、念じていた――。

「く、くそっ――！」

　ハーディンは闇のオーブを反転させながらマルスに向けていた。

　同時に、マルスも光のオーブをハーディンに向けていた。

　と、光のオーブから黄金色の衝撃波が勢いよく発射すると、太いひとつの光の束となってもの凄い速度でハーディンに向かって行った。

　そして、ハーディンとマルスの中間で、闇のオーブから発した黒い衝撃波の太い束と、真正面から激しくぶつかり合った。

「うぬぬぬっ！」

　ハーディンはさらに気合いをいれると、闇のオーブから一段と強烈な衝撃波が発し、黄金色の衝撃波をじりじりと押してきた。だが、

マルスもさらに「気」を集中させ、黒い衝撃波を押し返した。
倒れていたアランたちもすでに意識が回復し、魔力が解けたジェイガンたちと、固唾(かたず)を飲んで一進一退の攻防を見守っていた。
光のオーブや闇のオーブを扱うには、かなりの精神力と体力を必要とする。
一瞬でも気を緩めたら、その時点で勝負は決まる。
マルスの顔は上気し、額から玉の汗が流れ落ちた。
ハーディンの顔もまた汗で濡れている。
と、黒い衝撃波がふたたび黄金色の衝撃波を押して優位に立った。
そのとき、鋭い閃光(せんこう)が宙を切り裂いた。
激しい攻防の間に、ハーディンの横にある大理石の円柱の陰に移動したゴードンが、一〇歩と離れていない至近距離から、ハーディンの首筋目がけて、矢を射ったのだ。
だが、矢を射ったのと、ハーディンが気配を感知したのと同時だった。
「うっ!」
振り向きざま、ハーディンは間一髪のところでグラディウスの穂先で矢を払った。
しかし、マルスはその隙を見逃さなかった。
ハーディンが振り向いた瞬間に、
「たああーっ!」

「うりゃあああっ！」

マルスはさらに渾身の力で気合いをいれた。

と、光のオーブから一際強力な黄金色の衝撃波が勢いよくほとばしって、黒い衝撃波を打ち破ると、怒濤のようにハーディンの全身を直撃し、

「うわああっ！」

ハーディンは中腰で宙に浮いたまま、凄まじい速度で後方に吹っ飛んだ。

そして、大理石の巨大な円柱に背中から激突し、ぎしっ——ハーディンの背骨が音を立てて軋んだ。

ハーディンはちょうど背中から円柱にもたれかかったような恰好になったが、それもほんの一瞬のことで、激突した反動から、弾かれたように前のめりになりながら、無様な恰好で二、三歩前に飛び出した。とたんに、

「うわあっ！」

ハーディンの顔は恐怖に大きく歪んだ。

レイピアをかざして突進したマルスが、すぐ目の前まで来ていたのだ。

「ハーディン！　覚悟ーっ！」

マルスのレイピアが宙を鋭く斬り裂き、血飛沫が宙に舞った。

「ぎあああっ！」

ハーディンは悲鳴をあげて仁王立ちになった。
次の瞬間、強い衝撃を受けてかっと両眼を見開き、ふたたび鮮血が宙に飛んだ。
マルスの突進を見てすかさずそのあとに続いたアランが槍の穂先をハーディンの肩に突き刺していたのだ。
さらに、剣をかざしたオグマが――、シリウスが――、ドーガが――、ナバールが――、ジョルジュが――、アストリアが――、カインが――、疾風のように次々にハーディンの周りを駆けぬけて行った。
そのたびに閃光が宙を切り裂き、鮮血が飛んだ。
ほんの数呼吸する間の、一瞬の出来事だった。
ハーディンの足元の床はたちまち大量の血で染まった。
歴戦の戦士たちは、一定の距離を置いてハーディンを包囲し、ハーディンの動きに目を光らせながら攻撃の隙を窺っている。
それは、互いに気を遣いながら、だれがとどめを刺すか――ということを決めかねているように見えた。
少なくともハーディンにはそう見えた。
すでに決着はついている。
死は確実にそこまできていた。

だが、ハーディンは自分の最期をだれにもゆだねたくなかった。
いかに死ぬか――今唯一ハーディンにできることは、それだけだった。
しかも、相手が攻撃してこない間に――。
ハーディンは、意を決すると、グラディウスの穂先の柄の口金の部分を逆手に持ち、
「うおおおおっ！」
絶叫しながら、残っていた最後の力を振り絞って、穂先を自分の喉に突き刺した。
と、ぶわっ――おびただしい鮮血が間歇泉（かんけつせん）のように勢いよく噴きあがり、高いドームの天井まで届くのではないかと思われるほど飛んだ。
やがて、その血の雨が降りかかると、ハーディンは天井を睨みつけたまま仁王立ちでそれを浴びた。
マルスたちはあ然としてその姿を見ていた。
すると、ハーディンは苦しそうに喘（あえ）ぎながら血まみれの顔でマルスを見た。
その目には憎しみとか怒りはまったくなかった。
今にも泣き出しそうな、哀しい目をしていた。
〈マルス王子よ……〉
ハーディンは必死にマルスに話しかけようとしたが、すでに声を出す力はなかった。
皮肉なことに、死を直前にしたこのときになって、初めてハーディンは闇のオーブの呪縛（じゅばく）

から解けて、正気に戻っていた。

〈ようやく……わたしは長い夢から覚めたようだ……。許してくれ……。わたしは自分のなかにある悪魔と戦っていた……。だが……わたしは弱すぎた……。必死になって、逆らったが……勝てなかった……〉

ハーディンは喉元を激しく震わせながら、必死に言葉にしようとしたが、それは呻き声にしかならなかった。

〈王子よ……ニーナを頼む……。彼女に伝えて欲しい……。わたしは……あなたを愛していた……と。どうか……許して欲しい……と〉

と、ハーディンの視線が宙の一点にとまった。

次の瞬間、ハーディンは鮮血で染まった床の上に、背中から大木のように倒れ落ちた。

そして、ハーディンの左手からこぼれ落ちた闇のオーブが床をころころ転がると、マルスの足元でとまった。

そこへ、神竜から少女の姿に戻ったチキがチェイニーとバヌトゥを連れ、アリティアの若き騎士のルークやロディ、ライアン、セシルらと一緒に駆けつけた。

さらに、パオラとカチュアの姉妹に護衛されて、ミネルバ、リンダ、マリーシア、フィーナら女性陣が、そのあとから、マチス、エルレーン、サムトー、ジュリアン、リカードらの一団が駆けつけた。

「外の戦いは終わったよ」
チキは微笑んで借りていた命のオーブをマルスに差し出した。
これで、五つのオーブが全部揃ったことになる。
マルスは紋章の楯を床に置いた。
楯には黄金色の縁取りがしてあり、中央に黄金色の燃え盛る炎の紋章がある。
その紋章から五つの方角に五個の台座のような飾りが彫られている。
マルスは紋章の上に光と、闇と、命のオーブを、さらにジェイガンから受け取った大地と星のオーブを丁重に置いた。
と、光のオーブが淡い黄金色の光を放った。
すると、それに呼応するかのように、命のオーブが真紅の光を、大地のオーブが翠の光を、星のオーブは蒼い光を次々に放った。
そして、黒い光——そのようなものがこの世に存在するかどうか、マルスたちにはよくわからないが、四つのオーブが美しい光を放つと、闇のオーブもまた内側から輝くような黒い光を発したのだった。
それは不思議な光だったが、黒い光——としか言いようがなかった。
それらの光が互いに刺激しながら徐々に大きくなったかと思うと、突然、ピカーッ——弾けたように爆発し、次の瞬間、広い謁見の間は目映い光の渦で埋まっていた。

居合わせた者たちは、あまりの眩しさに、思わず手で目を覆った。
やがて、その光が楯のなかに吸収されて消えると、
「おおっ！」
歴戦の戦士たちは思わず感嘆の声をあげた。
五つのオーブは両手にすっぽり収まるほどの大きさだったが、それが幼児の拳ほどの大きさに縮小し、楯の五個の台座にぴたりと収まっていた。
紋章の楯はそれ自体高貴で美しい楯だったが、五個の美しい聖玉を得た今、それはさらに輝きと華麗さを増して、見る者の心を奪った。
封印の楯が盗賊に壊されてから六〇〇年――長い長い年月を経て、今、やっと紋章の楯は封印の楯となり本来の姿と力を取り戻したのだ。
これが封印の楯か――！
長い歴史の重みを思いながら、歴戦の戦士たちは封印の楯の復活に感動していた。
復活させたのは自分たちなのだ――という誇りと充足感を覚えながら。
「この楯があれば――！」
マルスは楯の柄を握っておもむろに持ちあげた。
「マケドニアの地下で目覚めようとしている暗黒竜王メディウスをふたたび封印し、邪悪なる者からこのアカネイア大陸を守ることができるのか――！」

柄はほどよい重さで、前にも増して、しっくりと手に合った。
同時に、マルスの胸に新たな闘志が湧いてきた――。

四分の一時後――。
マルスたち一行が宮殿前の広場に出ると、城内を埋めた市民軍や援軍や市民たちが歓喜しながらアカネイア国歌を合唱していた。
「あら――」
ふと上を見たシーダが驚いて声をあげた。
「ねえ、見て、マルス」
広場の周囲に一〇本ほどの見事な桜の大樹が植えられている。
その桜の蕾(つぼみ)がほころびかけていた。
「これは――一〇日もしないうちに、アカネイアは満開の桜ですな」
アリティアの戦士たちは、特別な感慨を胸に、ジェイガンの言葉を聞いていた。
満開の桜――それは、アリティアの騎士たちにとって特別な意味を持っていた。
アカネイア軍の強襲を受けてアリティア城が陥落し、騎士団が全滅したという報せをシーダから聞いて、アリティアの騎士たちが屈辱と憤怒(ふんぬ)に涙したのは、マケドニア南部のホルム海岸の満開の桜の花の下だった。

それが、祖国奪還と打倒ハーディンへの旅の始まりだった。
あれから、一年を迎えようとしている。
だが、長い苦難の旅は、騎士たちには五年にも、いや一〇年にも感じられた。
そして、今、また新たな戦いが待ち受けていた——。

その夜、帝都は朝まで勝利の喜びに沸いた——。



第12章　竜の祭壇

1

五の月の中旬――。
マルスの率いる総勢一五四名の部隊が、竜の祭壇を目指して、ドルーア奥地の険しい岩山が連なる山岳地帯の道なき道を北上していた。
部隊は四つの班で編制されていた。
先頭は六〇名の歩兵部隊だった。
そのあとにアラン、ドーガ、カイン、ゴードンのアリティア騎士団の四天王と、ルーク、ロディ、ライアン、セシルら若き騎士が、さらにマルスが、ジェイガンが、シーダが、チェイニーが、シリウスが、マリクが、ジョルジュが、オグマが、ウェンデルが、エルレーンが、ナバールが続いた。

マルスの班にチェイニーがいたのは、部隊のなかで竜の祭壇の場所を知っているのはチェイニーだけだったからで、旧ドルーア城へと続いているドルーア街道から分かれて道なき道に入ってからは、チェイニーが道案内をつとめていた。

さらにそのあとに、パオラとカチュアの姉妹、ミネルバ、チキ、リンダ、マリーシア、フィーナらの女性陣を警護しながら、マチス、サムトー、バヌトゥ、ジュリアン、リカード、カシム、ウォレン、ロシェらの班が続いた。

最後部は六〇名の輸送部隊だった。

ハーディンを倒したマルスたちの連合軍が、聖騎士ミディアとアストリアにアカネイアを託して帝都を出発したのは、桜が満開の三の月の下旬のことだった。

桜前線とともにアカネイア街道を北上し、宿場街レフカンディまで行くと、連合軍はカダイン街道を西へ進み、アリティアへと向かった。

アリティアに到着したマルスは、アカネイアに遠征したアリティア軍を解散し、ドルーア遠征のために新たに一二〇名の歩兵部隊と輸送部隊を組織した。

ところが、アリティアを出発する前夜のこと。

かつて英雄アンリが暗黒竜王メディウスを倒したというアリティア王家の秘宝・神剣ファルシオンを持ち出すために、宝物殿に入ったマルスは愕然となった。

なんと、神剣ファルシオンが何者かによって奪い去られていたのだ。

アカネイア軍からアリティア城を奪還した日、マルスは宝物殿から大地のオーブを持ち出したが、そのときは、神剣ファルシオンは宝物殿にあった。
そのことは、一緒にいたジェイガンたちも確認している。
ということは、マルスたちがアカネイアに遠征していたこの二箇月の間にファルシオンは何者かによって奪い去られたことになる。
だが、ファルシオンの行方を調査する時間も余裕もなかった。
翌朝、連合軍は予定通りカダイン街道を西へ向かって出発した。
そして、カダイン街道とグルニア街道の分岐点である小さな宿場で、カダインへ帰国する四〇〇名のカダイン軍と別れた。
さらにグルニア街道を南下して、グルニアの南東部の港町オルベルンで大聖堂の司祭にグルニア王家の遺児であるユベロとユミナを預けると、四五〇名のグルニア軍とも別れ、海峡を越えてマケドニアへと渡った。
旧都マケドニアに到着したときには、暦はすでに五の月に替わっていた――。
ドルーア本島の北半分を占める広大なドルーアの地の、そのほとんどが険しい岩山が連なる山岳地帯だ。
旧都マケドニアを出発してドルーア街道を北上したその日、マルスたちは村や集落をいくつか通ったが、二日目から人里がなくなった。

そして、五日ほどしてドルーアとの旧国境を越えると、視界が一変した。新緑の鮮やかな森林や草原が目の前から消え、岩肌が剝き出しの、荒涼とした山岳地帯に入った。

ドルーア街道は旧ドルーア城へと続いているが、そこから先は、街道とは名ばかりで、輸送部隊の馬車がやっと通れるほどの、狭い、石ころだらけの道だった。

さらに、ドルーア街道から分かれると、水が涸れて巨大な岩や石が露出した川床が奥へ奥へと続いていた。

部隊はついに馬車を諦め、兵士たちは野営の道具や食料を担いで上流へと向かった。

ドルーアはまさに辺境の地だった。

一〇年前、この辺境の地ドルーアで、暗黒竜王メディウスが永い眠りから覚めた。やがて、マケドニア王国とグルニア王国を併合して、ドルーア帝国を再建すると、聖都カダインの大司祭ガーネフと手を組み、大軍を率いてアカネイア王国を侵略し、のちに暗黒戦争と呼ばれるようになる先の戦争に突入した。

だが、三年半前、マルスが率いる連合軍がこのドルーアの地でメディウスを倒し、メディウスの死とともにドルーア帝国も消滅した。

以来、ドルーアの地は放置されたままになっている。

ドルーア街道から分かれてから三日目の夕方のことだった。

急峻な坂をやっと登りきると、眼下に岩場の平坦地が広がってい、その向こうに、両側から天を突くような断崖絶壁の岩山に挟まれた、V字谷があった。
見るからにいわくありげな不気味なその谷を前にして、部隊に緊張が走った。
「あれが、野生化した飛竜が棲んでいる飛竜の谷さ」
道案内のチェイニーが言った。
「でも、あの谷に棲む飛竜たちは、火竜の墓場に棲む火竜と同じように、凶暴な蛮族に支配されているんだ。竜の祭壇へ行くには、あの谷を突破しなければならない」
半時後――。
マルスたちは、谷の手前の岩場にジェイガンや女性陣を残し、部隊を率いて赤い満月に照らされている飛竜の谷に入った。
谷底には、やはり巨大な岩や石が露出していた。
また、谷底の幅は成人男子の歩幅にしてわずかに一〇〇歩あまりしかなく、断崖絶壁の飛竜の谷は、川のように蛇行しながら、奥へ奥へと続いていた。
歴戦の戦士たちが飛竜の群れと蛮族の攻撃に備えながら先に進み、そのあとに一定の距離を置いて戦士たちを護衛するような形でゴードン率いる兵士たちが続いた。
チェイニーによると、谷をぬけるのに、成人男子の徒歩で、半時は要するという。
谷のなかほどまで進んだときだった。戦士たちは殺気を感じて、身構えた。

その直後、頭上で凄まじい羽音がした。
断崖に潜んで攻撃の機会を窺っていた五〇頭あまりの飛竜の群れだった。
頭上の狭い谷の空間をぎっしりと埋めた飛竜の群れは、急降下しながら紅蓮の炎を吐いて戦士たちを襲撃してきた。
さらに、前方の岩陰に潜んでいた一〇〇名あまりの槍や剣で武装した一団が、疾風のように闇を裂き、奇声をあげながら攻撃してきた。
背が低いわりには手足が異様に長くて太い、赤褐色の肌をした蛮族だった。
だが、部隊の反応も素早かった。
後続のゴードン率いる兵士たちが一斉に飛竜の群れに矢の嵐を浴びせた。
一二〇名の兵士たちは三班に分かれていて、一班が矢を射ると、すかさず二班が矢を射、さらに三班が射、矢は間断なく闇を切り裂いた。
戦士たちも飛竜の群れの炎をかわしながら、接近した蛮族を迎撃した。
そして、白い巨大な神竜に変身したチキが飛来して、飛竜の群れとの戦いに参戦すると、戦士たちはすかさず反撃に転じた。
北の大地の氷竜神殿に向かう途中、マーモトード砂漠に棲む野蛮で凶暴な砂の蛮族や、火炎山脈に棲む火の谷の蛮族との戦いを体験している戦士たちは、身軽で俊敏な蛮族の動きに惑わされることはなかった。

壮絶な戦いが始まってほどなく、蛮族の首領は愕然となった。
相手は蛮族の数の五分の一にも満たないが、いずれも桁外れた腕の持ち主だからだ。
マルスの秘剣レイピアが、シリウスの剣が、アランの銀の槍が、ジョルジュの剣が、ナバールの長剣が、オグマの剣が、次々に宙を切り裂き、悲鳴とともに蛮族たちのおびただしい鮮血が岩肌や地面に飛び散った。
首領が慌てて退散の号令をかけたときには、蛮族は半数近くまで減っていた。
蛮族が谷の奥へ向かって一斉に遁走し、同時に、三〇頭あまりにまで減っていた飛竜の群れも断崖絶壁の谷の上空に向かって逃げ出すと、戦士たちはすかさず蛮族を追い、兵士たちもそのあとに続いた。
戦士たちは飛竜の谷をぬけたところで蛮族の姿を見失ったが、歩兵部隊がそのまま数班に分かれて蛮族を追跡して行き、輸送部隊はジェイガンや女性陣を連れて来るために飛竜の谷に戻って行った。
谷の出口に残った戦士たちの目の前に、雪をかぶった険しい山脈に四方を囲まれた荒涼とした岩場が盆地のように広がっていた。
この広大な岩場の北部に、赤い満月の光を浴びて、巨大なコップを逆さにしたような円筒形の不気味な奇岩が天に向かって聳えている。
「あれが、竜の祭壇さ――」

チェイニーがその奇岩を指差して言った。
やがて、追跡を諦めて兵士たちが戻って来た。
だが、最後に戻って来た班が、思いもしない情報をもたらした。
この先の岩場に意識を失った瀕死の戦士がいる——というのだ。
マルスたちは兵士たちに案内されてその岩場へ行くと、入り組んだ岩場の奥に、三〇歳前後の血まみれの戦士が岩にもたれて倒れていた。
その戦士の顔を見て、歴戦の戦士たちは思わず驚きの声をあげた。
戦士は、ちょうど一年前、聖都カダイン近郊の砦でヨーデルの策略にはまって魔道軍に包囲されていたアリティアの遠征隊の危機を救うと、「ミネルバを頼む！」——と、マルスに言い残して姿を消したミネルバの兄ミシェイルだった。
「ミシェイル殿！」
マルスはミシェイルに駆け寄って抱き起こすと、
「しっかりしてください！　ミシェイル殿！」
激しくミシェイルを揺すった。
と、意識が戻って、ミシェイルはおもむろに目を開けた。
だが、焦点が定まらず、視線は宙を彷徨っている。
すでに視力を失っているようだ。

「ぼくです！　マルスです！」
マルスが名乗ると、
「マ…マルスか……」
やっとミシェイルが反応を示した。
「よかった……」
ミシェイルは微笑むと、
「こ…これを……」
震える手で、一冊の豪華な書を差し出した。
ガーネフの秘法マフーを唯一封じることができると言い伝えられているスターライトの魔道書だった。
「ガ…ガーネフから……奪って……来た……」
「ガーネフから——!?」
「や…奴は……竜の……祭壇に……いる……」
苦しそうに喘ぎながら、ミシェイルは必死に唇を動かした。
「い…急げ……。メ…メディウスが……目覚め……ようと……している……」
「わかりました！」
マルスはミシェイルの手を力強く握りしめた。

だが、ミシェイルには握り返す力も残っていなかった。
「ミ…ミネルバは……？」
ミシェイルが聞いた。
「われわれと一緒です！　もうじきここにやって来ます！」
「そうか……」
ミシェイルが安心したように小さく頷（うなず）いた。
「マ…マリアが……」
「マリアが——？」
昨年の二の月、マリアは、クーデターを起こしたリュッケ将軍によって姉ミネルバとともに捕らえられたが、その晩、リュッケ将軍とともに現れた謎（なぞ）の魔道士によって牢（ろう）から連れ去られてしまった。
その行方（ゆくえ）をミシェイルはずっと追っていたのだ——。
「マリアが竜の祭壇に捕らわれているのですね！」
確認するようにマルスが聞いた。
「ニ…ニーナも……」
「そして、ぼくの姉上も一緒に捕らわれているのですね！」
ミシェイルは小さく頷くと、

「ミ…ミネルバに……伝えてくれ……」
苦しそうに大きく顔を歪めた。
そして、二度、三度と肩で大きく息をすると、
「お…おれに……代わって……マリアを……」
と、言って、ミシェイルはゆっくりと目を閉じた。
その直後、ガクッ——と、首が垂れた。
「ミシェイル殿！」
マルスは何度も激しくミシェイルを揺すった。
だが、ミシェイルは二度と答えなかった。
輸送部隊の案内でジェイガンや女性陣とともに飛竜の谷をぬけて来たミネルバが、そのことを知らされたのは、それから四分の三時後のことだった。
突然の悲報と変わり果てた兄の姿を見て、ミネルバは茫然と立ち尽くしていた。
綺麗に血が拭き取られたミシェイルの顔は、穏やかで、かすかに微笑んでいる。
お兄さま……ミネルバは話しかけようとしたが、声にならなかった。
ミネルバは崩れ落ちるように座りこむと、やがてミシェイルの胸に抱きついた。
そして、激しく嗚咽した——。



一時後——。
マルスたちは小高い丘にミシェイルを埋葬すると、兵士たちが手分けして摘んで来た野の花を墓標に手向けた。
花は、かすかに夜風に揺れた——。

2

円筒形の竜の祭壇の奇岩は、飛竜の谷から見て想像していたよりも、とてつもなく巨大なものだった。
部隊は、民家ほどもある大きな岩が無数に突出している迷路のような岩場を縫いながら奇岩を目指したが、岩陰から奇岩が姿を現すたびに、マルスたちはその威容と迫力に圧倒された。
そして、長かった岩場の行軍を終えて、奇岩の全容を目の前にしたときには、飛竜の谷を出発したときにはまだ東の空にあった赤い満月が、天を突くように聳え立っている奇岩の上空に移動していた。
チェイニーによると、この奇岩を徒歩で一周するのに半時を要し、その表面の広さは、アリティア城の敷地に匹敵するという。

また、高さも、アリティアの天守塔の三〇倍はあるという。

さらに、奇岩に接近すると、奇岩とこちら側を切断するように、地獄のような急峻な深い谷の亀裂が東西に走っていたが、この谷に、成人男子の歩数にして二〇〇歩もある長い石橋がかけられていた。

奇岩からは、音は低いが、息がもれているような、不気味な唸り声がした。

凶暴な獣が獲物を狙って喉を鳴らしているような音にも聞こえた。

静まり返った一帯に、この異様な音だけが、一定の間合いをおいて響いている。

部隊は、石橋を渡って、竜の祭壇の玄関に向かった。

チェイニーによると、竜の祭壇は、古代竜族の守護神を祀るために、はるか大昔、五〇年の歳月をかけて奇岩のなかに建造された、神殿の遺跡だという。

竜の祭壇の玄関は風化してかなり傷んではいたが、立派な造りの石柱やアーチには見事な彫刻や細工が施されていて、神殿としての面影を強く残していた。

松明を灯して玄関を入ると、奥はドームのホールになっていて、壁にはやはり見事な彫刻や細工が施されてい、床には規則正しく石畳が敷かれていた。

その奥に、深い闇の空間が続いていた。

不気味な唸り声はその闇の奥から聞こえてくる。

奥へ進むと、突然、闇の前方に現れた集団が奇声を発しながら強襲してきた。

一〇人のダークマージに率いられた三〇人あまりの蛮族だった。
ダークマージは、ガーネフの直属の僕(しもべ)で、かつてガーネフの部下であった悪しき司祭がガーネフの魔力で再びこの世に蘇(よみがえ)った闇の司祭だ。
また、蛮族は飛竜の谷で襲撃してきた蛮族と同族で、ダークマージの奴隷だった。
蛮族は身軽で俊敏で、その上、闇のなかでも野生の獣のように目が利く。
だが、蛮族の奇声を聞いたとき、戦士たちもまた猛然と斬りかかっていた。
剣と剣がぶつかり合う金属音が闇に響いたが、それも、ほんのわずかの間だった。
ダークマージたちもまた必死にメティオの魔法を駆使して隕石(いんせき)の粒の嵐を戦士たちに浴びせたが、鍛えぬかれた戦士たちの前には無力だった。
やがて、ダークマージや蛮族の断末魔(だんまつま)の悲鳴が闇を切り裂き、鮮血が闇に飛んだ。
輸送部隊が女性陣を警護し、歩兵部隊が参戦したときには、すでに勝負はついていて、床にはダークマージや蛮族の無残な死体がごろごろ転がっていた。

部隊はさらに奥に進んだ。
不気味な唸り声は奥へ行くほど大きくなっている。
そして、ある地点まで来ると、急に、息が詰まるような奇妙な感覚にとらわれた。
背筋が凍るような、異様な気配が、周囲の闇を包んでいる。

邪悪な気が充満し、渦を巻いているのだ――と、チェイニーが説明すると、戦士たちはさらに気味悪がって動揺し始めた。

そこで、マルスは邪悪な気に支配されていない地点まで歩兵部隊と輸送部隊を撤退させると、戦士たちを率いてさらに奥へと向かった。

アラン、ドーガ、カイン、ゴードンのアリティア騎士団の四天王と、ルーク、ロディ、ライアン、セシルら若き騎士を先頭に、マルス、シリウス、マリク、ジェイガン、シーダ、ジョルジュ、オグマ、チェイニー、ウェンデル、エルレーン、ナバールらが続き、そのあとに、パオラとカチュアの姉妹、ミネルバ、チキ、リンダ、マリーシア、フィーナらの女性陣を警護しながら、マチス、サムトー、バヌトゥ、ジュリアン、リカード、カシム、ウォレン、ロシェの男性陣が続いた。

と、先頭のアランたちが立ち止まって身構えた。

闇のなかに魔物の殺気を感じたのだ。

気配は前方と左右の三方向からする。

不気味な唸り声はさらにその奥から聞こえてくる。

この声に混じって、低い咆哮がしたかと思うと、突然、三方向から紅蓮の炎が戦士たちを襲い、戦士たちは素早く宙に飛んで炎をかわした。

紅蓮の炎の明かりに照らし出されたのは三頭の魔竜だった。

魔竜は飛竜や氷竜とほぼ同じ大きさで、体全体が暗緑色をしていた。
魔竜たちはさらに急接近して二度目の紅蓮の炎を吐こうとした。
だが、そのとき、三つの強烈な冷気の渦が、続け様に三頭の魔竜に炸裂した。
ほんの一瞬早く、マリクとウェンデルとエルレーンの三人が、一頭ずつに狙いを定め、同時にブリザーの魔法をかけたのだ。
魔竜たちは、瞬時にして凍てつき、動きをとめた。
次の瞬間、マルスや戦士たちの剣や槍先が闇を切り裂いた。
魔竜たちの悲鳴が闇に轟き、大量の鮮血が飛散した。
やがて、血まみれになった魔竜たちは次々に地響きを立てて倒れた。
闇の空間にふたたび静寂が戻ると、
「ふっふふふふ……」
不気味な笑い声がして、戦士たちは思わず身構えた。
と、前方の一点が、不思議な淡い光に包まれて明るくなった。
その明かりに、玉座に座ったひとりの男が照らし出された。
濃紺の法衣をまとった小柄な初老の男だ。
「小僧よ――！　またしても、わしの邪魔をするのか――！」
男は、鋭い眼光でマルスを睨みつけた。

闇の大司祭ガーネフだった。
「ガーネフ――！」
剣の柄を握り直し、二歩、三歩――マルスたちはにじり寄った。
不気味な唸り声は、ガーネフのさらにその奥から聞こえてくる。
「姉上たちは、どこだ!?」
マルスが叫んだ。
「ふっふふふ！　あのシスターどもは、暗黒竜王復活の生け贄として捧げた！」
年に一度、竜の祭壇の奇岩の真上を満月が通過する。
それが、五の月の中旬の、この日だった。
その満月がちょうど奇岩の真上に到達するときを見計らって、ガーネフは、竜の祭壇で眠っている暗黒竜王メディウスの前に、強力な催眠術をかけたニーナ、エリス、マリア、レナの四人を生け贄として捧げると、一時にも及ぶ長い呪文を唱え、復活の儀式を行った。
メディウスが目覚めるためには、五の月の中旬の皓々たる満月の光と、高貴で若くて美しいシスターたちの高揚した魂のエネルギーが必要だった。
目覚めれば、あとはメディウスが生け贄を食べるだけである。
儀式が終了した直後だった、配下のダークマージが、マルスたちの部隊が竜の祭壇に侵入した――と、告げに来たのは。

「暗黒竜王メディウスは、今、まさに目覚めようとしている！　今宵の満月が、ちょうどこの竜の祭壇の真上に到達した、その瞬間になっ！」
「なにっ⁉」
マルスたちは、奇岩の上空に移動していた満月を思い返して、焦った。
あれから、すでに六分の一時は経っている。
「そうなれば、その封印の楯の力はもはや及ばぬ！　そして、マルスよ――！」
ガーネフはおもむろに玉座から立ちあがると、
「お前は、ここで死ぬ――！」
マルスを指差して不敵な笑いを浮かべた。
だが、このとき、マルスの視線は別のところに引きつけられていた。
ガーネフは腰に、見るからに高貴な剣を携えている。
ガーネフが玉座から立ちあがったとき、マルスは初めてその剣に気づき、その剣に引きつけられるように視線を向けたのだ。
「その剣は――⁉」
マルスは思わず叫んだ。
「神剣ファルシオン！」
戦士たちも驚いてガーネフの腰の剣を見た。

ガーネフとの距離が離れている上に、暗いので、戦士たちには剣の細かい部分まで見ることはできないが、黄金色で楕円形の柄頭(つかがしら)には神竜族の王家の紋章が彫られ、その中央には美しい青玉が埋められていた。

護拳(ナックルボウ)にも見事な古代竜族の文様が彫られている。

また、黄金色に輝く大きくて立派な十字の鍔(つば)は神竜族の王ナーガの牙(きば)を模したもので、その中央にはやはり美しい大粒の珠玉が埋めこまれている。

さらに、立派な鞘(さや)には豪華で優雅な模様が施されていた――。

だが、細かい部分が見えなくても、その剣の華麗で気品に溢(あふ)れた美しさと、特徴ある柄頭や鍔や鞘の形から、戦士たちはひと目でアリティア城から奪い去られた神剣ファルシオンだとわかった。

「いかにも！」

ガーネフは得意げに答えた。

「おまえらがハーディンを倒したとき、わしはパレス城の宮殿に潜んでいたが、万が一のことを考え、すぐさまアリティアへ飛んだのだ！」

「し、しかし――！」

アリティア城の宝物殿に侵入することは、何人(なんぴと)と言えども、不可能だ。

宝物殿の鍵はアリティア王家を継ぐ者だけが持っているからだ。

そして、マルスの首にかけてある神剣ファルシオンを象った美しい蒼い宝石で作られた小さなペンダントがその鍵だった。
「驚くのも無理はない！　だが、いかに侵入不可能なところと言えども、わしの魔術をもってすれば、わけのないこと！　さあ、マルスよ——！」
ガーネフは顔の前で両手を開いて交差させた。
両手の一〇本の指の爪は、人間のそれとは思えないほど異様に長く、鋭かった。
「わが暗黒魔法、マフーの力を思い知るがよい！」
ガーネフは渾身の力で気を集中させ、
「たあああーっ！」
鋭く一喝すると、両手から不気味な陽炎があがった。
その陽炎が巨大化しながらガーネフの全身を包み、ガーネフの姿が激しくぶれたかと思うと、突然、床が大きく揺れ動いて、戦士たちは思わず倒れそうになった。
戦士たちは魔力のせいで平衡感覚を失ったのだ。
すると、いきなりガーネフの姿が二つに増えた。
さらにそれが四つに増え、八つに増え——一瞬にして、六十数体のガーネフが戦士たちの前に立ちふさがった。
暗黒魔法マフーは、分身の術で相手の攻撃や動きを封じこみ、さらにその生命力を吸いあ

げてしまうと言われている死の魔法だ。
「ふっふふふ！」
ガーネフの分身たちは、顔の前で交差させた両手から不気味な陽炎を発しながら、声を揃えて不気味に笑い、間合いを詰めた。
いくら分身を倒しても、本物のガーネフを倒さなければ意味はない。
だが、どれが本物でどれが分身なのか、見当もつかなかった。
その上、戦士たちの平衡感覚は失われたままだ。
視界は激しく揺れ動いていて、戦士たちは嵐に遭遇した難破船の甲板にいるような不安定な姿勢を強制され続けている。
長引けば、それだけ不利になる。
「く、くそっ！」
「こうなったら、片っ端からやるしかねえ！」
戦士たちは、それぞれの目の前にいる敵から倒すことにした。
だが、勢いよく踏み出したとたん、
「うわああっ！」
手足が千切れるような激痛が、戦士たちの全身を走った。
戦士たちは悶え苦しみながら、次々に振りかざした武器を床に落とした。

周囲の空気が急激に圧縮し、その凄（すさ）まじい重圧に押しつぶされて、全身の肉や骨までがばらばらに吹き飛んでしまいそうな、強烈な衝撃が戦士たちの全身を襲っていた。

「はっははは！」

ガーネフの分身たちは、声を揃えて笑うと、

「今、楽にしてやる！」

声を揃えて言い、最後の仕上げにかかるために一斉に両手を交差し直した。

そのときだった。突然、目映（まばゆ）い蒼い光が戦士たちを包んだ。

光源は、戦士たちのなかほどにいたマリクの印を結んだ両手だった。

ガーネフがマフーの魔法をかけた直後、マリクもまた魔道書スターライトの呪文を唱えたが、ガーネフの魔法の方が一瞬早く効力を発揮し、結果として、スターライトの魔法が封じられたことになった。

それでも、マリクは呪文を唱え続けていたため、ガーネフの魔法からひとりだけ逃れることができたが、マフーの魔力があまりにも強力過ぎたために、スターライトの本来の力を発揮できないでいた。

だが、マフーの魔力が弱まるときが必ずくると信じて、必死に呪文を唱えていた。

そして、その力を発揮する絶好の機会が訪れた。

ガーネフの群れが最後の仕上げにかかるために一斉に両手を交差し直したが、そのとき、

次の呪文を唱えるために間があいて、ほんの一瞬だが、マフーの魔力が弱まったのだ。
そのわずかな隙をついて、スターライトの魔力が蒼い光を放った——。
「うぬぬぬっ！」
予期せぬできごとに、ガーネフの分身たちは、思わず顔色を変えた。
印を結んだまま前に出たマリクは、さらに気を集中させて、一際強烈な蒼い光をガーネフの分身たちに向けると、ガーネフの分身たちもまた、気を集中させて、強力な陽炎の衝撃波で必死に抵抗し、スターライトとマフーの魔法が、まともにぶつかり合った。
だが、スターライトはマフーの魔法を封じる唯一の魔法だ。
そのことを知っているだけに、マリクには勝つ自信があった。
マリクは渾身の力をこめると、
「うりあああっ！」
最大限の気を集中させた。
と、蒼い光がさらに光を増したかと思うと、衝撃音とともに勢いよく爆発し、無数の流星となって弾け飛んだ。
その強烈な流星の嵐が、凄まじい威力でガーネフの分身たちに炸裂すると、一瞬にしてガーネフの分身が消え、ガーネフひとりが残った。
同時に、戦士たちにかかっていたマフーの魔法も解けた。

「うぬぬぬっ！」
ガーネフは舌打ちすると、ガーネフは淡い光に包まれてすーっと消えかけた。
瞬時にして、時空を越え、別の地点に移動しようとしたのだ。
〈神剣ファルシオンが――！〉
戦士たちのだれもがそう思ったとき、鋭い閃光が宙を切り裂いた。
ガーネフの動きを見てとったアランが、素早く床に落としていた銀の槍を拾いあげ、ガーネフ目がけて投げたのだ。
と、三稜角の穂先が、ガーネフの肩口をかすめた。
「うっ――！」
ガーネフは消えかけたままの姿で動きをとめると、
「あっ――!?」
驚いて目を見開いた。
猛然と突進して来たマルスが、目の前に迫っていたからだ。
アランが槍を投げたのと、秘剣レイピアを拾う余裕もなくマルスが素手でガーネフに突進したのは、ほとんど同時だった。
ガーネフは慌てて消えようとした。
だが、消えた――と思ったとき、マルスの手がガーネフの両肩を摑んだ。

その瞬間、ガーネフは完全に元の姿に戻った。
しかし、見かけによらずガーネフは身軽で俊敏だった。
ぐっと両足を踏ん張って、真正面からマルスを受け止めると、マルスの両手を払い除け、凄まじい形相でマルスの首を締めつけた。
ガーネフは小柄で、背丈はマルスの首までしかないが、この初老の男のどこにこんな力があるのかと思うほど、腕力が強かった。
ガーネフの異様なまでに長くて鋭い爪が数本、今にもマルスの喉元にぐさりと突き刺さろうとしていた。
「ふっふふふ！　死ねいっ！」
マルスの喉をひと掻きでえぐり取ろうとして、ガーネフが指先に最後の力をこめようとしたときだった。
「うりあああっ！」
マルスの渾身の気合いが闇に轟いた。
と、同時に、強烈な閃光がガーネフの頬を突き破った。
「うわあああっ！」
ガーネフは断末魔の悲鳴をあげ、かっと白目を剝いた。
強烈な閃光を発したのは、神剣ファルシオンだった。

マルスは、首を絞められている間に、ガーネフの腰に携えている神剣ファルシオンの柄を摑んで素早く剣をぬき、ガーネフの喉元を目がけて、勢いよく突きあげたのだ。

先の戦争で、マルスはガーネフの左胸をやはり神剣ファルシオンでひと突きにしたが、アカネイアのボア司祭によると、そのとき、ガーネフは瞬時にして時空を越える秘術と生命回復の二つの秘術をかけて、数日後、奇跡的に生き返ったという。

だが、今度は、ガーネフに秘術をかける隙を与えなかった。

ガーネフは即死だった。

マルスはそれを確認すると、ガーネフの喉元から神剣ファルシオンをぬいた。

と、ひと突きのもとに断り裂かれたガーネフの喉元と頰から、大量の鮮血が噴出し、ガーネフはそのまま仰向きに倒れた。

マルスが神剣ファルシオンを手にして戦ったのは、先の戦争で暗黒竜王メディウスを倒して以来のことだ。

ガーネフを一撃のもとに葬ったというのに、ファルシオンの青々とした鏡のような両刃には一滴の血もついていなかった。

油がしたたるような、鈍い光沢を放っている。

マルスはファルシオンの柄を握り直すと、

「急げっ！」

戦士たちを促した。

3

玉座の背後の闇を五〇歩ほど進むと、奥へ続く通路があった。
この通路の先に、地下へ下りる階段があった。
二〇段ほど下りると、踊り場があり、さらにその先に、また下へ向かう階段がある。
不気味な唸り声が、地響きのようにさらに大きくなると、顔を背(そむ)けたくなるような、生臭い、不快な匂(にお)いが鼻をついた。
また、下りるたびに、行く手が徐々に明るさを増してきた。
そして、最後の階段を下ると、
「あーっ!?」
さすがの歴戦の戦士たちも驚いて、思わず目を見開いた。
王都アリティアの大聖堂前の広場ほどもある、巨大な空間が目の前に広がっていて、そのはるか頭上の天井の岩盤をくりぬいた、天窓のような穴がある。
この、奇岩の頂上に開いていると思われる穴から、上空に移動してきた赤い満月が、下の巨大な空間を皓々と照らしていた。

下から見ると、満月とこの穴は同じような大きさをしていて、今にも満月がこの穴をすっぽりと埋めようとしている。

〈暗黒竜王メディウスは、今、まさに目覚めようとしている。今宵の満月が、ちょうどこの竜の祭壇の真上に到達した、その瞬間になっ——〉と、ガーネフが言ったが、それは、満月と穴の大きさがぴったりと重なったそのときを意味していた。

そして、この穴の真下の、空間の中央に位置している祭壇の上で、月光を浴びた暗黒竜王メディウスが、身を横たえて眠っていた。

メディウスは、飛竜や魔竜よりも数倍も大きい、黒色の巨竜だ。

不気味な唸り声は、このメディウスの、息をするたびに吐く音で、生臭い、不快な匂いは口臭だった。

その醜く大きく裂けた口元の前に、揃いの白い絹のローブをまとった若くて美しい四人の女性が倒れていた。

ニーナ王妃と、エリス姫と、マリア姫と、マチスの妹レナだった。

強力な催眠術をかけられたこの四人は、一時にも及ぶ長い復活の儀式の間、ガーネフに命ぜられるまま、一心不乱に両手を上げ、礼拝を繰り返した。

精神はずっと高揚し続けたままで、そのエネルギーは際限なく吸いあげられた。

そして、儀式が終わると、四人は気を失ってその場にばったりと倒れた。

肉体的にも極度の疲労に達していたが、精神的な消耗がもっと激しかった。神経は麻痺し、意思や感情がすべて消え失せ、魂の脱け殻と化していた――。

だが、幸運にも、まだメディウスは目覚めていない。

「急げっ！」

マルスの号令に、戦士たちは祭壇に突進した。

チェイニーによると、この祭壇の下の地中には、数千もの地竜が眠っているという。

マルスや戦士たちが、メディウスの目覚めに備えて警護に当たると、マリクが恋人のエリスに、ジュリアンが心を寄せているレナに、ミネルバが妹のマリアに、シリウスがかつて愛を誓ったニーナに駆け寄った。

マリクは、エリスを抱き起こすと、

「エリスさま、ぼくです！　マリクです！　目を覚ましてください！」

激しく揺すった。

「ぼくは、あなたを守りたくて、魔道を学んだ！　でも、そのために、あなたのそばについていてあげられなかった！　ぼくさえいれば、こんな目にあわせるようなことはなかったのに！　それが今でも、悔やまれます！　でも、エリスさま！　ぼくはもう二度とあなたのそばを離れません！　たとえ、どんなことがあろうとも！　ですから、お願いです、エリスさま！　どうか、目を覚ましてください！」

「マ…マリク……？」

エリスの意識が戻った。

だが、エリスは一瞬、戸惑いをみせた。

無理もなかった。エリスとマリクが会うのは、二年振りのことで、エリスがマリクと最後に会ったときには、マリクの顔にはまだ少年のあどけなさが残っていたが、今、目の前にいるマリクからはその面影（おもかげ）は消え、逞（たくま）しい若者に成長している。

また、一昨年の秋のアンリ祭が終わったあとから、聖都カダインにいるマリクからの手紙もばったり途絶えていた。

その間、マリクはライバルのエルレーンの策略によって、大神殿の地下牢に捕らえられていたが、昨年の二の月、アリティア城がアカネイア軍に襲撃されたときに、ガーネフによって拉致（らち）されたエリスには、そのことを知る術（すべ）もなかったのだ。

だが、目の前にいるのが、間違いなくマリクだとわかると、

「ああ、マリク！」

エリスは脅（おび）えてマリクの胸にしがみつき、

「助けて、ガーネフが怖い！　お願い、助けて！」

激しく震えた。

「エリスさま！　もう大丈夫です！　ぼくはここにいますから！」





マリクはエリスを強く抱き締めると、
「さあ、急がなくては！」
祭壇から逃げるために、エリスを抱えあげた――。

「レナさん、目を覚ましてくれよ！」
ジュリアンもまたレナを抱き起こすと、
「おれだよ、ジュリアンだよ！」
激しく揺すった。
「おれは、なんにも取り柄のない男だけどさ、あんたのためだったらなんでもできる！　だから、目を覚ましてくれよ！　別に何も望まないけど、レナさんの笑顔を見ていたいんだよ！　なあ、レナさん！」
「ジュリアン……？」
レナは目を覚まして、驚いた。
だが、間違いなくジュリアンだとわかると、
「やっぱり来てくれたのね」
ほっとして微笑(ほほえ)んだ。
「きっと、あなたが助けに来てくれると信じてた。だから、どんなに恐ろしくても、我慢で

きた……」

ジュリアンとレナが会うのも、一年三箇月振りだった。

マチスの妹であるレナもまた、昨年の三の月、マケドニアでリュッケ将軍の率いる反乱軍が蜂起(ほうき)したあと、カダインの魔道士だと名乗る謎(なぞ)の老人によって、連れ去られたままになっていた。

「ねえ、マチス兄さんは？」

「一緒だよ、レナさん」

「よかった。ねえ、ジュリアン、ひとつだけお願い、聞いてくれる？」

レナはジュリアンの手を握った。

「ああ、なんだっていいから言ってみなよ。おれにできることなら」

ジュリアンは顔を赤らめながらうろたえていた。

「これから、わたしのこと、レナ……って呼んで」

「えっ？」

「だって、いつまでも他人みたいでおかしいわ」

「た、他人みたい……って？」

ジュリアンはレナが言っている意味を測りかねていた。だが、

「わたしたち、マケドニアに帰ったら、一緒に暮らそう」

レナはこともなげに、さらりと言った。
「レナさん……あっ、いや、レ、レナ……まさかそれって？」
「神様はきっと許してくれる。それに、兄さんだって。だって、わたし、あなたのこと、好きなんだもの」
「レナ……！」
ジュリアンは頷くと、祭壇から逃げるために、レナを抱えあげた──。

「マリア！　目を覚ましなさい！」
ミネルバもマリアを抱き起こすと、
「わたしです！　ミネルバです！　しっかりしなさい！」
激しく揺すった。
「あっ……お姉さま……？」
マリアの意識がやっと戻った。
「もう大丈夫よ、安心して！」
「お姉さま……怖かった……！　怖かったわ……！」
マリアはミネルバに抱きついた。
「ごめんね、マリア。あなたをこんな目にあわせて」

「あっ！　ねえ、ミシェイル兄さまはどうなされたの⁉」
「兄さんなら……！」
衝撃を与えまいとして、ミネルバは咄嗟に答えた。
「大丈夫よ！　心配しないで！」
「ほんと⁉　じゃあ国に帰ったら、また、昔のようにみんなで暮らせるのね！　よかった、お姉さま！　ああ、早くミシェイル兄さまに会いたいな！」
「マリア……」
ミネルバは、涙がこぼれてくるのを隠すようにマリアを抱き締めると、
「さあ、急いで！」
祭壇から逃げるために、肩を貸してマリアを立たせた——。

「ニーナ王妃！　目を覚ますのだ！」
シリウスもニーナを抱き起こして、
「しっかりされよ！」
激しく揺すった。と、
「あっ……？」
意識が戻ったニーナは、

「カ……カミュ……殿？」
驚いて白い仮面のシリウスを見つめた。
三年振りの再会だった。
しかも、カミュは仮面で素顔を隠している。
だが、仮面の奥の紺碧の双眸を見て、ニーナはひと目でカミュだとわかった。
敵対する国同士の、騎士団の名将と王女の許されぬ恋だったが、かつて愛した男だ。
忘れるはずはなかった。だが、
「な…なぜ……あなたが……？　わたし……夢を見ているの？」
三年前、カミュは旧グルニアで連合軍と戦って戦死している。
アカネイアの国を思って、ニーナはハーディンと結婚したが、カミュの戦死――それが、
最終的にニーナに結婚を決意させた決定的な理由だった。
そのカミュが目の前にいる。信じられないのも無理はなかった。
「あ…あなたが生きていたなんて……！」
「ニーナさま……」
シリウスはじっと見つめた。
紺碧の双眸に見つめられ、ニーナは胸が締めつけられる思いだった。
カミュへの思いと、悔いと、結婚した負い目が、複雑に入り交じっていた。だが、

「あなたはなにか思い違いをしている」
シリウスが言った。
「わたしは、シリウスという者、カミュではない……」
「シリウス……!?」
「……!」
二人はじっと見つめ合った。
見つめ合いながら、二人は前と変わらぬ愛を互いに感じとっていた。
懐かしい紺碧の双眸を見つめながら、カミュはわたしのために、わたしに負担をかけまいとして、白い仮面で正体を隠し、シリウスと名乗っている――ニーナはそう思った。
カミュの白い仮面は、自分への愛の証(あかし)なのだ――と。
「しかし、ニーナさま……」
シリウスは言った。
「カミュは生きている。そして、いつの日かきっと、あなたの前に現れるでしょう」
ニーナの瞳から思わず涙がこぼれそうになった。
「さあ、急がなければ!」
シリウスはニーナの手を取った――。
マリクがエリスを、ジュリアンがレナを、ミネルバがマリアを、そして、シリウスがニー

ナを連れて祭壇から離れ、戦士たちが眠っているメディウスに一斉に攻撃しようとしたときだった。
満月がはるか頭上の天井の穴のちょうど真上に到達して、皓々たる月光がさらに明るさを増した。
と、メディウスが一際大きな唸り声をあげ、戦士たちは思わず退いて身構えた。
メディウスは、ぎろり——と、巨大な眼を剝くと、
「ガオオオーッ！」
恐ろしい咆哮(ほうこう)をあげながら、頭上の満月に向かって立ちあがった。
暗黒竜王が眠りから目覚めたのだ。
と、それまでメディウスの巨体が塞(ふさ)いでいた祭壇に深い闇が現れた。
地中とを結ぶ闇の通路だ。
その闇が不気味な咆哮とともに怪しくうごめいたかと思うと、突如、七、八頭の地竜が我先にと闇から飛び出そうとした。
メディウスとともに、祭壇の下の地中の数千もの地竜もまた目覚めたのだ。
「封印の楯よ——！」
マルスはすかさず祭壇に封印の楯を向けた。
と、楯に埋めこまれている五つの宝玉が光り輝いたかと思うと、楯は目が眩(くら)むような強烈

な光を発した。
その光がメディウスや地竜たちがいる祭壇を包み、さらに巨大な空間いっぱいにまで広がって行った。
そして、その光が祭壇の闇のなかに吸われるようにして消えると、闇から飛び出そうとしていた地竜たちが忽然（こつぜん）と姿を消していた。
封印の楯の力が、一瞬にして、地中の地竜の群れを封じこんだのだ。
だが、いかに強力な封印の楯でも、目覚めたメディウスには効かなかった。
メディウスは戦士たちを見下ろして、
「我ガ復活ハ、ナッタ……！」
喉を鳴らしながら、超能力で語りかけた。
その眼はぞっとするような冷酷な光をたたえていた。
「愚カナ人間ドモ……ヒトリ残ラズ、殺ス……！」
メディウスは凄まじい紅蓮の業火を吐き、
「うわあっ！」
戦士たちは必死にかわした。
その炎の威力は、飛竜や火竜や氷竜などの比ではなかった。
火力、速度、破壊力――すべてにおいて桁（けた）外れていた。

だが、メディウスは容赦をしなかった。
猛炎を吐くと、巨大な尻尾が唸りをあげて一帯をなぎ払った。
その強烈な一撃を浴びて、
「ぎゃあーっ！」
戦士たちの悲鳴が次々にあがった。
殴り飛ばされた五人は、背中から石畳の床に落ち、一瞬気を失いかけた。
ロディ、マチス、ルーク、リカード、セシルの五人だった。
メディウスはさらにその五人に猛炎を浴びせようとした。
そのとき、メディウスの全身を凄まじい落雷が襲った。
マリクがかけたサンダーの魔法だった。
続けて、ウェンデルのかけたブリザーの魔法の冷気がメディウスを襲った。
さらに、ゴードンが、ウォレンが、ライアンが、カシムが、矢継ぎ早に矢を放った。
戦士たちの連続攻撃に、さすがのメディウスも思わずたじろいだ。
その隙に、マルスが、アランが、シリウスが、ジョルジュが、ナバールが剣や槍をかざして敢然とメディウスの巨大な足に斬りかかって行った。
そのあとにドーガ、カイン、オグマ、サムトー、ロシェらが続き、また尻尾の一撃を浴びた戦士たちも気を取り直して突撃して行った。

ジェイガンとシーダとチェイニーの三人は、ニーナやエリス、レナ、マリア、ミネルバ、カチュア、パオラ、フィーナ、バヌトゥらを連れて階段のところまで避難し、壮絶な戦いを見守っていた。

メディウスの体が巨大過ぎて、足への攻撃しかできなかったが、メディウスの血が宙に飛び、大量の血が床を染めると、

「ガオオオーッ！」

メディウスは咆哮をあげながら、巨大な翼を羽ばたかせて浮上した。

そして、宙を飛びながら、再び紅蓮の業火を放って反撃した。

メディウスは自在に飛び回りながら猛炎を吐き続け、戦士たちは防戦一方になった。

さらにメディウスは、階段のところに避難しているジェイガンたちにも炎を浴びせようとして、急降下した。

そのとき、突然、強烈な炎がメディウスを襲い、

「ガオッ!?」

メディウスは驚いて敵を見た。

チキが変身した白い神竜だった。

その神竜を見て、

「あーっ!?」

戦士たちもまた、驚きの声をあげた。
頭部に、神剣ファルシオンをかざしたマルスが颯爽と立っていたからだ。
チキの変身に気づいたマルスが、素早く駆け寄って、その頭に飛び乗ったのだ。
神竜は猛炎を吐いてさらに攻撃した。
だが、メディウスは俊敏にその攻撃をかわすと、すかさず反撃に転じた。
また、単に体が大きいだけでなく、想像を絶するような強靭な肉体の持ち主だ。
神竜も巨竜だが、メディウスはその神竜よりもさらに大きい。
炎の威力も、神竜のそれよりはるかに強力で破壊力がある。
まともに戦えば、神竜に勝ち目はなかった。
メディウスの業火が神竜を捕らえ、神竜の悲鳴が巨大な空間に響き渡ると、メディウスは至近距離から猛攻を加えようとして神竜に接近した。
そのとき、白熱の電光がメディウスを直撃した。
魔道書オーラの呪文を唱えていたリンダの聖光の魔法だった。
強烈な電光が火花を散らしながら、動きをとめたメディウスの全身を走りぬけると、今度は、黄金色の衝撃波がメディウスの全身を包んだ。
生命力を吸い取ると言われているマリーシアのリザイアの魔法だった。
メディウスは苦しそうに顔を大きく歪めると、さらに一段と強力な真空の渦が、その顔面

に炸裂した。
マリクのエクスカリバーの魔法だった。
「ガオッ！」
メディウスは思わず悲鳴をあげて天を仰いだ。
それを見てマルスが、
「たあーっ！」
高々と宙に飛んだ。
突如、目の前に現れたマルスの姿に、メディウスは、ぎょっ——となった。
マルスは、メディウスの眼の上を飛び越えて、その額に着地すると、
「メディウス！　覚悟ーっ！」
逆手に持ち替えた神剣ファルシオンを頭上にかかげた。
月光を浴び、神剣ファルシオンの美しくて高貴な両刃が目映い光を放った。
次の瞬間、
「うりゃあああーっ！」
マルスは渾身の力で、メディウスの眉間に、神剣ファルシオンを深々と突き刺した。
必殺の一撃だった。
「ギャオオオオーッ！」

メディウスは凄まじい悲鳴をあげ、かっと眼を剝いた。
神剣ファルシオンの両刃は鍔の元まで突き刺さっていた。
その傷口から、気泡を立てたどろどろした血が一筋流れ出した。
「ガオーッ！」
メディウスは激しく悶えながら、マルスを鋭い爪で叩き落とそうとしたが、そのまま地響きを立てて、祭壇のそばの石畳の床に落ちた。
その衝撃で、神剣ファルシオンが眉間からぬけて、
「うわあっ！」
マルスは神剣ファルシオンとともに、巨大な空間の側壁の近くまで吹っ飛んだ。
そして、神剣ファルシオンがぬけた瞬間、メディウスの眉間から大量の血が勢いよく宙に向かって噴出した。
やがて、祭壇の一帯は血の海と化し、巨大な空間に生臭い血の匂いが充満した。
だが、それでもまだメディウスは生きていた。
メディウスは、血まみれになりながら、やっと立ちあがると、
「ナ、何故ダ……何故……！」
苦しそうに喘ぎ、マルスを睨みつけた。
ぞっとするようなそら恐ろしい眼だった。

「コ…コノ私ガ……ニ…人間ゴトキニ……敗レルトハ……！」
メディウスは大きくのけぞり、激しく全身を痙攣させた。
そして、二歩、三歩よろけると、
「ダガ…心セヨ……！」
再びマルスを睨みつけた。
「ヒ…人ノ心ニ……悪ノ心ガ……アル限リ……、イ…イツノ日カ……我ガ分身ハ……カ…必ズヤ……現レル……！　ヒ…光アル……限リ……、闇モ……マタ…アル……！」
だが、ここまでだった。
メディウスはかっと天を仰ぐと、全身を硬直させ、動かなくなった。
と、その巨体がぐらりと大きく傾くと、頭から祭壇の上に落ち、祭壇の闇のなかに吸われるようにして、闇のなかの地中に消えた。
やがて、祭壇の闇に静寂が戻ると、
「マルスさま！」
歴戦の戦士たちが口々にマルスの名前を叫びながら駆け寄って来た。
神竜はいつの間にかチキに戻っていた。
さらに、ジェイガンやシーダたちも駆けつけた。
「マルス……！」

シーダは涙を浮かべてマルスを見つめた。
マルスがにっこりと微笑むと、
「マルス！」
シーダは思いっきりマルスに抱きついた。
戦士たちも勝利の喜びと解放感から、互いに手を握り合い、肩を叩き合ったが、カインがマリクに寄り添っているエリスのところに行くと、戦士たちは思わずカインを見た。
「申し訳ありませぬ！」
いきなりエリスの前で土下座したからだ。
「命に代えても……城と国を守らねばならぬのに……！　エリスさまをお守りしなければならぬのに……！　それなのに……！　このようなことになって……！」
カインは声を震わせて泣いた。
「カイン……」
エリスは優しく語りかけた。
「自分をそんなに責めてはいけないわ。あなたは、アリティアを守るために、そして、わたしを守るために、命をかけてアカネイア軍と戦ってくれたわ。そのことは、わたしが一番よく知っている」
そして、エリスはカインの手を握り締めた。



「ありがとう。あなたは、わたしたちの誇りよ」
その言葉に、カインはさらに声をあげて泣いた。
と、突然、巨大な空間が、目映い光に包まれた。
やがて、その光は戦士たちのそばの一点に集中して消えた。
その光が消えたところに、真紅の法衣をまとった、白髪白髯の老人が立っていた。
大賢者ガトーだった。
北の大地の氷竜神殿から、瞬時にして時空を越えて来たのだ。
「ガトーさま……！」
マルスはその前に進み出ると、
「マルスよ……！　勇敢なるアリティアの王子よ……！」
ガトーは万感の思いで語りかけた。
「そなたの働きによって、暗黒竜王メディウスは、完全に滅びた……！　メディウスの僕たる地竜族もまた、闇のなかへと消えた……！　そして、封印の楯がある限り、彼らはもう二度と目覚めることはないであろう……！　マルスよ……！　勇者アンリの子孫にして、選ばれし光の王子よ……！　そなたは、人類を救い、我ら竜族をも救ってくれた……！　そなたの活躍は、勇者アンリとともに、永久に、語り継がれるだろう……！」――と。

終章

アカネイア暦六〇八年、六の月の二二の日――。
アリティアの空は爽やかに晴れあがっていた。
そして、王都は近郊の町や村から集まった四万の人々で賑わっていた。
この日は、太陽への感謝と過酷な労働の辛さを忘れるための夏至祭だったが、例年の夏至祭よりもはるかに人出が多いのは、この夏至祭に合わせて、暗黒竜王メディウスを倒したマルスの率いる遠征隊が凱旋するからだった。
正午が近くなると市場や露店に群がっていた人々や、広場や辻で旅芸人や曲芸団の芸を見物していた人々が、ぞろぞろと移動を始め、凱旋門からアンリの広場、大聖堂へと続くアンリ大路の両側をびっしりと埋めた。
やがて、凱旋門を埋めた人々から、大歓声があがった。
遠征隊が跳ね橋を渡って凱旋門に入って来たのだ。

先頭は六〇名の歩兵部隊だった。

そのあとに蹄音を響かせながら、アリティアの英雄であるアラン・アルギス、カイン・グサスト、ドーガ・ロドリオ、ゴードン・ルセスのアリティア騎士団の四天王が来ると、歓声は一際大きくなった。

人波のなかに、アランの雄姿を見ながら、涙を流している男がいた。

アランの実弟でキロワの郷士であるアグリ・アルギスだった。

アグリは、不治の病に侵されているアランとは、もう二度と生きては会えない——そう覚悟して、アカネイアに遠征して行ったアランを見送った。

だが、そのアランが無事にアリティアに帰還したのだ。

アグリには奇跡が起こったとしか思えなかった。

顔色はたしかに青くて優れないが、誇りと自信に満ちた兄の姿を、アグリは溢れ出る涙を拭おうともせず、限りない尊敬と憧憬の熱い眼差しで見つめていた。

四天王のあとに、ルーク・カザス、ロディ・ベルソン、ライアン・ルセス、セシル・モザリーら若き騎士の笑顔があった。

グルニアの遠征隊に選抜されたときにはまだほんの駆け出しだったが、苦難の旅と壮絶な戦いを経験した今、四人は素晴らしい騎士に成長していた。

王子マルスとタリス国の王女シーダが来ると、大歓声は最高潮に達した。

マルスの笑顔には、神々しいばかりの輝きがあった。
手を振って歓呼に応えると、人々は拳をあげてマルスの名前を連呼した。
そのあとに王女エリスと恋人の聖都カダインの若き指導者だったマリク・ガイソンが、軍師エルキド・ジェイガンとアカネイアの王妃ニーナが、その側近であるシスターのリンダ・ミロアとアカネイアの騎士ジョルジュ・ライオが、タリス国の武将オグマ・スビルがつぎつぎと続いた。
さらに、神竜族の王ナーガの娘チキが、竜人族のチェイニー・ブライルとチキの守役のメオラ・バヌトゥが、旅芸人フィーナ・セダカが、オグマの弟分のサムトー・リンが、元猟師のカシム・ベイロが、オレルアンの騎士ロシェ・ウスタが続いた。
チキとチェイニーとバヌトゥの三人は、アリティア城でマルスたちと一緒に暮らすことになっていた。
ニーナは一〇日ほどアリティア城に滞在して旅の疲れを癒してから、リンダとジョルジュを連れて、聖騎士ミディア・オーエンとその恋人で騎士のアストリア・ハイゼンが待っている王都パレスに帰国することになっていて、タリス国に帰国するシーダとオグマとサムトーも、アカネイアの宿場町レフカンディまでニーナの一行に同行することになっていた。
そして、この秋に、マルスがタリス王国を訪れ、シーダの父であるタリス国王に会い、シーダとの結婚の許しを正式に得ることになっている。

　また、カシム、ロシェ、フィーナの三人もニーナ王妃に同行して、それぞれの故郷へ帰ることになっていた。
　最後部は六〇名の輸送部隊だった。

　五の月の下旬――。
　暗黒竜王メディウスを倒したマルスたちは、マケドニアの旧都に凱旋（がいせん）した。
　その翌日、旧都の大聖堂で、シスターのレナ・クロードとジュリアン・ミノザの結婚式が厳（おごそ）かに行われた。
　そして、数日後、王女ミネルバとマリア、パオラとカチュアの姉妹、レナの実兄のマチス・クロード、新婚のレナとジュリアン、ジュリアンの弟分のリカード・スキル、レナの弟子のマリーシア・ロキシ、元猟師だったウォレン・スミラらに見送られて、マルスたちの部隊はマケドニアの旧都を出発して、グルニアへ向かった。

　海峡を越えて部隊がグルニアの港町オルベルンに着いたのは六の月の初旬だった。
　部隊はオルベルンに数日滞在すると、シリウスと別れてグルニア街道を北上した。
　別れ際に、マルスはシリウスに尋ねた。
「カミュ殿――」

カミュ――と呼ばれて、シリウスは否定しなかった。
「もうその仮面をとってもよいのではないですか？　ニーナ王妃もそのことを望んでいるかもしれない」
「たしかに、仮面の役割は終わった」
シリウスは答えた。
「だが、ハーディンを失ったばかりのニーナ王妃の前で、それはできぬ。それに、わたしには、グルニア王家の遺児であるユベロ王子とユミナ王女の後見人として、グルニア国を再建しなければならぬ使命がある。そして、王妃にも、同じようにアカネイア国を再建しなければならぬ使命がある。しかし、お互いがその使命を果たし終えたとき、わたしはグレイユ・カミュとして、王都パレスを訪れるつもりだ」――と。

孤高の剣士ナバール・ジョルダとはグルニア北部の小さな村で別れた。
長い苦難の旅をともにしたことで、宿敵オグマとの決着はナバールにとってもオグマにとっても、どうでもよくなっていた。
ナバールは、再び流浪の旅を続けるのだという。
また、カシミヤの町でマルスは、闘技場と賭博場の女経営者であるマライヤ・ガイのところに滞在していた海賊の頭領スペリオ・レイソルとも再会した。

さらに、部隊はグルニア街道を北上して、カダイン街道に出ると、マルスたちは聖都カダインに帰国する大司祭ゴオリィ・ウェンデルとその後継者となった高弟エルレーン・カルロスの二人に別れを告げた――。

遠征隊がアンリの広場を過ぎて、大聖堂に到着すると、そのあとを追って来た人の波が大聖堂前の広場をびっしりと埋めた。

大聖堂の前で、アリティア国とアリティア城を任されていた元騎士で武器商のアベル・スカロフと、その恋人でタルサ三姉妹の末妹のエスト・タルサが、大司教グルノワ卿(きょう)や王都の実力者とともにマルスたちを出迎えた。

また、大聖堂のなかに入ると、大聖堂の巨大な回廊を埋めていた国中から集まった町や村の長や長老たち二〇〇〇名が盛大な拍手でマルスたちを迎えた。

やがて、マルスが大聖堂の一番奥の礼拝堂に立つと、

カーン、カーン、カーン……。

大聖堂の鐘楼(しょうろう)の鐘が王都に鳴り響いた。

正午を告げるとともに、凱旋の儀式の始まりを告げる鐘の音でもあった。

半時に及ぶ儀式が終わると、お祈りが始まる。

それが終わると、王女エリスとマリクの婚約が発表される手順になっていた。

この日、王都は夜が更けるまで、凱旋の喜びに沸いたという。

そして、後年、この六の月の二二の日の夏至祭が、マルスの勇気と功績を讃(たた)え、マルス祭と呼ばれるようになったという——。

——〔完〕——



スーパークエスト文庫

ファイアーエムブレム
紋章の謎

VOL.4

1996年4月30日　初版第1刷発行
定価はカバーに表示してあります。
著　者
高屋敷英夫
編　集
芦田宏一（MASK）
久保雅一（小学館）
発行者
田中一喜
発行所
株式会社　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2－3－1
編集 03(3230)5998　　販売 03(3230)5739
印刷所
共同印刷株式会社

©1990, 1993 Nintendo
©HIDEO TAKAYASHIKI　1996 Printed in Japan
Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
●造本には十分注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
制 作 部　TEL　0120-336-082

ISBN4-09-440224-1

小説／**高屋敷英夫**（たかやしきひでお）

岩手県出身。脚本家。『ルパン三世』『あしたのジョー』『めぞん一刻』映画『はだしのゲン』『火の鳥』シリーズ、『がんばれ!!タブチくん!!』シリーズなど数多くの人気アニメやアイドルドラマの脚本を手がける。著書に『小説スケバン刑事上・下』『小説ドラゴンクエスト』シリーズなど。

イラスト／**おち よしひこ**

昭和36年9月26日、東京都に生まれる。昭和59年、『ゾイド創世紀』（月刊コロコロコミック）でデビュー。代表作『Go！Go！ミニ四ファイター』『スーパービックリマン』ほか。

少年たちのバイブル
コロコロコミック
毎月15日発売!!
ガッツな笑いとド迫力!!!

小説／**高屋敷英夫**（たかやしきひでお）

岩手県出身。脚本家。『ルパン三世』『あしたのジョー』『めぞん一刻』映画『はだしのゲン』『火の鳥』シリーズ、『がんばれ!!タブチくん!!』シリーズなど数多くの人気アニメやアイドルドラマの脚本を手がける。著書に『小説スケバン刑事上・下』『小説ドラゴンクエスト』シリーズなど。

イラスト／**おち よしひこ**

昭和36年９月26日、東京都に生まれる。昭和59年、『ゾイド創世紀』（月刊コロコロコミック）でデビュー。代表作『Go！Go！ミニ四ファイター』『スーパービックリマン』ほか。



ISBN4-09-440224-1

C0193 P550E

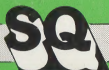


定価550円
（本体534円）



SUPER QUEST BUNKO

スーパークエスト文庫



最新刊・大好評発売中！

八剣伝 VOL・3
小説／大野木 寛
イラスト／美樹本晴彦
八本の剣が織りなす本格ファンタジー

銀の腕輪のユーリ VOL・2
小説／和智正喜
イラスト／今井修司
魔法修行中の少女ユーリの冒険物語

マクロス プラス VOL・1
小説／信本敬子
イラスト／摩砂雪
OVA＆劇場の感動再び！

聖剣エクスカリバー VOL・3
神々の黄昏
小説／渓 由葵夫
イラスト／木村明広
奇想天外RPGロマン第3弾！！

新桃太郎伝説（上巻）（下巻）
監修／さくま あきら
小説／濱崎達人
イラスト／土居孝幸
超人気RPG、待望のノベライズ！



ISBN4-09-440224-1

C0193 P550E



定価550円
(本体534円)



SUPER QUEST BUNKO